
悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

【NNコード】

Z0858Q

【作者名】

かがみん

【あらすじ】

次元世界に舞台を移した、ソール11遊星主と護、凱達の戦いはなのは達の参戦を得て新たな局面へ。ジエネシックと魔法、神話と伝説が交錯するシリーズ第三弾。

オープニング

リリカル ファンタジー 幻想

抱きしめた 小さな願い
熱く燃やせ 奇跡を起こせ

傷ついた 貴女の涙

助けたいよ ファンタジー 遥かな次元

リリカル ファンタジー 幻想

そうさ夢だけは

誰も奪えない 空への翼だから

リリカルなのは

少女はみんな

リリカルなのは

小さな勇者 oh yeah

リリカルなのは

エースのよう

リリカルなのは

今こそ 羽ばたけ

どこまでも 輝く空に

なのはだけの 魔法を目指せ

その日まで 負けられないさ

悲しみ秘め ファンタジー 挑んだバトル

リリカル ファンタジー 幻想

誰かを支える

友情という翼拡げ 飛んでゆけ

リリカルなのは

少女はみんな

リリカルなのは
孤独な天使 Oh yeah

リリカルなのは
エースは不屈
リリカルなのは
今こそ 騅え
リリカル幻想 ファンタジー

そうさ 夢じやない

誰も目指して 約束の空だから

リリカルなのは
少女はみんな
リリカルなのは
未来のエース Oh yeah
リリカルなのは
魔導師の杖で
リリカルなのは
今こそ 撃ち抜け

前回までのあらすじ

三重連太陽系で、ソール11遊星主はGGGとジェイアーカーに優勢な戦いを演じていた。しかし獅子王凱しおうがいがジェネシック・ギャレオンとフュージョンする事で劣勢は挽回する。

ジェネシックに脅威を覚えた遊星主のリーダー、アベルはピサ・ソールの爆発を目くらましに逃走を図るが、それが時空間に亀裂を生み出し、その衝撃から、遊星主と凱達は別の世界へと飛ばされてしまつ。

彼らが落ちた世界は魔法が日常的に存在する宇宙 次元世界であった。

そこでは第一管理世界ミッドチルダの存亡をかけて、時空管理局とドクター・スカリエッティが争っている最中だった。

この戦いに遊星主は介入し、甦った古代ベルカの戦艦『聖王のゆりかご』は崩壊、スカリエッティは遊星主ピア・デケムに殺害される。

さらに、聖王ヴィヴィオが遊星主に拉致され、何処かに消え去った。それからすぐに、次元航行部隊のクロノ・ハラオウン提督が新たに出現した人工天体を確認した。

それこそ、遊星主のベースであるピサ・ソールである。遊星主の一人にして、物質復元装置……。だが、彼らは行動を起こさず、じつと身を潜め続けていた。

スカリエッティの事件から間もなく、機動六課の八神はやて隊長は遊星主に危機感を抱き、新設部隊の計画を管理局地上本部に提案した。

それが、機動勇者隊。主に六課のメンバーに獅子王凱、卯都木命、
天海護あまみまもる、ルネ・カーディフ・獅子王、ソルダートーを加えた精銳部
隊である。クロノ提督やナカジマ陸佐らの協力を得て、普段は対立
しがちな陸（地上部隊）と海（航行部隊）が手を携えて誕生した組
織だ。

はやは三重連太陽系のオーバーテクノロジーを調べ、新装備の開
発にも着手。遊星主にたいする有効な技術の研究が進められた。

一方、先の戦いで異変が生じた六課分隊長高町なのはのインテリジ
エント・デバイス、レイジングハートは、管理局・本局において修
復と再調整を受けていた。それも完了し、レイジングハートを再び
手にするのは、三重連太陽系に生まれたGストーンが融合したレ
イジングハートは、新しい機構を加えられてレイジングハート・ジ
エネシスとして新生した。

同刻・獅子王凱は赤の星で作り出された宇宙最強の戦艦ジェイアー
クのコンピューター、『トモロ』を目覚めさせる作業に没頭してい
た。アベルが三重連太陽系で捕らえた生体兵器アルマ・戒道幾巳に、
彼しか知らぬ緊急停止コードを用いてジェイアークの動力を遮断し
ていたのである。凱はエヴオリューターの能力を使って停止コードを
解除する試みに挑んだ。

ジェイアークが復活できれば、戦況は有利になる。Jは凱に託した。

だが、JS事件終結から一週間にならうかといふその日。ミッドチ
ルダでは、衛星軌道上の拘置所が何者かに襲撃された事が報告され
、その後、ミッドチルダ各地にスカリエット・ティの手足となつて行動
したガジェット・ドローンが出現し、人々を困惑させるのだった。
全てのガジェットは事件終結時に停止したはずでは……！？

疑問を解消する暇もなく、首都クラナガン周辺を警備していた隊員達は、破壊活動をはじめるガジェット群を迎撃つ事となつた。その中に、はやての守護騎士《烈火の将》シグナムもいた。

かくして、戦いの幕は切つて落とされたのである……

第一話 RED ALERT（前書き）

登場人物

獅子王 凱 GGG機動隊長。超人工ヴォリューダー。

高町なのは 魔導師。『エース・オブ・エース』

天海護 浄解能力者。カインの子ラティオ。

ジェネシック・ギャレオン（ギャレオン） ジェネシック・ガオガイガーの中核をなす、宇宙メカラライオン。

フェイト・T・ハラオウン 執務官。『金の閃光』

卯都木命 GGGオペレーター。凱の恋人。

ヴィヴィオ 古代ベルカの聖王。

ルネ・カーディフ・獅子王 Gストーンのサイボーグ。凱のいとこ。

ソルダート・J サイボーグ戦士。アルマの守護者。

トモロ ジエイアードに搭載された生体コンピューター。

アベル 遊星主のリーダー格。赤の星の指導者。

バルパレー・パ 遊星主。

八神はやて 機動六課創設者。『最後の夜天の主』

リインフォース・II はやての融合騎。『蒼天を渡る祝福の風』

ヴィータ 魔導師。『鉄槌の騎士』

シグナム 魔導師。『剣の騎士』

シャマル 医師。『湖の騎士』

ザフィーラ 『盾の守護獣』

クロノ・ハラオウン 時空管理局提督。フェイトの義兄。

スバル、ティアナ、エリオ、キヤロ 機動六課フォワード。なのはの教え子たち。

戒道幾巳 生体兵器アルマ。浄解能力者。

第一話 RED ALERT

……第一種警戒警報発令。

第一管理世界ニッシュルダの首都、クラナガン。

そこには、時空管理局地上本部がある。地上部隊の全てを統轄する部局で、本局が海……次元航行部隊のベースならば、こちらは陸……地上部隊のベースともいえた。

クラナガンは政治的、軍事的に重要な施設や人物が集まる都市であり、その防衛には多くの労力と技術が注ぎ込まれていたのだ。それゆえに、陸士隊戦力の保有数は、他の世界の比ではない。

今から一週間以上前、地上本部は大規模なテロ攻撃を受けた。魔法攻撃には万全な体勢を整えた地上本部は、質量兵器という盲点を突かれ手酷い被害にあう。最も、テロの首謀者スカリエッティにとつては単なるデモンストレーション以外ではなかつたのだが。しかし、この事件で地上本部はプライドを傷つけられた。

地上の守護者を以つて任ずる者が、次元犯罪者のテロを許したのだから……

苦い思いを抱いた地上部隊の責任者達は、再度のテロリズムに備え、防衛機構を強化した。

そして、それに挑戦するが如く、再び同じ敵が現れたのだ。

地上本部に緊張が走る。モニターには、以前とほとんど違わぬ光景が映し出されていた。

Ｊ・スカリエッティが目的遂行のために操っていた機械兵器。ガジエット・ドローンだ。

触手を伸ばしたカプセル型のガジェット工型。全翼型航空機のガジエットエリエ型。その大型機のエリエ型。

その集団が、地上本部に攻撃してきた。まさに、ＪＳ事件の再現だ。その時にはバリア内に侵入され、甚大な危機に陥つた。まだ記憶に新しい、悪夢のような事態だ。

「なんで……」

ガジェットの出現は、ハ神はやてをはなはだ困惑させた。

ガジェットは、スカリエッティや戦闘機人ウーノ達が倒された時点で全機が停止していたはずだ。仮に秘密の場所に隠匿されていたとしても、勝手に起動するとは考えにくい。

「ガジェットの総数、三百～四百と推定されます」

と、はやてに報告される。

ガジェット群はクラナガン、港湾地帯、ベルカ自治領に別れて襲撃を行つていた。

「ガジェットエリエ型が本部に向かってきます」

ズズンッと衝撃が伝わる。建物が震え轟音が響く。

地上本部は攻撃に耐えた。

前回のスカリエット襲撃事件に鑑み、管理局は対質量兵器の為のセキュリティを強化するよう改装が施された。ガジェットの熱線や体当たりにも対応した多重結界により、地上本部の陥落は難しくなつていた。

「地上本部機動部隊、ガジェット群を迎撃中。各地より応援要請が届いています」

「本部の人員はあんまり割かれへんが……」

それでもやはやは非番や待機中の隊員を増援に送り込んだ。

「なるべく、苦戦している場所に送つたつて」

「了解しました」

オペレーターを担当するアルトが命令を部隊に伝えた。

空戦魔導師の数は少ないが、JS事件で活躍した精銳達である。きっと地上部隊の窮状を救つてくれるはずだ。

「ハ神長官。あのガジェット……何かおかしく感じませんか?」

若い士官である、機動勇者隊副官・整備部隊長グリフィス・ロウランが、首を捻つてはやてに言つた。

「どういう事や?」

怪訝そうに訊かれ、グリフィスは躊躇いがちに答えた。

「なんとこゝか、色素が薄いというか、くすんだような機体のとこ

かく以前に見た物とは違つ印象が　　」

グリフィスは艦艇や兵器に詳しく、はやての部下の中でも造詣が深いほうだ。その彼は、田の前のガジェットに違和感を覚えた。とは言え、何かがおかしいと思うのだが、はつきりと違いを指摘出来ずにいる。まるで幻術にかけられたかのようなもどかしいが、つまく説明できそうにない。

(色合いが違つ……幻術……?)

はやてが視線をさ迷わせて考えこんだ時、モニターにウインドが開いた。

『それは、レプリジンかもしだせん……』

護がそう、指摘した。彼はいま、ジエネシックマシンの整備のため、地下格納庫で作業している最中である。ガジェットの映像をそこから見ていたのだが、記録されたガジェットの情報と見比べて、それが複製された機械だという結論に護は達した。

「ここつらが、遊星主が複製させたといつ、レプリジン……」

はやは得心しながら思考を巡らせた。

奴らはガジェットを複製して、攻撃をしかけてきた。これは遊星主の宣戦布告なんやな！

「連中め。つちりとやる氣になつたんやな……」

望むところと、はやての闘志は燃え上がった。

「ついで地上本部を攻撃するところ」とは

「遊星主め。」のミッドチルダを制圧するつもりか」

護は今までの戦いを振り返った。遊星主はガジェット群のみで勝負を決しようとは考えていまい。

このガジェット群は囮……『コイではあるまいか？』

（戦力を分散させる陽動？）

自分達をじりじりとくべきつけにし、アベル等は別の場所で行動に移す

……

「本局より緊急通信」

「なんやで」

次元の海に浮かぶ時空管理局本局、そこに遊星主とおぼしき者が現れたといつ。さらにガジェットも一緒に侵入したらしい。

「本局からの応援は難しなったなあ

と、はやてがこぼした。

あちらには海の精銳達がいる。フェイトたち執務官やなのはも揃っている。陥ちる可能性は少ない。それよりも、ミッドチルダの地上だ。

ここでは奴らの侵攻を防がな、せつかく守った地上の平和が台なしや。はやては、ガジェット群の一掃を改めて各部隊に指令した。

「複製とは言え、ガジェットなんぞAMFさえ対策とれば……」

勝てる。

私達のストライカーが経験を積んだいまならば。はやての思い通り、各地に散らばったガジェット群は、魔導師達の活躍で着実に数を減らしていっている。

(けど、油断はでけへん)

いざとなれば、はやて自身が魔導騎士として出陣するつもりであった。リンゴが本局にいるのがネックだが、それでも夜天の主の力は大した戦力になるだろう。

『八神長官、お願ひがあります』

と、護がはやてに言つてきた。

『僕にも出撃の許可をくださいー!』

「なんやで……!?

思わぬ訴えに、はやて達は目を丸くした。

『ギャレオンの修復は完了しています。僕達も皆さんと一緒に戦わせてください!』

「でも、あんた。危険やで　」

ギャレオンは対遊星主で切り札になる。そう、告げたのは護自身だ。

それなのにギヤレオンを出撃せよ!』

『たぶんガジェットは遊星主の囮です。一刻も早く撃退して、主力の襲撃に備えないと』

「その日、覚悟は決めとるんやな……」

はやは通信モニターを覗きこんだ。

『僕にも戦う力があります。だからお願ひします。世界を護る事に協力させてください!…!』

真摯な護の言葉に、はやはの心が揺れた。

「……よし」

意を決してはやは命じた。

「天海護密隊員に、ガジェット迎撃に加わる許可を下ります」

『ありがとうございます』

GGG式の敬礼をしながら、護は嬉しそうに言った。
護は急いでギヤレオンが納まつた格納庫へ走る。

「ギヤレオン。僕達の出番だよ」

鋼鉄の獅子は優しげな眼差しで、護を見下ろした。領きの色が目に浮かんだような気がして、護は安堵する。

なにしろ、遊星主そのものとの戦いではないのだから、拒否された

うどいじよつもない。

だが、ギャレオンは護の朋友だ。これまでも、苦しい時こそ力を貸してくれた、強力な味方だったのだから。

今度もまた僕達と共に立ち上がり、ギャレオン。

護は「行こう」と、促すと、ギャレオンの口蓋部に収まった。未だ最終調整段階のジョンネシックマシンを残し、黄金の獅子は発進ポートへ移送される。

護の意思を受け、ギャレオンがスラスターを噴かせた。曇天の空へと飛び立つ。

「あの日の輝き」

はやては微笑しながら、その姿を見送っていた。

あの、クリスマス・イブの夜。初めて夜天の主に目覚めた日に、はやてが見た輝き。

「あん時のなのはちゃんと同じ輝きやつたな……」

ひたむきな、強い意思を宿した瞳。

「機動部隊へ」

機動部隊は、遊星主戦を考慮して、新たに編成された部隊である。陸戦／空戦魔導師の混成チームで、六課時のスターズ、ライトーング分隊をもとに、十一の各小隊で構成されていた。

第一～第二はなのはとフェイトが受け持つ。

「護くんのサポートを、最大限にお願いや」

指令に応え、機動部隊がギャレオンを追跡した。

さらに、研究部には、ギャレオンの性能を計測するよう命じる。対遊星主戦で、どれだけの能力を發揮するのか。この眼で確かめたい。

機動勇者隊スタッフの注目が、護とギャレオンに集まつた。

一方。警ら中のシグナムは、ガジェット・ドローンエイ型と交戦していた。

「紫電一閃ツ」

雨天。レヴァンティンが全翼機を両断する。

斬られたガジェットが、光の粒に分解され消滅した。

「複製……か」

港湾地帯上空に浮かぶレプリジン・ガジェットに、鋭い視線を投げ掛ける。
色が、薄い。

「だが、能力や耐久性はオリジンと変わらぬようだな」

カートリッジをロード。

レヴァンティンが紅い光輝を纏う。

熱線をかい潜り、炎の魔剣を振るう。ガジェットの熱線は、雲の中では威力を低下させていた。シグナムの防御魔法でも充分に防げる。

そして。火竜フリードリヒに騎乗した機動部隊のキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンティアルが少し離れた空域で、ガジェットを撃退している。JS事件で頼もしく成長した一人は、見事に戦っていた。

「良いコンビだ……」

ふつと、シグナムは微笑んだ。

「もはや私が教える事など、ないのかもしけんな。テスタロッサ…

…」

咳きつつ。斬撃をガジェットへと振り下ろした。一機が消える。数ではガジェット群が上だが、全く不利を感じさせない戦いぶりだった。

そのあとも、シグナムはさらに、剣を振るい続けるのだった。

同時刻。

ヴィータは、ガジェット工型の集団に襲われていた。その数は八十機あまり。

くろがねの伯爵グラーフアイゼンが、魔力の鋼球を打ち出す。

四方からガジェットに迫る。高速の弾がガジェットを穿つ……かに見えた瞬間。機体を守るアンチ・マギリング・フィールドが魔力を失効させ、鋼球は霧散。それを目撃したヴィータは舌打ちする。

「また、AMFかよ」

「ゆりか」内で味わい尽くしたといふのに。気に入らない。

「ヴィータ副隊長！！」

触手のような器官　アームケーブルの一撃を避けたヴィータの隣から、スバル・ナカジマが飛び出してきた。

マッハキャリバーを疾走させ、ぐんぐんガジェットに向かう。アームケーブルがしなって、スバルを襲う。

機械の鞭が当たったスバルは、音もなく焼き消える。機動部隊のティアナ・ランスターによる幻術だ。

本物のスバルは回り込んだ下から蹴りを食らわす。加速した足が巨大な無人兵器を後方に飛ばす。すかさずスバルが拳を胴体の真ん中に打つ。

リボルバー・ナックルが一直線に打ち込まれる。

ガジェットはAMFを発動。魔力結合を解く無効化フィールドは近代ベルカ式魔法といえども効果はあるはずだった。

だが！

スバルの拳はAMFをすり抜け、本体にヒットした。

魔力は最初から使用されてはいない。

振動破碎と呼ばれる、スバル固有の『IS』先天技能による一撃だった。

それは機械などに最も効果を表わす。

ガジェットは内臓機器を粉碎され、消滅した。

「つたぐ、弟子に負けたられるかよ」

若い一人に、ヴィータは称賛と悔しさのないまぜになつた念を覚える。

「アイゼン！！」

《Jawoh!》

カートリッジを一発消費。

「ラケー・テン……ハンマー……！」

まばゆいジョットを噴射して、ドリルとなつたグラーフアイゼンが激しく回転する。

勢いをつけて、ヴィータはアイゼンをガジェットの頭部に叩きつける。

「AMF」と

凄まじい轟音がして、ドリルが表面にめり込む。装甲がひしゃげ、内部が削られる。部品が飛び散り、スパークして火が舞う。

「ぶつ潰す！！」

バットのように、振り抜いた。

ガジェットはぐしゃっと、上部を潰されながら、吹っ飛んでいき、

亞音速で仲間に衝突する。そして消えた。

守護騎士で最も破壊力を誇る、鉄槌の騎士ヴィータの力は、なお健在だった。

「凄い……！」

スバル達は畏敬の思いに打たれながら、そのあとも彼女と共にガジエット群を倒していく。

古代の伝統を伝えるベルカ自治領、自然に囲まれたアルトセイム地方では、聖王教会の者達と機動勇者隊とが手を携えて、ガジエット群と戦っていた。

聖王教会で管理局にも名を連ねる騎士カリム・グラシアが指揮を取り、戦闘地域においてはシャッハ・ヌエラらが近代ベルカ式デバイスを存分に振るう。

いつもは慎ましやかなシスターのシャッハだが、このような時は率先して敵にぶつかる。

シグナムと互角と言われる彼女は、打撃系に特化したベルカ式を駆使して、ガジエット群を撃破していく。

皆が戦っている。

早く。早く。

護は戦場へと、急いだ。

第一話 RED ALERT（後書き）

機動勇者隊 組織図

長官

八神はやて

機動部隊

総隊長

獅子王凱

第一小隊 隊長

高町なのは

同・副隊長
ヴィータ

第三小隊 隊長

フェイド・T・ハラオウン

同・副隊長
シグナム

第四小隊～第二小隊

隊長

ゲンヤ・ナカジマ、ほか

整備部隊

隊長

グリフィス・ロウラン

同・副隊長

アルト・クラエッタ

研究部

主任

シャリオ・フィニーノ

医療部

同・副主任
リインフォースエイ

主任
シャマル

通信部

主任
ルキノ・リリエ

輸送部隊

隊長

ヴァイス・グランセニッツ

航行部隊

隊長

クロノ・ハラオウン

第一話 その名はGガイガー！！（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ガイガー」

無敵王トライゼノン

「突き進め戦艦、暁」

第一話 その名はGガイガー！！

時空管理局地上本部。

結界越しに、ガジェットエイ型の放つ熱線が見えた。光学兵器のビームは対物理障壁に吸収され、散華する。しかし、その衝撃だけは結界内部にも浸透し、護のいる屋上ポートを揺らせた。

ギャレオンは数十キロ上昇したあと、停止した。
そこは結界と外部が接するぎりぎりのラインだ。

護は本部に通信を送る。

すぐに結界の一部が解除され、ギャレオンがその外へ飛び出した。わずか数秒の出来事だった。結界はまた元に戻る。

(よしー)

気合いを入れた護は、己の力を解放する。

髪が逆立ち、全身が淡く緑色に発光する。背には羽が生まれ、まばゆいオーラを発していた。

はやてはおどき話に出てくる妖精のようだと思つた。

浄解モードになれば肉体的にも強靭となる。

そして、護達はガジェットとの攻防する戦場に踏み入った。

天を、鋼鉄の獅子が駆ける。

ギャレオンの機動力は目を瞠みはらせた。

ガジェットエイ型を上空から、鋭い爪で切り裂き、大型のエイ型すらも体当たりで打ち落とす。護も本来の力を発揮して戦つた。攻撃を防護の左手で防ぎ、反撃は破壊の右手から強力な念動力を繰り出し、ガジェットを叩く。

(凱兄ちゃんは)

ギャレオンの傍で戦いながら、護は思考していた。

(もう一人の僕がどうしたかを、教えてくれた……)

数十機のガジェットの攻撃を捌く。

(レプリジンの護にできたのなら、オリジンの護にも、できるはず……！－！)

決意を固めた。

(もう一人の僕が、果たし得なかつた思いを。僕は果たす)

ギャレオンがガジェットの翼を碎いた。

護は数少ないエイ型から攻撃を受けるが、体内をサイキックで破壊する。

「ギャレオン！－！」

護は叫んだ。

「凱兄ちゃんのかわりに……僕に君の本当の力を貸して!」

信頼をこめて護は言った。

「僕が真にカインの息子なら、君の力を受け止められるはず」

ギャレオンは咆哮を以って返答した。拒否する反応ではない。

「ギャレオン……！」

護は嬉しそうに頷いた。

ギャレオンが動きを止め、準備駆動に入る。護は距離を取つて叫ぶ。

「行くよつ、 フュージョンーー！」

護の体が、ギャレオンの内部に収容される。

「食べられた……ー？」

それを見た者達が、ギョッとした顔になつた。

少年はギャレオン内部へと運ばれ、複雑な機器やケーブルと神経を接続される。ギャレオンと一体化した護の感覚は、今までよりも研ぎ澄まされたものになつた。

（これが……フュージョン。凱兄ちゃんはこんなふうに世界を見ていたんだ……）

ギャレオンが変形する。

獅子から人型へ。システムが組み換わり巨大なメカノトイドへと、

姿を変える。

『ガイ……ガーッ！』

額にGストーンが鮮やかに輝いた。

「ほんまに巨大ロボットや」

と、はやては呆然となる。

フュージョン成功。巨人の身体を手に入れた護は、建物を避けて広い道路の上に降り立つた。

「もう一人の僕にはできなかつたこと……」

護の宇宙で、レプリジン・護はパピヨン・ノワールの命を奪つた。なおかつ、レプリジン・ガオガイガーにフュージョンし、凱と戦闘すら行つたのである。遊星主パルパレー・パに操られていたとはい、それはレプリジンにとって、償いきれぬ過ちだつたに違ひない。彼は本心ではその力を悪いことには使いたくはなかつただろう、とオリジンの彼は思つ。

だから。今度は僕が、君のかわりに勇者の力を、冷酷な殺戮ではなく、誰かを護るために使ってみせる。

「そのためにも、遊星主を……！」

ジェネシック・ガイガーは、ガジェットに向かつた。

「ジョネシック・クロウ」

腕部に装備された鋼鉄の爪が、セットされる。

ガイガーは凄まじい速度でクロウを振るう。遊星主のパーティキューブすら一撃で破壊する爪だ。ガジェット群はわずかな時間で撃破されていった。

(体が軽い ガイガーの四肢が手足の延長みたいに感じる)

かつてのガイガーとは数段も出力が違う、ジェネシック・ガイガーマの猛攻。

ガイガーは魔導師達と連携し、地上本部を襲うガジェット群は次々に粉碎されていった。

「これなら本部防衛は我々でもなんとかなります。護さんは、他に苦戦している地区の援護を」

「そうやね。救援要請があちこちから届いてる。護くん」

『こちら海上隔離施設、ギンガ・ナカジマ』

そこへ、スバルの姉から緊急通信が入った。冷静な彼女にしては焦った表情だ。

『現在、ガジェット百数十機の襲撃を受け抗戦中。でも戦力が足りません。八神長官、増援を寄越してもらえませんでしょうか?』

画面の奥では、ガジェットエリート型と撃ち合ひ魔導師の姿が映つていた。

「よつしゃ、解った。いい助つ人を向かわすよ

はやては即答した。

『助かります。では』

ギンガは通信を切った。

「護くん。さつそく助けに向かつたって。座標は」

『はいっ』

旧ガイガーはステルス・ガオー装備でないと、飛行は不可能であつたが、元来、宇宙戦を想定して設計されたジェネシック・ガイガーには推進装置がついている。

ガイガーは海上隔離施設の方角に向かつて、飛翔した。

「ついでや」

と、隔離施設の近傍にいる隊員を確認する。

はやは、さらなる助つ人として、港湾地区で戦っていたシグナムを送り込む事にした。

はやてからの命を受けて、シグナムはエリオ達に現場を任せ海上隔離施設へ、飛んで行つた。

第一話 もの名はGガイガーライ（後書き）

じせりくなのはさんの出番がなれい…… フアンの方はすみません
（――）

第三話 幻惑する銀幕（前書き）

今回のイメージBGM

緑山高校・甲子園編 -

「TANKARA LOWLLEEN」

「Power Hits」

レジンド・オブ・クリスター「～はじまりの冒険者たち～

「神王の伝説」

ほか

第三話 幻惑する銀幕

ウイングロード。ナカジマ姉妹の先天魔法だ。

これにより、飛行魔法を使えぬ陸戦魔導師でも空中で戦える。

美しく優美さを持った女性だが、たおやかな外見と違い、ギンガは激しさを秘めた魔導師であつた。ブリツキキャリバーを唸らせ、勇躍してガジェットに挑む。

しかし。それでもガジェットエーワーク型の機動性に着いていくには、骨が折れた。

近代ベルカ式と、シューティングアーツの優秀な使い手たるギンガも、ガジェットの大群はさすがに手に余る攻勢だろう。

隔離施設の警護戦力では、空戦魔導師は一人で、あとはギンガと同じ陸戦型しかいない。総数二十五名の部隊である。収容者の反乱を怖れての常駐部隊とは言え、囚人への能力封印に安心してそれほど厳重な警護とは言えなかつた。警備部隊の保有戦力はB-J A Aランク止まりで、はやての部隊とは比べものにならない。いや、はやての部隊が異常なかもしけれない。普通の部隊にエース級の魔導師はそう何人もいながらだ。

囚人を逃がさないためか、戦闘より結界魔法に長けた術者が揃い、現在でもガジェットの侵攻を防ぐため建物全体に張られている。

だが、魔力のみの防御は、海上から現れたガジェットエーワーク型によりたやすく破られてしまう。

魔法を無効化するAMFだ。

テロ事件の教訓が生かされていない、と、ギンガは思った。
遠距離戦に不慣れなギンガでは、近接戦に持ち込む必要がある。
ギンガは、ウイングロードの上をブリッツキャリバーで疾走。
その上空を、大型のガジェットエリート型が飛び交っている。それが、
赤光のビームを撃ってきた。

トライシールドで弾き返し、ギンガは跳躍する。

ガジェットエリート型に蹴りをぶち込む。ガシンと、真下から衝撃を受け、ガジェットは機体制御が不安定になつた。そこへ、さらに拳撃が打ち込まれ、ガジェットは大破。そして、飛来したガジェットを踏み台に飛び、別機を葬り、ウイングロードに着地した。

(キリがないわね……)

高町空尉のように砲撃が使えれば、数機まとめて倒せるのだが……。
ほかの魔導師たちも、地道に敵機を削つていつている。

と、

背後からガジェットエリート型が襲ってきた。

ギンガは振り向きざまに攻撃をしかけようとする。が、横合いから空戦魔導師の放つた直射魔法が、ガジェットを消滅させた。

「ギンガ、ここは俺達に任せろ。お前は地上のエリート型を何とかしてやつてくれ」

「わかった」

領き、地面に降り立つ。ガジェット工型はアームケーブルをうねらせ、隔離施設に迫り来る。

ギンガは警備員に加勢し、打撃を、蹴りを、複製された機械兵器どもに浴びせかけた。

「くつ、数が多いな」

「戦闘機人よりはましよ

魔力を乗せた拳がガジェットの腹を破壊する。

『緊急、施設内にもガジェットが侵入した!』

「なんですって!?」

『ガジェットは囚人のいる房を目指している。数人、援護に来てくれ!』

悲痛な叫びが、施設警備責任者から漏れた。

「ギンガ、行つてやれ」

「えつ、でも」

「あの戦闘機人達はお前の担当だつたろう。万一、逃げ出したりしたらお前にも責任を負わされるぞ」

担当、というのは、ギンガが捕まつたナンバーズの教育等の更正の指導の事である。

同じ戦闘機人として、戦う以外の人生を教えるのが、ギンガ自身が己に課した使命であつた。前非を悔やみ、更正しようとしている戦闘機人達の新しい生を手伝いたい。その想いの強さに、ナンバーズの面々も彼女には心を許していた。また、ギンガもスカリエッティに改造を受けて悪事に手を貸したという、過ちがある。今回の教育係を引き受けたのは、その贖罪でもあるのだ。

今更、あの子達が逃げ出すとは、彼女には考えられなかつた。とは言えこんな混乱した状況である。何が起こるかわからない。懸念は、能力を封印された彼女達が、ガジェットに襲われたらひとたまりもないという事だ。無論、ルーテシアやアギトもだ。

急いでくるギンガの前に、ガジェットが立ち塞がる。ギンガは猛攻で粉碎して駆け出した。

「 ギンガ！」

宙から彼女の名を呼ぶ声が。聞き覚えがある。

一人の女性が、ガジェットエイ型を鮮やかに切り捨て、降り立つた。

「シグナム一尉！！」

ポニーテールをした切れ長の瞳の女性が、炎を宿したアームドデバイスを手に、短く伝えた。

「助勢に来た」

「助かります！」

「他にも、心強い助つ人がいるぞ！」

言いつつ、ガジェットを撃つ。硝子の様に砕け散るガジェット。

「心強い、助つ人……ですか」

と、首を傾げつつ、工型を倒す。

「お前は早く戦闘機人達の元に向かえ！」

「わかりました」

ギンガは走り出した。

シグナムはレヴァンティンを鞭状連結刃・シュランゲフォルムに変える。

火龍一閃で、薙ぎ払った。

「む、空でも苦戦しているか 」

シグナムはガジェット工型を撃碎すべく飛び立った。

護が到着すれば、戦況は有利になるはずだ。

あらかじめリミッターを解除している為、シグナムの戦闘能力は、他の隊員達の追随を許さなかつた。

その戦いぶりを、さらなる高みから眺めている影がある。

影は大型のエエエ型に佇立し、冷ややかに戦闘域を見下ろしていた。

茶色がかつた髪に、眼鏡をかけた女性である。その姿は索敵にも映らぬ、不可視の状態を維持していた。故にまだ管理局には存在を感知されていない。

「また、機動六課　」

彼女は、忌ま忌まし気に呟いた。

「やうやう、本氣を出させてもらひつわ……」

片腕を上げて、影は瞳に炎を燃やした。暗い炎だった。

私のすべてをぶち壊した機動六課には、死の制裁が必要なのよ！

「IJS発動　！」

「なつ……？」

シグナムの目の前のガジェット群が、不意に分裂した。少なくとも、彼女にはいきなりガジェットが数百に増えた様に見えた。

「増援！？　一瞬でこれだけの数を転送したのか」

馬鹿な。

ガジェット群は凄まじい大群で攻めてくる。

「どうなってるんだー!?

「ちつ、多過ぎるぞ」

「キリがねえ……!」

対応する隊員達が悲鳴混じりに叫んでいた。一方、シグナムの胸には、疑惑が芽生えた。

「もしや」

一機にレヴァンティンを振るひ。

ガジェットはふっと、煙のよつて搔き消えた。

「やはり……!」

幻術か。

だが、これ程の大規模な数を幻影で生み出せるとほ
そのような術者が敵にいるのなら、侮れんが……。

とにかく。主はやてのような広域攻撃ができる以上、風漬しに叩
くしかない。

しかし。どれが本物でどれが幻惑かわからぬ隊員達は、がむしゃら
に攻撃を繰り返し、魔力を無駄に消費しているようにも見えた。

「せいぜいガジェット相手に踊るといいわ

影は次は海上隔離施設そのものの「ントロールを掌握するべく、己のインフューレント・スキルを放とりました。

が。

「そんな幻影、僕には通じない！！」

彼方より空を駆け抜け抜けてきた白い巨人が、思わず一撃を彼女に与える。

『なつ……』

そう。ジェネシック・ガイガーが、ようやく隔離施設に到着したのだつた。

護は、ギャレオンと知覚を共有している。そのセンサーが、確実に姿なき襲撃者を捉えた。

巨大な爪が、空間の一点を屈ぐ。

「きやあっー？」

危うく直撃するところだった。回避は成功したが、掠った衝撃で彼女の不可視の力が解除されてしまう。

「そんな……！？ 私のシルバー・カーテンが……」

彼女が乗っていたガジェットエイエイ型が、引き裂かれる。消滅した。

「しまつ」

彼女に飛行能力はない。たちまち墜落していく。
護は彼女を捕らえようとする。

『待てっ』

「ちいい！！」

彼女は、手近な場所に浮かんだガジェットを操作し、どうにか上に乗る。立ち上がり、少し離れた空域にいた管理局員を一撃。確か機動六課の副隊長だったか。

「貴様は……！」

シグナムには、その女に見覚えがあった。

「そうか。衛星拘置所が襲撃を受けたとは聞いていたが……」

昂然と立つたその女に、厳しい視線を向ける。

「ふつ……」

彼女は不敵に笑った。すでに幻影は打ち破れ、ガジェット群は元の数に戻っていた。

「ナンバーズ……N〇・4……クアットロ」

また、罪業を重ねに出てきたか！

シグナムはレヴァンティンを握る手に力を入れた。

「護隊員のおかげだな……」

クラットロを戦場に引っ張りこんだガイガーが、隔離施設に降り立つ。

そしてレプリジン・ガジェットに、彼は攻撃を振るった。

いまだ、クラットロは余裕だ。シグナムは何か奥の手を隠しているのか、と訝しむ。

その頃。ギンガは隔離施設内部に入り、地下から侵入したガジェットと戦っていた。

一刻も早く、戦闘機人達の元へ行くために。

「邪魔！」

ガジェットは打撃を食らって、粒子と化して散る。

所詮は複製された雑魚機に過ぎない。

だが、数が多い。

それでも、一機一機を潰して歩く。

「あの子達は、私が、守る……」

決意を込めた拳が、機械を打ち抜いた。

隔壁を砕き、前へ。

そんな彼女にも、予想のつかぬ破壊の化身が、すぐ後に現れる
ことになる。

その事は、この場所でクアットロだけが知っていた。

第三話 幻惑する銀幕（後書き）

クア姉です。次回、他のナンバーズも出せるといいなあ。

第四話 襲撃（前編）（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー
「緊急召集」

無敵王トライゼノン
「侵略のための力エエ」

ほか

第四話 襲撃（前編）

ミッドチルダの太陽が中天に迫るついでこの時刻。

(……来る……?)

次元の海に浮かぶ、時空管理局本局。
その遙か上空に現れた巨大な影。
三層式の飛行空母。

卯都木命にとって、見覚えのある艦が本局に近づく。

(何よ、これ!?)

名状し難い感覚により、命の意識は別の空間に飛ばされたような
つた。

(幻)

それが、命の秘められた能力が発現した最初の兆候であった。

(敵が……来る)

一瞬の現象の後、命は呆然と立ち去った。

彼女は本局の食堂に向かつ途中だった。凱に食料を届けるためだ。
管理局員が通路を横切る中、命は不安を抱きながら、今起こった事を
を考えていた。

(今は、一体……)

頭の中に流れたイメージ。それはソール11遊星主の旗艦である。
ピア・デケム・ピザ
それが、本局の方に向かつて来るのである。

(……まさか……)

予知能力?

パピヨン・ノワールのセンシング・マインドの様な

(そんな、馬鹿な)

自分はそんな特別な人間ではないと、首を振った。

自分は普通の人間だ、と。

『！』

だが。再びあの感覚が訪れ、命は顔を上げた。

来

はつ、と気づいた時には手遅れだつた。本局の外側から隔壁を突き破つて、巨大な物体が突入してきたのだ。

見慣れぬ機械兵器が一体、通路に浮かんでいる。その卵型の自律機械について、管理局の人間なら正体を知つていただろうが、命にはわからない。

得体の知れない怪物にも等しい存在だった。

逃げる暇もなく。

構造材が瓦礫と化して飛び散る中、命の身体は紙の様に、吹き飛ばされた。

壁の裂け目から、命は広大な次元の海に放り出されてしまう。

『さやああつ！』

悲鳴は、誰の耳にも聞こえなかつた

「なんたることだ！」

これほどたやすく侵入を許すとは、本局のセキュリティはどうした！？

提督達は混乱し、口々に喚いた。

長い間、本局は敵から進攻を受けた経験が皆無だった事もあり、彼らがショックに陥るのも無理のない話といえよう。

何しろ地上本部がテロにあつたのも、イレギュラーな事柄だと思つていたのだから。あの事件は地上の無能者が招いた自業自得だと、海の人間達は嘲笑していたほどだ。

それが、今度は自分達が同じ様な目にあい、まさか自虐するわけにもいかず、やり場のない怒りに苛立つ者が続出した。

「すぐさま迎撃せよ！」

この危機に、冷静な態度で指揮を採つたのはクロノ・ハラオウン提督で、彼がたまたまにせよ本局に居合わせたのは皆にとつて幸いだつた。若く有能な彼の存在感が、局員達の士気を大いに高める役割を果たしたからだ。

非戦闘員を避難させ、魔導師達には、襲撃者の攻勢に対処するよう指示を与えた。

「まさか……ミッドに続いて此処にも」

ガジェット・ドローン型。

かつて広域次元犯罪者ジエイル・スカリエッティが使用した、自律型機械兵器である。純粹な魔法の産物ではなく、禁じられた質量兵器の技術が用いられた機械だ。スカリエッティは主にロストロギアレリックの探索と奪取にガジェットを使つていた。

最も、本局を襲つたガジェットは、ミッドチルダに現れたのと同様

にレプリジン、つまりは複製体だつたのだが。
レプリジンは遊星主の基地であるピサ・ソールの物質復元装置の能
力から作り出されるコピーだ。

ガジェットエ型は本局内部に侵入、破壊行為に邁進していた。いく
つもの爆発と碎音が木靈する。

本局の外に飛ばされた命を救つたのは、フェイト・T・ハラオウン
だつた。

（危なかつた　）

偶然、破壊されたブロックからすぐ近くの宙域に浮遊しているのを
発見していなければ、彼女は助からなかつただろう。次元の海に漂
い、エネルギーのうねりに翻弄される命は、もう少しで生命を失う
ところであったのだ。

金の閃光の二つ名の通り、フェイトは神速で飛び、命の身体を抱き
留めた。防御魔法のフィールドが、意識のない命を直ちに保護する。

（氣絶しているだけか……）

フェイトの腕の中で、命はぐつたりとしている。別に擦り傷以外の
外傷は見当たらないから、安静にしていれば回復するだろつ。

フェイトは命を医務室に連れて行つた。

念のため検査を受けたが、異常は感知されなかつた。

命の事を知らされた獅子王凱は、ひどくうろたえた。

恋人が危険な時に、傍で守つてあげられなかつた事が激しい後悔を呼んだ。

だが、フェイトはそんな彼に自分を責めるな、と諭した。
いま、凱はジエイアーケの為に大切な作業を行つている。遊星主と戦う為には、貴重な戦力の復活が待ち望まれているのだ。こんな状況で、四六時中恋人の身を守つてやれと、彼を非難できる者はこの本局にはいない。凱は凱にしかできないことに集中し、とフェイトは言った。

そのかわり、命は自分達が命懸けで守る、と金髪の執務官は約束した。

『わかつた……俺もなんとか一刻も早く、こいつを用意させてみせる』

「進捗具合はどうなの？」

『あと、もう少しなんだ。もう少しで、トモロの中枢にたどり着く』

凱の声には疲労が滲んでいた。驚異的なエヴォリューダーの能力とはいえ、それは凱の肉体にかなりの負担を強いる。それでも凱は、精神力を振り絞つて進めていた。勇者は諦めない。

「すまんが、急いでくれ、凱！」

「」が焦燥感を含んだ声を伝えた。

「奴ら、ジョイアーケの周辺を集中的に攻撃しはじめた」

「ジエイアークの破壊が、彼らの目的なの！？」

「おそれくな……」

Jはドックの入り口に立ち、ガジェットと交戦していた。修復作業は中止させよ、という意見が挙がったが、クロノは修復は続行する命を下した。武装隊を動員して、ジエイアークの守護を貫く構えだ。

『フエイト、君もジエイアークの護りに参加してくれ

「了解した」

フエイトは艦船ドックに駆け付け、ガジェットの撃退に加わった。

「ジエイアークの停止コマンドが解除されるまで、なんとしても持ちこたえないと……！」

AMFを展開するガジェットとの戦闘では、魔導師達が相当手こじつている様子だった。

優秀な人材を擁する次元航行部隊ではあるが、エース級の魔導師がそう何百人もいるわけではない。空戦S+ランクのなのは・フエイトや総合SSランクのはやて達の様な『化け物』レベルの魔導師を数多保有するには、様々な制約が部隊に課せられる。はやはリミッター制限によるランクの下降という苦し紛れの裏技を使って、機動六課というチームを作ったのだ。

本局にいた部隊はそこまでの戦力では無かつたが、それでもよく訓練された逸材揃いであり、フエイトの参戦もあって、徐々にガジェットを退けつつあった。なのはも自ら前に出て協力し、巧みなチー

ムワードで着実にガジェット達を倒していく。なのはとフェイトは緊急事態につき、リミッターを外す許可を得た。エース二人は、遺憾なく実力を發揮し、目覚ましい戦果をあげていた。

「ジエイアークは、私が守る！」

ソルダートーは気合いと共に、プラズマの剣を振るつた。ガジェット工型のアームケーブルが切断される。魔導師ではないため、AMFなど意味はもたない。戦闘サイボーグの蹴りが、ガジェットの胸部を易々と凹ませた。再度、光の刃を切れ込まれ、ガジェットは機能を停止した。

「むっ……！」

戦士の勘でJはそこを飛び退いた。一瞬の差が命拾いとなつた。

高速で飛来したミサイルが、先程Jのいた場所を爆破する。

「これは……！？」

ガジェットの攻撃ではない。

「ピア・デケムの艦載機か？」

その頃。

凱は戦いが起つてゐるのを知りつつ、出撃できない事に苛立つていた。

だが、自分にやるべき事があるのだ。

「待つていろ、ペンチノン……もうすぐ解放してやる

全神経を集中し、トモロの停止コマンドを打ち碎かんと戦いを続ける。

「遊星主お出ましか……」

クロノはモニターに映りこんだ艦影に、苦々しく呟いた。

次元の海を越えて本局の前に現れた巨大空母。ピア・デケム・ピットの威容は、遊星主のおいましさを象徴しているように思えた。

「空間転移とは……便利な技術ですね」

ロープを着た少女 アベルが隣に立つ人影に言った。

「お褒めにあずかり、光栄ですわ」

そう答えたのは、背の高い、美貌の女性である。彼女がガジェットI型の集団を本局へと送り込んだ人物だった。

「時空管理局。我々にどこまで抵抗できるでしょうかね……」

「ところでアベル様、彼女も出撃をさせますか?」

「もう少し見物してからでもいいでしょう。ウーノ」

冷たい遊星主の微笑に、戦闘機人ウーノは、似たような笑みを浮かべて頷いた。

ピア・デケム・ピットには、無限に小型艦載機を生産できる機能がある。

ガジェットのような半自律型ではないが、体当たりも辞さない攻撃は厄介とも言えた。

その艦載機の群が空母から無数に飛び立っていく。

提督達は緊張の中、稼動可能な艦船を指揮し、戦陣を組んで激戦に備えた。

「ジョイアークを破壊させるな

クロノは艦隊に命令した。

本局の周囲は、内外が戦場となり、力と力がぶつかり合いつ。

「ジョイアークは私のモノです。あなたがたの好きにさせません

……

アベルの声には暗い情念がこもっていた。

「そろそろ彼女を向かわせなさい」

「かしこまりました」

ウーノが一礼し、かつてスカリエッティに対していたように、うやしく頭を下げた。

「ああ。お行きなさい ジェイアークを取り戻す為に

ウーノは一人の戦士を転送した。

ガジェットの残骸が散らばる路の真ん中。

彼女は音もなく実体化した。

その場にいた武装局員達は、一様に驚きの表情を浮かべた。

「新手の敵か！？」

魔導師は彼女を囲むよつて配置につくと、直射型砲撃魔法を放とうとする。

「HIS

彼女は、短く口こした。

「ライドインパルス

電光の、」とき攻撃だつた。

田に迫えぬ速度で彼女は武装局員を打ちのめす。

「……！？」

何が起こつたのか理解できぬまま、倒れ伏す者達。

「こいつ、まさか！」

「戦闘機人……！？」

J.S事件について知識のある者が、青い貌で身を震わせた。
そして

「はあああっ！？」

破壊の嵐を撒き散らす様に。戦闘機人トーレは、通路を塞ぐ魔導師
を瞬く間に打ち倒し、疾駆した。

目指すは白き箱舟 ジュイアーグである。

第四話 襲撃（前編）（後書き）

後編に続く

第五話 襲撃（後編）（前書き）

今回のイメージBGM

緑山高校・甲子園編 -

「HANAOKA」

「Power Hits」

「Legend of KOSHIZEN」

勇者王ガオガイガー

「パリアッチョ」

「ディスクX」

ほか

仕事で忙しくてつい執筆が遅れました……orz

「おとなしく、観念しろ」

シグナムは、レヴァンティンの切つ先を戦闘機人に突き付けている。ガジェットエエエ型の上に立つたクアットロは無言でシグナムと相対した。その表情にまだ余裕を崩してはいない。

ジェネシック・ガイガーとシグナムに挟まれ、クアットロは不利な様に見えた。

しばし、時間が凍りついた。

周囲ではガジェットと魔導師との戦いが続いている。

「これ以上罪を重ねてなんになる　」

シグナムは投降を促した。

「せつかく自由の身になったのに、どうして投降する必要があるの？」

外套をはためかせ、クアットロは告げた。燃える瞳で睨みつける。

「私は……今度こそ、ドクターの夢を叶えるのよ」

ギラリ、と彼女の眼鏡が光ったような気がした。

「その前に。お前達を潰す 計画を成就させる儀式として、ね」

完璧なはずだった、スカリエッティと彼女の計画。
しかし、それはエース・オブ・エースの予想だにしなかつた力の前に頓挫してしまった。

クアットロにとって屈辱的とも言える敗北だ。

「管理局の牢獄からあの方達に救い出され、今一度、夢を果たす機会を得た……」

(あの方達、だと?)

シグナムは軽く引っ掛けりを覚えた。

「そしてまた、罪なき人々を巻き込むのか」

シグナムの怒氣を含んだ言葉も、クアットロにはくだらないざれ言だった。

「ふん……」

軽蔑の視線をベルカの騎士に送り、

「私達の計画の再始動の前段階として、六課全員を皆殺しにする

」

妙にうつとりとした、歌でも歌つような調子で、クアットロは話しだした。

「それからついでに、ドクターを裏切ったお馬鹿な子達を始末してあげるの」

その時の事を考えると、様々に残虐な想像が浮かび、たまらなくなつた。

「自分の姉妹たちを手にかけるつもりか 」

外道め、ヒシグナムは思つた。

「あんな馬鹿な子たち、もう妹でもなんでもないわ

クアットロは鼻で笑つた。

心の底から妹機を蔑視しているようだ。

「……ならば、ここに仕留めておく必要があるな

レヴァンティンにカートリッジ・ロードを命じる。

「私を見ぐびらない方がいいわよ」

彼女は、不敵に発言した。

「今まで散々、姑息な手を使ってきた者の言葉とも思えんな

ゆりかご戦において、安全な場所に隠れ、ヴィヴィオにはを倒させようとした。参謀としては優秀だが、戦闘機人としての戦闘力は大したものじゃなかつたはずだ。

「お前みたいな下っ端相手なら、別よ」

なのはやフュイト……あの、化け物エースがないのなら。勝ち目はあると確信していた。

守護騎士についてある程度、情報を入手していたが、ベルカの騎士など時代遅れのガラクタだと認識していた。

クアットロは手を振り、ガジェットエ型を呼び寄せる。

II型とエエエ型が八十機。

「雑魚をいくら呼んだところで……」

シグナムは跳ぶ。

護が同時に動いた。

挾撃するつもりだ。

「ふつ」

次の瞬間、クアットロとガジェットの姿が焼き消えた。

「奴のインフューレント・スキルか！」

先天技能シルバーカーテンには、大規模な幻術で対象を透明化する能力があった。

シグナムは消えた敵を探ろうとした。そこへ、何もない空中から熱線が発射される。ガジェットエのビームだ。すんでのところで回避し、体勢を整える。

（奴自信は自ら戦わない……あくまでガジェットに攻撃させるはず）

敵の位置が掴めないので、近接戦が得意な彼女には不得手だ。

（せめてテスタークサカ主はやでがいればな……）

だが。

「僕には通用しない！」

ガイガーはクラットロには騙されない。センサーがその姿を捉えた。

「坊やこそ、私の力を知らなすぎよ」

クラットロはEISを発動させた。

「…………？」

ガイガーは突然、動きを停めた。

制御機構が働かない！

すぐに、推進力が失われた。

「うわああつ…………」

「電子機器を自在にコントロールする……それが私の『シルバー・カーテン』の真骨頂よ……ふふふ」

ほくそ笑む彼女の前から、巨人が墜落していく。

「くつ、間に合えつ」

とつさにガイガーを追いながら、シグナムは防御魔法を展開。

魔法がクッショーンとなり、地面に衝突しようとするガイガーをゼリフにか救つた。

しかし、ガイガーは破損は無かったとは言え、横たわったまま指一本動かす事ができなかつた。ガジェットから機体を守るため、さらにはシグナムは結界でガイガーを包んだ。しばらくはもつだらう。

「『カインの遺産』とやらも、所詮は機械。私の力の前では無力も同然」

シグナムは再びクアットロの声のする方へ飛んだ。

「あの巨人は用無しになつた。次はベルカの騎士……お前をいたぶつてあげる」

「貴様」

「ハ神はやての部下は一人残らずハつ裂きにする……」

狂氣とも呼べる妄念が、クアットロを支配していた。だが、それでもシグナムは怯まない。

「やれるかどうか、試してみるか」

淡々と言い、レヴァンティンを構えた。

姿なき敵群に囲まれてもなお、冷静だった。

クアットロが想像した動搖は全く見られない。

「IJの……！」

クアットロはその態度に、怒りを覚えた。

一方。

海上隔離施設の中では収監されたナンバーズ達が、不安におののきあつていた。

「なあ、なんで……ガジェットが襲ってきてるの？」

「そもそもどうしやつて動いてるんだ」

「あいつらつて、ドクター や姉様の指示で行動してなかつたつけ？」

「じゃあ、ドクター や姉様達は捕まつてないのかよ」

「管理局が嘘ついた、と……？」

「私達を助けに来たのかな！？」

彼女達を別の場所に避難させるため、武装隊員一人が駆け付け、連れられて房を出た直後、ガジェットが通路の壁をぶち抜いて出現した。ガジェットは撃退されたが、ナンバーズ達の動搖は收まらない。彼女達は姉等が拘置所を脱走したことや、遊星主がそれに介在した事を知らないでいた。ましてや、姉のクアットロが彼女達を抹殺しようと考えているとは、思い付くわけもなかった。

「あいつら私達も破壊しようとしたよね……！？」

「ガジェットは半自律型の機械だつたな。それが暴走しているのか

……？」

ディエチの言葉に、チングが首を捻つたが、明確な答えは出ないまま。
とにかく、避難だ。隊員に先導されて彼女達は通路を先に進んで行つた。

「ルールー……やばくないか、なんか」

犯罪者の更正を行う施設もあるこの建物には、レクリエーション用施設もあった。そこをルーテシアはアギトに付き合つて散策しているところ、ガジェットの襲撃に見舞われた。二人は慌てて自分達の房へ戻ろうとしたのだが、その途中でガジェット型が地下から出現し、進路を阻んだ。

戦闘の余波で、周囲に熱線や炎が飛び散つてくる。

「どうなつてんだよ……一体つ」

「……わからない」

ルーテシアは呟いた。

まさか、別の宇宙から来た者達による計略だとは夢にも思わない。

「ヤバいよ、ガジェットがいつ向かってくる」

「……！」

どうする？

全ての能力が封じられているため、ガリュー や白天王を召喚する事も不可能だ。

アギトも炎熱能力が使えない。ならば。

「逃げるのよ、アギト」

ルーテシアは踵を反して走り出した。

ガジェットの一撃を避け、施設内に逃げ込む。

（私達の様子は常に監視されてるから……すぐに助けが来るはず）

それまでに、ガジェットに捕まらなければ……。

ルーテシアとアギトは小さな身体を必死に動かし、逃走した。

その場にクアットロが居れば、「私達を裏切った罰だわ」と言つたかもしない。

ガジェット三機、威嚇するよつて、ナンバーズ達に凶器を向ける。

「おいつ、早くそいつを倒せよ」

ウェンディがガジェットと戦っている隊員に叫んだ。
遭遇したガジェットは五体。

隊員は各一機と交戦中だ。

「HSが使えないって時に……」

能力の封印で、反撃する余地がない。戦闘機人だから、そうやすやすと破壊はされたりはしないだろうが、それも時間の問題だ。

「畜生、狂いやがつて。目を覚ませ、私達は仲間だろ」

かつてドクターに仕えた仲だというのに……。

「聞く耳は持つてないようだ！」

繰り出されるアームケーブルの打撃を回避して、セインが言った。

「ディープ・ダイバーが使えれば脱出もやりやすいんだけど……」

なぜ。執拗に私達を狙う？ やはり狂っているのか。

「妹達は
」

チングクが皆の前に出た。

「姉が守る！－！」

例え『ランブル・デトネイター』が使えないでも、戦う。大切な妹達を傷つけさせないという気迫が、小さな背を大きく見せていた。ソルダート」と同じく、守るべき者の前に立ち、不動の構えをとった。

「チングク姉！－！」

アームケーブルが、力を封じられた戦闘機人に襲い掛かる。

電子機器を狂わすクアットロのHSによって、ガイガーは金縛りにあつたかのように、自由を喪失していた。

(身体が動かない……)

唇を噛んで、もがく護。

(くつ。僕じや駄目だつたのか……)

これが凱兄ちゃんなら、エヴォリューダー能力で機体の制御を取り返していただろうか。

(本当の勇者なら……こんな攻撃に……)

びくとも動かぬ四肢に焦り、煩悶する。

(ギャレオンへのフュージョンは……やっぱり凱兄ちゃんでなきや、駄目なのかよ!?)

ギャレオンの意思是は、そんなことはないと伝えてきたが、護の胸には悔しさでいっぱいだった。

上空ではシグナムが戦っている。早く、手助けをしに行きたい。だけど……

（僕だつて、凱兄ちゃんみたいに……！）

護は気力を振り絞った。

Gストーンに意識を集中する。

（勇気ある限り！Gストーンは無限の力をくれるんだ！！）

Gストーンが輝きを増していく。

少年は、無限情報サー・キット・Gストーンの奇跡を願った。かつて、物質昇華に苛まれた勇者を、超人工ヴォリューダーへと進化させた命の宝石を。

音なき咆哮がガイガーカラ響いた。

「はあああああつーー！」

「……なつー？」

ジェネシック・ガイガーの額のGストーンが、鮮やかに光を発した。

まばゆい緑光の放射を下方に見て、クアットロが驚愕する。

「馬鹿な。私の」

澄んだ碎音と共に、ガイガーが立ち上がった。

折しも、曇天の空が緩やかに晴れていき、一条の陽光が地上に差し込んだ。

まるで祝福のように、太陽がガイガーを照らす。

「そんな。シルバー・カーテンの力が……」

クアットロは激しく狼狽した。あれほどの余裕が吹き飛んでいる。

「またか」

私の目的はあと一歩のところで阻害されるのか。

胸中で罵り言葉を叫ぶ彼女に、ガイガーが跳躍した。

「次は負けない！」

ジェネシック・クロウの攻撃は、的確にクアットロの乗るガジェットを引っ掛けた。

「しまつた！－！」

クアットロはガジェットから放り出された。衝撃に彼女は透明擬装を解除する。

自力で飛行せざるを得なくなつた。

「ちつ……」

姿を現した戦闘機人に、シグナムが向かう。

「紫電一閃！」

神速の斬撃が叩きこまれる。
が、シグナムが斬ったクアットロは

「幻影か……！」

以前にも使つた手だ。

クアットロは幻影を操るの得意とする。

「ふん。 なまくらデバイスなんかに私がやられるものか」

数十人のクアットロが、一斉に言つた。

「騙されちゃだめだ。僕が 」

護がシグナムに近寄つた。

「……クアットロ、貴様こそベルカの騎士を舐めているぞ」

ガシュツ！！

カートリッジ・ロード。

「見せてやる。古代ベルカの騎士の本当の力を……！」

「滅びた文明の騎士風情が なにを」

「烈火の将にして、剣の騎士シグナム、参るー！」

レヴァンティンが炎を纏う。

シグナムの先天資質。炎熱変換である。

「ふん」

クアットロはシグナムとガイガーパーを、ガジェットに包囲させる。幻影を使いその数を増やした。

「まずはお前達の屍を築いて、八神はやてを絶望の淵へ落とし込んでやるわ　そして、殺す」

「あせん！」

「とつとど、死になさい　！！」

ヒステリックな絶叫を合図に、四方からガジェットが迫り来る。

「陳風一閃　！」

『Sturmwinden』

シグナムが、レヴァンティンを振り抜いた。

「やった！」

護がはしゃいだ声を上げた。

シグナムの一撃はガジェットを数機まとめて葬る威力を見せたのだ。

「くつ。距離をとつて集中的に熱線を浴びせるのよー」

ガジェットから雨のようなビームの攻撃が撃ち込まれた。

「うわー！」

ガオガイガーと違い、ガイガーは防御能力を持たない。それゆえ彼の分まで、シグナムが防御しなければならない。バリアではないフィールド系ではガードがしにくい。

「レヴァンティン！！」

『Schlangenform』

刀身がシュベルトフォルム（剣）から、シュランゲフォルム（鞭）へ、形状を変えていく。

『Schlangenbeisen』

糸玉が解けるように、長い、刃の連結した鞭と化したレヴァンティンから、近・中距離用攻撃が繰り出された。掬い上げるような、動作の後に、ビーム」と、ガジェットが爆散していく。

「なんだ。この魔力は カートリッジ式とは言え……」

「生憎だが、事前に主はやてに頼んでリミッターは外せてもうった」

普段は魔導師ランクを下げるため、はやての部隊ではリミッター制限をかけられていたのだ。しかし、未知の遊星主相手であるため、隊長陳や守護騎士達はリミッターを外す許可が出ていたのである。

「す、凄いや！」

歓声を上げた護は、スラスターを吹かせガジェットに立ち向かった。

「僕も頑張らなきやつ」

ガジェットを鋼爪と拳で打ち崩す。

「ガジェットは僕が引き受ける。だから貴女は」

「承知した！」

シグナムは加速した。

クラットロを撃墜するつもりだ。

「ひつ……！」

怯えた彼女は、シルバー・カーテンで再び透明化しようとした。

「そろはいかん」

シグナムはレヴァンティンを鞄に寄れていた。クラットロがいた位置まで一気に飛翔する。

「カートリッジ・ロードだ！！！」

『Jawohl』

カートリッジ三本消費。

『Explorion!!』

鞘に収めたままロード。

魔力が刀身に圧縮される。

「 わ、私を守りなさい」

クラットロはまたガジェットに命じて、我が身を守る盾にした。

『Schlangenbeisenangriff .』

鞘から抜かれた時、レヴァンティンはショラングフォルムになつて
出でた。

その連結刃は炎を宿していた。

空を火炎の鞭が疾^{はし}る。

空間全体を切り裂くような。

凄まじい破壊だった。

「そんな……！」

ガジェットは碎かれ、微粒子となつて消滅した。

だが。そんな仲間達の敗北も、ガジェットを退かせる事はできなか
つた。

感情を持たぬ機械故に、怖れもなく騎士に殺到する。

「飛竜一閃！！」

放された技が、レプリジン・ガジェットの群れを塵埃に還す。

クアットロまで、もう田の前だ。

「覚悟しろ」

紫電一閃を撃つ構えで、シグナムは上空から襲い掛かった。

「ひえっ」

情けない声を発し、クアットロは逃走する気配を見せた。ISを発動させ、今度こそ透明擬装を

「ひえー！」

追撃するシグナムに向かつて、炎が直撃した。まるで、クアットロと彼女とを分かつようなタイミングだ。炎熱変換の資質を有するシグナムには、何らダメージを与えるものではなかつたが、気勢を削ぐ事には成功していた。

「何者だつ」

シグナムが誰何した。クアットロはその正体を知つてゐる。仰いだ目に、蜂に似たシルエットが逆光の中に浮かび上がつた。

「眼鏡ちゃん。小物相手になにを手間取つてゐの？」

その女は際どい衣装に身を包み、巨大な針を尻から生やしていくと、異形の姿の持ち主であつた。

「ピルナス！」

「そろそろ、面白い事が始まる時間よ。戻つてらっしゃいな」

「でも、こいつらを」「

「いつでも潰せるでしょ、こんなの」

シグナムを一瞥して、ピルナスは答えた。明らかに蔑みを含んだ口調であった。

悔しがるクアットロだったが、内心では、命が救われた事に安堵している。

「どうして、お前が！？」

ガジェットを片付けたガイガーがシグナムに合流した。クアットロの隣に遊星主ピルナスを認めて、護は驚いた。

「ラティオ……久しぶりねえ」

ピルナスはカインの息子に、懐かしがる様な声で呼び掛けた。

「残念ながら、お前の相手は別に用意されてるの。遊んであげられなくてごめんなさい」

なにを企んでいる！？
護は問い合わせそうとした。

「間もなく、アベルの計画したフェステイバルが始まる。大人しく

待つていなさい」「

「それは」「

ピルナスはクラットロを促し、戦場から離れようとした。

「ラティオ。あの子猫ちゃんにようしゃく言つといてね。このピルナスがまた、たっぷりいたぶつてあげるつて。ふふふふふ……！」

遊星主は、ルネへの伝言を預ける。

「次こそは、お前達を必ず」「

そう言い残し、クラットロが遊星主ピルナスと一緒に上昇していく。

「待てっ！..」

「退け！」

複製された機械兵器は一人の攻撃に、あっさりと倒される。

しかし。その時にはもう遅く、敵影はすでに天空の彼方に消え去った後であった。

苛立つシグナムだったが、ふと、地上の騒擾が視界に入った途端、あつとなつた。

「ぐ……」「

「そうだ、施設はどうなった！？」

ギンガ達なら大丈夫だと思つが、クアットロの妹に対する憎悪を目の当たりにした彼女は一抹の不安に駆られる。

「私は隔離施設を救いに行く。お前は残ったガジェット共を…」

「わかつた！！」

シグナムは急ぎ、施設上に降下していった。

魔力で強化された打撃が、ガジェットの胴を貫いた。
鋼鉄を突き刺す貫き手。

「貴様……タイプ・ゼロ」

己の大破を覚悟していたチングクは、呆気にとられた顔で、ギンガを見上げた。タイプ・ゼロとは、以前、ギンガがスカリエットの1番目の戦闘機人として協力していた時、彼らから受けっていた呼称である。

「よかつた。間に合つた」

続けざまに蹴り技で一体を潰し、最後も髪をなびかせたギンガは、シュー・ティング・アーツで鮮やかに打ち倒した。

「ギンガ！」

「ふう、壊されるかと思ったぜ」

「助かったあ」

「みんな無事みたいね」

ギンガは笑顔でナンバーズ達を見回した。

「ギンガ、早く彼女達を輸送ポートへ」

「ええ」

武装隊員の言に、ギンガは頷いた。

「すまん。助かった

チングが礼を言った。

「私はいわば貴女達の保護者だしね、当然よ。それより皆着いてきて、脱出するわよ

「どうだ？」

ノーヴェが疑問を口にした。

「アルトセイムよ。そこ地下にこみみたいな隔離施設があるの

「山の中かよ。じつちの海のどこのがいいのになあ」

と、海上の景観が気に入っているウーンティが零した。

「一体、何が起こっている？あのガジエット共は……あんな消え方をするなんて」

「あのガジエットは貴女達の仲間だったものとは違つわ」

と、ギンガはチenkに答えた。

「じゃあ、つまり」

「ガジエットは複製なの。それを創りだしたのが、別の世界から来た遊星主とか言つ存在よ」

一行は立ち止まる。またガジエットが現れたのだ。
ギンガ達はまた戦い、粉碎した。

「遊星主って？」

セインが訳がわからぬ表情で訊いた。

「とんでもない質量兵器を使つ、常識外れの連中よ」

「ゆういかじみたいな？」

「ゆういかじ以上ね」

ナンバーズ達は絶句した。

「後で映像記録を見せてあげる。信じられないわよ、きっと」

ギンガは軽く苦笑しながら言つ。戦闘機人は半信半疑で、彼女の後ろを着いて行く。

やがて。

ずううん、といづ、鈍い音が遠くから振動とともに聞こえてきた。

空での戦いは護と二名の空戦魔導師に任せたシグナムは、いまだ地上に数多くうごめくガジェット工型に剣を向けた。

I-I型、I-II型はほとんどがシグナムとガイガーに駆逐されるため、急務は拘留中の犯罪者達と施設の救援である。

武装隊は健闘していたが、一気にガジェットを殲滅する事はできなかつた。

「あれは　」

くぐもつた爆音がした。

見れば、施設の奥まつた場所から炎と煙が吹き出ている。

「あそこは転送ポートだぞ」

『警告……転送ポートはガジェットの攻撃で破壊された』

呻く声を皆は発した。

『本局や//シード各地の中継ポイントに転送する事ができなくなつた……』

転送ポートの警護に当たっていた隊員は、自責の念に満ちた顔で、そつ告げた。

「なんてことだ」

シグナムは建物の中を駆けながら、ギンガ達を探した。
拘留者を転送ポートから逃せる事が不可能になつたため、別の手段をとる必要がある。

そこにビィータから連絡が入った。

『おい、シグナム。大丈夫か』

「ああ、なんとかな。だが、転送ポートが破壊された。我々は自力で//シードまで拘留者を護衛して運ぶ」

『あたし達は、首都の敵をほぼ掃討した。いまさつちに向かってる通信モニターには、ビィータが海上隔離施設に向けて高速で飛んでいるのが映つてゐる。』

『それと、はやてが海上警備隊の艦をそしきに派遣するよつ、要請している』

「助かる」

『あたしももうすぐ着く。それまでしつかり頼むぜ』

そう言つと、通信を切つた。

シグナムは苦笑する。

部下の前では上官としての口調を徹底している彼女だが、同じ守護騎士同士だと昔の話し方になつた。

「んー？」

破壊の爪痕が刻まれる施設内部。その一画に、倒れた武装隊員が転がっている。シグナムが駆け付けると、彼は気絶しているようだつた。肩と背中にダメージを受けた傷がある。そこから近い場所で、隅の部屋のドアをアームケーブルで叩き壊しているガジェットがいた。

バキッと頑丈なドアが裂け、破片が散る。

部屋の中から大きな悲鳴が聞こえた。聞き覚えのある声だった。

「アギトー！」

シグナムはガジェットの両断し、部屋の中を確認した。

「シグナムーー！」

ルーテシアとアギトが机や椅子で、バリケードを築こうとしている

所だった。

「二人とも、怪我はないか！？」

「あたい達はなんともないよ」

アギトの言葉に、ルーテシアが無言で頷く。

「でも、あたい達を助けてくれた局員の兄ちゃんが……」

あの倒れていた魔導師か。

シグナムは一人を連れ出すと、ガジェットに敗れた隊員を介抱した。

「面田ありません……」

息を吹き返した若い武装隊員は、バツの悪そうな表情で言った。
彼は、まだ魔導師として管理局に採用されて間もない新人で、AM
F下の戦闘には不慣れだった。

ちなみに、デバイスは汎用的なストレージ・デバイスだ。

「シグナム。あたい達はどうしたら

現状を聞いたアギトが、ルーテシアにしがみつきながら問うた。

「とりあえず、私はギンガや戦闘機人達を助けに行く

「あたい達も一緒に」

「危険だぞ。これから行く区画はガジェットがまだ暴れている」

「貴女と一緒にの方が、安全だわ」

と、か細い声でルーテシアが言つた。幼い容姿に見合はない、落ち着いた举止であつた。

「貴女方に着いて行つた方が生存率が上がると思つ」

シグナムは一人は敵の少ない外部で守つて貰おうとしたのだが、自分の回りにいる方が心配する必要がなくなると考えを変えた。

「わかつた。私達の側を離れるなよ」

「ああ！」

アギトが元気に返してきた。

ルーテシアは「ぐぐく、首を振る。

もう一人の武装隊員と共に、施設深く入つて行つたギンガを追つてシグナムは向かつていった。

少し時間を巻き戻すと。

ナンバーズをすんでのところで救つたギンガは、戦闘機人達を逃がすため、転送ポートに急いでいた。
だが、すぐ後に転送ポートがある区画がガジェットにより破壊された事を知り、行き先を変更する。

「緊急用の脱出通路から外に出るわ」

シグナムから通信が入った。

『私はルーテシアとアギトを保護した。そちらはどうだ?』

「ナンバーズ達は救出しました。ですが転送ポートが使えないのでも、魔法でここから脱出するしかありません……」

『とは言え、クアットロがいる。転送魔法だと妨害される可能性があるな』

「クア姉もいるのー?」

と、ノーヴェが田を丸くして尋ねた。

『奴は逃げた……お前達を　いや、その事は後で話す』

姉が、自分の姉妹を抹殺するつもりだった、とはシグナムといえど、この場で口にするには躊躇われた。

『後はガジュットだけだ。ヴィータ副隊長達もいさりに向かっている。我々だけでどうにかできるはずだ』

戦い慣れした魔導師なら、ガジュットはもはや恐ろしい敵ではない。

『ギンガ、いまどの辺にいる』

ギンガは自分達の現在位置を伝えた。

シグナムは合流地点を定めてそこで落ち合おうと、提案した。

「解りました。では」

ギンガは合流する場所を指定した。了承したシグナムは通信を切る。

「ルーテシアお嬢様、無事だつたんだなあ」

セインがホッとした様に呟いた。

スカリエッティの元にいた時、ナンバーズ達はルーテシアを「お嬢様」と呼び、敬つてすらいた。それは変わらずに至っている。

ガジェットとの遭遇戦をくぐり抜け、ギンガとシグナム達は合流を果たした。

拘留中だった他の犯罪者達も、なんとか護衛されて建物を脱出していた。

一方。

時空管理局本局。

凄まじい殺氣を放ち、新たな敵が武装隊員達を打ちのめしていく。

がつしりとした体格をした、短髪の女。

光の翼を手足に生やし、縦横無尽に疾走する。

「トーレ!？」

スカリエッティのアジトで戦つた戦闘機人の姿を見て、フェイトが驚いた。

では、やはり衛星軌道拘置所を襲い、戦闘機人を逃亡させたのは遊星主なのか。

「しかも、今度は本局にまで……」

「主命により、ジョイアーケを貰い受けに来た」

「なんだと!?」

Ｊが怒った声を上げた。

艦船ドックの発着ポート。

そこに、ジョイアーケを守るため戦力を固めて配置していた。

「アベルの差し金か」

Ｊがプラズマの剣を腕に宿して立ちはだかる。

「ジョイアーケは貴様らには渡しも、破壊もさせん」

「面白い……」

異界の戦闘機人と戦つのも一興だ。

「」、そいつは強い。気をつけて」

フェイトの警告が飛ぶ。

「アベルに力を封じられた失敗作が私に敵うと、な……笑止だ」

トーレはHSを発動。

「ライドインパルス」

トーレの肉体が音速に匹敵する速度で加速した。

Jも邀撃の態勢に入る。

フェイトも加勢するため、真・ソニックフォームで跳ぶ。

『Zamber Form』

カートリッジをロード。

「ディードとの連携がなければ……」

スカリエットティのアジトでの戦闘とは逆の状況だ。フェイトは勝利を確信する。

輝く刃が、トーレを挾撃した。

「ぬんつ……！」

人間の動きを越えた体捌きで、一人の攻撃を受け流す。

だが。

「貴女の攻撃は、あの時に見切つている！！」

フェイトは華麗にライドインパルスの翼を避け、大剣となつたバルディッシュを打ち込んだ。

「ぐあっ」

空中で、トーレが傾いだ。
腕を斬られた。

「 もうひた！！」

」のラディアントリッパーが、死角からトーレを切り裂く。
脇腹に斬撃を受けたトーレは、痛みに怯まず蹴りを放つてくる。
」は蹴りで受け止め、中断から斬りつける。

「ちいっ」

トーレがライドインパルスの翼で弾き、床に降り立つた。

「ソルダート並の能力はあるよつだな！」

」は久しぶりの白兵戦に、熱くなつていた。

「トーレ。大人しく捕まる気はない？」

フェイトは職務上、投降を呼び掛けるが、トーレは無視。

「ならば。叩きのめせばよい！」

Ｊが疾つた。

フェイドはプラズマランサーを起動させ、トーレに照準を合わせる。

戦闘機人は待ち構えた。

「貴女の力では難しいようですね」

「はつー!?」

トーレは振り向いた。

そこに、ロープをまとった幼い顔立ちの少女がいた。

「アベル……！」

Ｊが足を止めた。

遊星主の指導者とは、この世界において初めて遭う。

「アベル、邪魔をするな

と、トーレは釘を刺した。

戦闘機人は忠誠心まで遊星主に捧げたわけではないようだ。

「私は、彼らを圧倒する力を授けに来たまでですよ

「どうやつて、ここに

フェイドがランサーをセットしたまま、アベルに問つた。

「ガジエットとやらが派手に活躍してくれたおかげで、楽に侵入で

ああしたよ……ふふ

「なんですか？」

と、小さく呟いたのは、別の場所でガジヒットと戦つなのはだった。ドックの周囲の光景は、モニターで把握出来るように通信を繋いでいた。

「…、これを覚えてますか？」

アベルは懐から何かを取り出して訊いた。

「…、それは…？」

「ふ。貴方が忘れるはずもありませんか」

Jは押し殺した声で、

「なぜそんなものを持つている

「懐かしいでしょう？」

アベルはトーレに近寄ると、一瞬でその物体を彼女の額に押し付けた。

「あ……ああ……っ！」

「やめろっ……！」

Jは制止の叫びをあげた。

しかし、もう遅い。

トーレの身体が変化していく。

「 ファイア！！」

フェイトは得体のしれぬ恐怖を感じて、プラズマランサーを撃つ。アベルはそれを自分の体から生やした、無数の火砲で、ランサーを相殺してしまった。

「うわっ……」

アベルは「に猫撫で声とも呼べる声で、

「ああ、」。貴方に今一度、戦士の使命を受けましょ。死ぬ前に、
ね

「貴様」

「創造主としてのせめてもの情けですよ。……存分に戦いなさい。」

高笑いをあげ、アベルは飛び去ろうとした。→が追おうとする。
そこへ

「……」

巨大な打撃が振り落とされた。→は跳躍して回避。
フェイトは、冷や汗を垂らした。

「→こつは……なんなの？」

と、トーレの成れの果てを見上げた。

「く……アベルめ

」は歎きしりした。

首魁は逃したが、手駒となつた機械兵器はあらかた消えていた。

「気になるのは、あの遊星主が言つた『面白い事』」

「本局にも遊星主が侵攻していると言ひますし、早くなんとかしないと……」

シグナム達は荒れ果てた海上隔離施設の一隅で、管理局の艦が来るのを待つていた。

護もフュージョンアウトし、ガイガーはギャレオンに戻つてゐる。そこにヴィータも駆け付け、施設に侵入したガジェットは全て撃破していた。

「一体、あいつら、何を企んでいる?」

ヴィータはシグナムの横で、苛立だしげに言つた。

「わからん……それより、本局の方も心配だ」

「そうだな。なのは達が……」

それは突然だつた。

『ミッドチルダの諸君！… 元気にしてたかね？』

若い男の声が、大音声で轟き渡つた。

「なつ、なんだ！？」

「シグナム空尉、クラナガンからの中継を」

『シグナム、これはどうこうことや？』

地上本部から、はやてが青ざめた顔で困惑した思いを口にしてきた。通信モニター越しに、シグナムはわかりません、と答えた。彼女に何が起きつゝあるのかなど、推測できるはずもない。

困惑の原因は、首都から送られてきた映像にある。

ガジェットはすでにいなくなり、閑散とした町並みに、一人の男が立っている。

『これは、夢か……』

はやての表情が強張る。

「そんな、まさか　」

ギンガも瞠目した。

「なんでこいつがいるんだよおー？」

ヴィータがモニターを凝視する。

白衣を着た、長身の男。
生けるロストロギア。

「ジェイル・スカリエッティ……」

「馬鹿な、死んだはずだろ、奴は！」

その光景を、クラナガン市街内で見ていたゲンヤ・ナカジマ陸佐は、思わず声を荒げた。

「俺あ、あいつの首なし死体の証拠画像を、この田で確かめたんだぞ……」

フェイトによれば、スカリエッティは遊星主ピア・デケムの鎌に刈り取られたはず。

「なぜ、奴が再び　」

護には、心当たりがあった。
おそらく……

「あの人も、レプリジンなんだ。きっと」

どんな魔導師にも　例えば、プレシア・テスタークロッサの様な
にも、死者の完全蘇生は不可能だつた。
もし、可能性があるのなら、スカリエッティのレプリジンを遊星主
が作り上げた、ということだ。

「ピサ・ソールはデータさえあれば瞬時に複製を創造できる……」

ガジェットのレプリジンが造れるのなら、スカリエッティのレプリ
ジンを造つたとても不思議ではない。

『さて、諸君。これより私の実験を再開する。究極の生命体を造る、
といづ、ね』

くくく、と楽しげにスカリエッティが笑つた。

『私が考えた祭は、まだまだこれからだよ』

「おい、あれ……」

スカリエッティの隣に、逃げたクアットロとピルナスが現れた。

「あいつらー」

『さあ、この街全てを蹂躪しなさい』

ピルナスは掌に奇妙な物体を握っていた。
まがまがしい紫色のそれを、スカリエッティに取り付ける。

『楽しいお祭りを始めましょうー』

「なんだよ、あれは！？」

ヴィータが喚く。

護は信じられないという面持ちになつた。

「どうして それを……」

『おお…………』

歓喜に堪え難い、といった表情でスカリエッティが両手を広げた。

「ねえ。ドクター、どうなっちゃうの？」

混乱してウコンディイが言った。

「人じや、無くなる……」

護はまつんと、呟いた。

その髪が逆立ち、緑に輝く。

「妙な反応が……？」

戦闘機人の目で分析していたノーヴェが、未知の要素をスカリエッティから感じとった。

「どうぞお事です」

ディードが訊ねる。

「……すぐにわかるよ」

厳しい眼差しで、モニターを見ながら、護は答えた。

「あつ……！」

普段は感情を表にしないオットーが、驚愕した。

紫の石とスカリエッティの肉体が融合し、瞬く間に膨張した。その近くで、クアットロが恐怖に染まつた瞳を主に向けていた。

『この世界のマイナス思念を持った有機体を、全て喰らいなさい！
ゾの力よ！』

禁断の、滅んだはずの力が、また解き放たれていく。

「なぜだ、なぜなんだ　　！」

護は遊星主に対して、激しい怒りの感情を発露した。
その叫び声に同調するように、ギャレオンが吠えた。

そして、悪夢が蘇る。

第五話 製鑿（後編）（後書き）

い
strikersキャラ出てないぞ、て感じですが、許してください

挿入歌（前書き）

元ネタはダ・ガーンです。
無印A・s仕様の替え歌です

挿入歌

星の未来へ

翼 空に向かうように 君もいつか飛び立つんだ
できるわ 信じてるの

大人達が忘れてる 力を今解き放とう
君にもできるはずさ

でも 私一人じゃそんなに 強いわけじゃないんだ
だけど杖がもし 今すぐに力を貸してくれたら

We Can Fly この星は
全力のスタートライトブレイカー
なのはさん 立ち上がり
果てしない未来の光へ

街のとても大切な 人達へと危険がくる
その時 どうするだろう

もしも逃げてしまつたら
私はきっと 悔やむだらう
怖いの 本当はね

でも 勇気を振り絞つて 君と戦うだらう
だって フェイトの事 救いたい

君を無くしたくないよ

We Can Fly 友達になりたいと 翼を広げ
なのはさん 想い込め
手を伸ばし 希望の未来へ

We Can Fly 風の中髪飾り
気持ちを伝え
なのはさん 別れても
再会を笑顔で誓つて

挿入歌（後書き）

執筆は遅れますごめんなさい

第六話 犯罪者ゾンダー（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ゾンダー」

「首都戒厳令」

レジェンド・オブ・クリスティニア ～はじまりの冒険者たち～

「Eddy」

ほか

第六話 犯罪者ゾンダー

ゾンダーとの連戦。

ゾンダリアンとの激闘。

原種との苦闘。

ゾマスターとの死闘。

そして、機界新種との、最後の戦い……。

天海護が決して忘れる事のない、原種大戦の記憶。苦心惨憺たる思いで勝利を手にした護たちを嘲笑うかのように、滅んだはずの存在が復活したのだ。彼は、はやてのように、悪い夢を見ているような気持ちになつた。

「アベル……君は……」

広域次元犯罪者、ジエイル・スカリエッティを素体にゾンダーが成長していく。機動勇者隊の面々は、その異様さに慄然とした。

「あれが、ゾンダー……」

巨大な機界生命体を見て、はやはては唾を飲み込んだ。あんな巨大なモノが暴れだしたら、街は

「ぐつ。総員、ゾンダーを迎撃せよー。」

はやては部隊にゾンダー攻撃を命じた。

『ぞおおんだああああー！』

スカリエッティ・ゾンダーは周囲の有機物や無機物を吸収し、さらに巨大になる。

そのシルエットが不定形なものから金属的な人型ロボットへと形態が変わる。

およそ30メートルはあるうかといつ、白と黒を基調とした配色のゾンダーロボ。

ゾンダーロボは、ゅうくじとした動作で、動きはじめた。

「アイツを止めるー！」

スバルはマッハキャリバーで駆け出した。

「おおおおー！」

スバルが、リボルバー・ナックルを唸らせて巨人に向かう。そんな彼女をティアナが誘導弾で援護する。

「我等も続けー！」

他の部隊員達も、一斉に砲撃や打撃をゾンダーに『』えた。

だが。

「効かない！？」

スカリエッティ・ゾンダーは無傷のまま立っていた。

「バリアやて……！？」

ゾンダーはバリアを使つた防御ができる。

原種大戦でも通常の火器や武装は通じなかつた。

しかも厄介なことに、ゾンダーロボはスカリエッティを素体にして
いるためなのか、AMF^{アンチ・マギリング・フィールド}を発生させているのだ。
これでは魔法を分解されてしまつ。

そして、ゾンダーはただやられているだけではなかつた。
ミサイルやビームを撃ち、機動勇者隊に反撃を始めたのである。

「あかん。街が破壊される」

戦闘区域にある建物が、攻撃の余波で次々に崩壊していく。
隊員達は結界魔法や防御魔法で被害を食い止めようとするが、焼け
石に水の状況だつた。

「ディバイディングドライバーがあれば……」

と、護は悔やんだ。

GGGはゾンダーとの戦闘で市街に被害が及ばぬよう、ディバイディングドライバーを使用していた。空間を湾曲させ、ディバイディング・フィールドを造りだして閉じ込め、ガオガイガーはゾンダーを仕留めてきた。

Gツールと呼ばれるその装備は、別の宇宙　三重連太陽系に置き去りにされたGGG艦隊が持っている。

()に、GGGのディビジョン艦が一隻でもあれば………)

どれほど助けになつただろうか。

護が焦慮する前で、魔導師達は強装結界をゾンダーのいる空間全域に張つた。

これは、武装隊が捕捉した魔導師を逃がさずには捕らえる為に使つ手であった。

結界内部に閉じ込められたスカリエッティ・ゾンダーだったが

腕から放つ赤いビームが、強装結界を貫いた。

強烈な熱エネルギーが、大気を揺るがした。

「そんな……！？」

その一撃は、高町なのはの『スター・ライトブレイカー+』や闇の書の『破壊の雷』にも匹敵する程の威力を持つていた。

結界を撃ち破つたゾンダーは進撃を開始、破壊を行う。

「魔法が通じなくとも、これなら……！――」

スバルは勢いをつけて疾走。

ウイングロードでゾンダーに肉薄する。

「振動拳！！」

スバルの固有技能は魔法による攻撃ではない。それゆえにAMFには影響されず、ゾンダーにぶち込まれる。

スバルの拳がバリアに衝突するが、力ずくで押し切った。

「うおおおおっ！」

バリアを碎き、ゾンダーロボの装甲に打撃を食らわした。

スバルの接触兵器《振動破碎》は機械に対し、最も効果を發揮する。振動波により目標となる物質を粉碎。その力はスカリエッティの戦闘機人といえども敵わない。ゾンダーは機界生命体すなわちロボットでもあるため、外装や内部の機構は共振波による破壊現象を免れなかつた。

GGGの獅子王雷牙博士や高之橋両輔博士がここにいれば、スバルの振動破碎が、マイク13のディスクXと同じ原理の攻撃だと見抜いただろう。

さらに、それは地球にいる未知の変身生命体の戦闘形態の必殺技「サイコヴォイス」とも共通していた。

「やつた！」

ゾンダーロボの上腕が砕け散り、周りから歓声があがつた。

「ああっ……！」

だが、しかし。

ゾンダーは欠損部分を瞬く間に再生させた。

「なんやでーー？」

はやては目を疑つた。

周りにある様々な物質を取り込むゾンダーは、有機生命体と機械生命体が融合した機界生命体だ。その身体は変幻自在に変化した。コア（ゾンダーメタル）さえ無事ならば、いくらでも機体を再生することができる。それは、彼らの上位存在であるゾンダリアンやマスタープログラムたる原種 ノマスターにも当て嵌まる。

「あの再生能力は、まるで……」

遙かな昔の、だが忘れ難い記憶が、はやての脳裡に甦つた。

「闇の書の……防衛プログラム」

だが、ゾンダーの再生速度は、防衛プログラムの再生能力より上回つている様に見えた。

機械でありながら生物のように動く。流動的なその姿にはやは戦慄を覚えた。

「ガオガイガー や超竜神でないと倒せない……」

原種大戦での経験が、護にそう言わせた。

『なあ、護くん。その、ガイガーでなんとかできんか？』

「ガイガージャ……無理だと思います」

はやての問いに、護は首を振つて答えた。

「ガイガーダーだけの力じゃゾンダーロボには」

確かに、ジェネシック・ガイガーハは原種大戦時のガイガーヨリも優れた運動機能を持つているが、それでもガオガイガーハには劣るだろう。

ギャレオンと合体したマシンのG Sライドが組み合わさり、強大な出力が得られるのがファイナル・フュージョンした勇者王なのだ。ファイティング・ガオガイガーハであれ、ジェネシック・ガオガイガーハであれ、持ちうるパワーはガイガーハ単体の比ではない。

しかし、ジェネシックマシンが完全修復を終えていない以上、ガオガイガーハの出撃は不可能だつた。

でも……

「でも、なんとかしないと……」

ゾンダーメタルを摘出さえできれば、淨解できるのに……！
護はモニターに映つたゾンダーを、歯痒く思いながら凝視した。

「たとえ、どれ程強い敵が出たとて、諦めるわけにはいかない。騎士として、な」

シグナムが、そう呟いた。

側にいた護が、その顔を仰いだ。

シグナムの双眸に、静かに闘志がみなぎつている。

ゾンダーの力を見せ付けられてもなお、シグナムの戦意は失われて
はない。

「私達も、戦うぞ」

皆を見回して、告げた。

ヴィータやギンガ達が、その言葉に頷く。

その時。

「な、なあ。シグナム」

と、アギトが思い詰めた表情で、近づいてきた。

「なんだ、アギト?」

シグナムは驚いて、小さな融合騎を見た。

「あのデカブツと戦いにいくつもりなら　あたいも、一緒に……
連れていってほしいんだ」

「なんだと!？」

シグナムは驚いて、小さな融合騎を見た。

「……なあシグナム。旦那が最後に言った言葉を覚えてるか?」

「那。

「騎士ゼスト・グランガイツの事か」

哀しい運命に翻弄された、誇り高き騎士の無表情な顔を、シグナムは思い起こした。

彼と地上本部で武器を打ち交わしたシグナムは、同じ古代ベルカの伝統を継ぐ騎士として、深い敬意を抱いていた。

ゼストは卓越した戦闘力を持つた現代に生きるベルカの騎士だった。親友・レジアス中将により、戦闘機人事件捜査中に戦死、スカリエツティの人造魔導師素体にされて蘇生し、結果的には管理局の中核を揺るがす事件に荷担してしまった。

アギトはそんな彼と共にずっと過ごしてきた。主なき融合騎である彼女にとって、ゼストは自分の力を役立てる機会をくれたロード（主）だった。

アギトは、古代ベルカの技術で造り出された融合騎だ。しかし、彼女は違法な実験でボロボロになり、希望もない日々を送っていた。苦痛の毎日はルーテシアとゼストが研究所から彼女を救い出した事で終息する。

恩義を感じて以来、アギトは、戦いの度にゼストとユニゾンし、力を貸してきた。

しかし、騎士ゼストですら、属性の不適合の故に、アギトの真の能力を発揮させられずにいた。

完全に属性が適合する騎士がいれば……

アギトは『烈火の剣精』たる己の力を、最大限に使いこなせるロードを求め続けていた。

そしてスカリエツティに協力している時、シグナムと出会いアギトは動搖した。

本物の、古代ベルカの騎士。
炎の属性をもつ、烈火の将。

待ち望んでいた相手が、ついに見つかったのだ。

「ゼストの旦那は最期、あんたこそあたいに相応しいロードだと託して、逝つたんだよ、シグナム」

「アギト……」

地上本部で、一騎打ちでシグナムに敗れたゼストは、事件の真相を記録したデバイスとアギトとを、彼女に預けて物故していた。

「あんたが本当にあたいに相応しいのか。旦那より優れたロードになれるのか。それを見極めたい……」

だから自分を戦いの場に連れていけ、とアギトは言った。

「私は騎士だ。だからゼストとの約束は守る。だが、あの相手はお前の想像を絶した敵だぞ。今のお前では危険過ぎる」

「覚悟はしてるぞ」

挑戦的な眼差しで、アギトはシグナムを見上げた。

（良い目をしていろな……）

「絶対の安全は保証しかねるぞ。それでもいいのなら」

「シグナム……！」

「私の傍についている」

アギトは喜色を浮かべ、

「ありがとうな、シグナム」

礼を述べながらシグナムの肩に乗る。

「あんたの強さ、あたいがこの田で確かめてやるぜー。」

はしゃぐアギトの姿に、思わずシグナムは苦笑した。
そんな彼女を見ながら、グラーファイゼンを担いだヴィータが言った。

「ま、リインが不在な時だし。ユニゾン・デバイスが居るなら心強いかな。でも、いいのか。勝手に連れていつたら問題になるぞ」

アギトはまだ扱い的には一囚人である。情状酌量の余地はあるとはいえ、更正プログラムを受けている最中は管理局の意向に従わなくてはならない。シグナムがアギトを戦場に連れていく事は、規定違反に相当し処罰を受ける可能性があった。

「責任は全て私が追う。どのよつな処分も受けれるぞ」

「シグナム、すまない……」

とたんに表情を曇らせるアギトに、

「お前は気にするな」

とシグナムは声をかけた。

「勝手にしろ。さて」

ヴィータが首都の方角を向いて言った。

「そろそろ行くか。戦場に」

時空管理局本局。

そこへまんまと侵入した遊星主アベルに、ソルダートは激昂をぶつけた。

「貴様、あらうじとか我らの故郷を滅ぼした力を利用するといふのか？」

「Zマスター迎撃システムの開発のため、入手したZメタルのサンプルでしたが、まさかこのような状況で使う事になるとは私も意外でしたよ」

あどけない笑顔でアベルは言つ。それが余計にJの怒りをかきたてた。

「Zの力を否定したのは貴様自身ではなかつたのか!? それをためらひなく使つとは…… そうまでして三重連太陽系を再生させたいのか！」

「それが私達、遊星主の務めですからね」

「許せん……！」

」の声が怒りに震える。

「ぞおんだあああ　！！」

戦闘機人トーレと融合したゾンダーは、器材や人間を取り込み成長していった。

「ゾンダーロボに……っ」

「いいのですか？　早く倒さないと、」のまま成長を続けて、ゾンダー胞子がこの宇宙に撒き散らされるかもしれませんよ」

「ぬう……ゾンダーメタルプラントが精製されれば……」

次元世界はやがて機界昇華されてしまつのか。
三重連太陽系のように

「そんなことはさせんっ！－！」

「ふふ。ジョイアーケも無しで、ゾンダーとどれだけ戦えるか……見物させてもらいますか」

「貴様……！」

Jは、次元航行艦と同じほどに巨大化したゾンダーロボへと立ち向かつた。

トーレ・ゾンダーは鋭角的なボディで、腕は刃の様な形状をしている。

手首に当たる部分と腿からは、トーレのライドインパルスによるエネルギーの翼インパルスフレークを生やしていた。

その動きは速い。

そして、ゾンダーの持つバリア能力に魔導師達は苦戦した。

「くそう、チエーンバインド！」

魔力の戒めが、ゾンダーの巨体を拘束する。しかしゾンダーはそれを、紙紐の如く引き千切り、ISを発動させて魔導師達を翻弄した。

「いけない、下手に戦えば本局を破壊してしまう……」

フェイ特はそのことに気づいた。

ゾンダーを無差別に暴れさせれば、アベルは何もしなくとも、時空管理局を麻痺させるというわけか……！

「結界だ、結界を張るんだつ！」

結界魔法が使える魔導師が、被害を抑え、ゾンダーを制肘するため強装結界に重ねる形で『スマートプロテクション』などの魔法をかけた。本局の内部は爆発や破断の衝撃で、魔法の防御が無ければ厳しい状況になつていてる。

「……倒せたとしても、被害は甚大」

「ジェイアーケが復活すればゾンダー」とき　　」

ゾンダーは腕の刃でところ構わず切り裂く。その斬撃は魔力を纏つているため、結界の耐久力もいつまでも保たれず、砕けてしまう。

「まずい、これじゃあジェイアーケも破壊される……」

フェイトは一か八か、大技を仕掛けてみるつもりだった。

「いや、奴を倒すにはゾンダー核を取り出さなければ……でないといくら攻撃で傷ついても再生する」

そんな……

フェイトが絶句しかけた時、なのはがそこに駆け付けてきた。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

二人は並んで飛び、攻撃のタイミングを計った。

「ディバインバスター！！」

「サンダースマッシュヤー！！」

貫通力を増した設定で撃たれた、一方向からの砲撃。ゾンダーはバリアを展開。

しかし、全てのエネルギーを遮断できずに攻撃を食らう。ゾンダー口ボの機体が破損する。

「だめだ、再生していく」

ゾンダーが腕を振るつた。

「インパルスブレード……！」

高速で刃の翼が襲い掛かる。なのははプロテクションで衝撃を防ぎ、フェイントは真・ソニックフォームで加速して斬撃を回避した。

エース一人の攻撃も、異常な再生能力のために効果は半減し、いたずらに体力と魔力を消耗するだけになつていた。

「凱……まだか。まだジェイアーカは」「

焦る」を、高みから見ているアベルが冷笑した。

「無様ですね」

ソルダートーの攻撃も、ゾンダーのインパルスブレードに弾き返される。

「さあ、ゾンダーよ、ジェイアーカを破壊しなさい……もうこの艦は用済みです」

創造主から、非情なる決定が下された。

「させんつ」

Jが超弩級戦艦を庇うため、ゾンダーロボの前に飛び出す。

「危ない、Ｊ！！」

フェイトは「に追い縋り、その前面に回り込んだ。

「フェイトちゃん　！？」

ゾンダー・ロボの胸が展開し、球状の器官が表れる。それは、融合した機器を利用して造られた苛電粒子砲だつた。そこからほどばしつたビームの束が、ジェイアーケ用掛けて放たれる。

「間に合えッ」

フェイトはバルディッシュュをカートリッジ・ロード。防御魔法発動。

『Round Shield』

使い慣れた防御魔法だが、範囲と防御力を拡大して使用した。

「フェイトちゃん　！？」

なのはが叫ぶ。

ビームとシールドが衝突し、目も眩む爆光が生まれた。

「このよつな異郷の地に没するとは、哀れなものですね」

」の運命を歎くよつなアベルの口調だったが、創造主に逆らつた不良品に対する憎しみが見え隠れしている。

「最も、反逆者には当然過る『罰』でしうが……ソルダートー

-002-

第六話 犯罪者ゾンダー（後書き）

もう少し
ゾンダー戦続きます

第七話 『獅子の女王』（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー
「アバンタイトル」
「ゾンダー」
「リオン・レーヌ」

魔神英雄伝ワタル
「龍神丸」

ほか

第七話 《獅子の女王》

……ゾンダーへと変貌するスカリエット。ティ。

その変容に、ルネの中に忌まわしい記憶が蘇った。

あれは、ちょうど原種大戦の頃だつた。

GGGが原種と戦つていた一方、ルネは対特殊犯罪組織シャッセールの捜査官として、国際犯罪シンジケート『バイオネット』を追つていた。

中国・内モンゴル自治区。観光客で賑わう万里の長城。そこでルネはバイオネットのエージェント、シュヴァルツェ・オイレを発見した。彼は中国の科学院航空星際部から盗みだした機密情報を仲間に渡そうとしていたのである。

ルネにとって運の悪い事に、同じ場所が原種とGGGとの戦闘の舞台となつてしまふ。しばらく前に起こつた、衛星軌道上の戦闘で外殻を破壊された機界31原種の一體、ZX-05脊椎原種が万里の長城と融合し、活動をはじめたのである。

あろうことが脊椎原種は観光客らをゾンダーにしてしまつた。オイレもその中の一人だつた。

バイオネットに憎悪を燃やすルネは、パートナーのエリック・フオーラーの制止も待たずに原種に立ち向かつたのである。なんとルネは小型戦術核で原種を爆破しようとしたのだ。

その前に、戦場を飛んでいた凱に救助されたおかげで（無理矢理、

ステルスガオーに取り付いたというのが正しいが）、小型核の辛くも発射は止められたが……。

そんな中、危うくルネも脊椎原種に融合されるところだった。その時は助かつたが、原種大戦末期、地球に撒き散らされたゾンダー胞子の影響でルネもゾンダーに融合してしまう。だが、Zメタルの反物質であるGSTOーンのおかげで融合から免れた。

……バイオネットの野望をぶつ潰すためにも、必ずオイレを捕らえる。その目的だけがルネの頭にあり、原種がどれほど危険な存在か考えようともしない。シャツセールの優秀なる捜査官エリックが、もはや万事休すかと思つた。しかし、GGG機動部隊の活躍により、脊椎原種は撃退され、オイレも天海護少年の浄解を受け解放された。浄解されすっかり善人となつていたオイレから、バイオネットの画策を知るシャツセールの二人。

だが、直後、オイレは口封じに殺害された。

そして

（あたしのふがいなさのせいだ、あいつは……）

『ジエントルマン』エリックは、バイオネットの獣人からルネを庇い、殉職した。

初めて体験した仲間の死は、彼女の胸に密かな蔭を落としている。自分の過失の為だと理解していても、その時は冷淡な感情で彼の死を評していた。

（なんで、私なんかを守るんだよ……）

フランス製勇者ロボ『ポルコート』の超AIは、死亡したエリック・フォーラーの人格パターンを移植していた。ルネはその真実を『光竜強奪』事件を追っていた時には、知り得なかつた。そして、エリックの魂は勇者ロボに受け継がれたのか、再びルネを守つたのである。

『G・ギガテクス』戦の渦中、ポルコートはルネのかわりにバイオネットと戦い、大破した。傷つき倒れたポルコートの姿に、ルネは泣いた。抱えていた感情を全てさらけ出して

この時、ポルコートの人格モデルがエリックだとルネが見抜いていた事に、パピヨン・ノワールが驚いている。

パピヨンは機体は破壊されたが、超AIは無事なのだと告げた。そのパピヨンもオリジナルはオービットベースにおいてリプリジン・護に生命を奪われている。

さて、事件解決後、ポルコートの超AIはローパーミニに搭載、シヤツセール所属の乗用車で、新しいルネのパートナーに配備された。それをルネが喜んだのはもちろんだが、彼女は仲間の大切さを光竜奪取とを通して痛感していた。

(もう一度と、仲間は私のせいだ、死なせない……！)

次は自分が仲間を守る。

それもまた、「勇気ある誓い」だつた。

(ゾンダーの恐怖なんか……もつ私からは無くなつたはずだ！)

Gストーンの力で身体の全てがゾンダーになる事はなく、機界化は

下半身だけで済んだが、なまじ自我を保つていただけに言い知れぬ恐怖を覚えた。

融合は不快極まり、異質なモノに同化される恐怖がルネの心に残された。

(ゾンダーなんか……あたしには)

Ｚの力に対するトラウマはずつと眠り続け、そして今、目覚めた。

(あたしはもう、あの頃のあたしとは違う　－－)

回想していたルネは、一瞬で現実に引き戻される。

「たあああああつ！－！」

激情を込めて、ルネはスカリエッティ・ゾンダーに突っ込んだ。

「今度こそゾンダーをぶつ飛ばす！」

鋼鉄の拳が放たれる。

しかし、Gストーン・サイボーグの剛力をもつてしても、たやすくゾンダーのバリアを打ち破れない。

GとＺの力、そして魔力がぶつかり合って拮抗し火花が散る。やがてルネは弾かれた。

「ちいいつ

舌打ちをする。

ゾンダーのバリアは圧縮した空間を折り畳んだ、空間湾曲技術の応用で、原理的にはガオガイガーのプロテクトシェードに近いものだ。

かてて加えて、スカリエッティの魔力を使い防御魔法をも併用していた。

その防御力はこれまでのゾンダー・ロボより桁違いである。

これにより、魔導師たちの砲撃魔法も効果が減せられていた。

だが。スバル・ナカジマの先天固有技能である『振動破碎』は、そのバリアを打ち抜いて、機体に到達した。

見事にゾンダーの腕が破壊される。

しかし、ゾンダーはすぐさま傷ついた部位を再生させてしまう。攻撃が通つても、瞬時に再生しては意味がない。

「くそっ、もっと、強い力がいる……この力を越える力が……！」

ルネは唇を噛みつつ、ある決意を抱いていた。

ルネ達がゾンダーと対峙していた頃。

首都への移動中、飛行する護はゾンダーとの戦い方について、はやてに説明していた。

『一撃で破壊……！？』

「はい。僕達はガオガイガーの必殺技……ヘル・アンド・ヘブン、ハンマー・ヘル・アンド・ヘブンでゾンダーの外殻を一撃で撃破して、ゾンダーメタルを露出させていました。もちろん、それには、途方もないエネルギーがかかりますが……」

ガオガイガーもゴルディオナンハンマーも今は無い。それでも、ゾンダーを止めねば、大変なことになる。この世界のために、誰もが命を懸けて戦う所存だった。

『あの巨大な身体を一瞬で吹き飛ばせれば』

『ゾンダーロボの核さえ露出できれば僕がすぐに浄解できます!』

カインの遺産。エマスターの抗体たる護の力は、ゾンダーに変えられた人間を元に戻す事ができる。機界昇華を阻む、ラティオの力、それがあるからこそ、GGGは原種たちにも勝利できたのである。

『一撃で破壊……か……ふうむ』

はやては護の言葉に考えこんだ。

『八神、長官……?』

しばし思案にふけったはやはては、護に訊ねた。

『なあ、そのデカブツ、なんとか足止めでけへんかな?』

『やつてみます』

と、シグナムが答えた。

はやては頷を、

『よつしゅ。よつと準備に時間がかかるけど……、つむがどうとか
すみ』

「主はやで、何を！？」

『やつかい一撃が必要なんやろ？ それなら、あたしが出る…』

オーバーランクした。

「主は…」

夜天の主が前線に出る』とは、滅多にない。JS事件の時でも、数えるほどだ。

だが。確かにゾンダーを破壊できるとしたら、オーバーランクを持つはやてくらいしかいない。だが、普段は照準や補正には、融合騎リインフォースエイが必要になるのだが、今回は一人で魔法を使わねばならないのがネックだ。
はやはそれでも氣丈に笑い、

『まあ、司令部の皆もサポートしてくれるしな。とにかくうちが魔法を撃つ準備が整つまで、なんとかあいつの動きを止めといてほしいねん』

「はやての頼みだ。あたしたち任せやー。」

「スバル達と協力すれば足止めくらことは可能でしょう」

『よつしゅ、頼んだで。あたしもすぐ出撃する。わいわい、護く
ん』

「はい？」

『こいつちが片付いたらすぐに本局に向かつたつて。あちらにもゾン
ダーが出たらしいからな』

「はい、わかりました!!」

「おい、狸女！」

はやてとの通信に割り込んだ声がある。
ルネが地上本部に呼び掛けた声だ。

「お前に頼みたいことができた」

『狸で、あたしのことか……？』

乱暴な呼び方にはやはては目を丸くした。

「そんなことははどうでもいい!」

ルネの声は切迫感をはらんでいた。

『あの〜、ルネさん?』

「アレをよこせ!..」

『アレ!？ アレって』

「あたし専用のアレヤー。」

『ちょっと待ちや、アレはまだろくに実験データすら録つて』

「それどいつもじゃないんだ！」

サイボーグ少女の語気が荒れた。

「あいつをぶつ叩くにはもっと強い力がいるんだよー。今のおたしの力よりも！ー！」

はやはては迷った。

開発されたばかりの新装備を、こんなに早く投入して万が一、取り返しのつかない事故が発生したら……。
はやはては『組織の一員』としてそのような思考をしていた。
けれど、彼女が六課や勇者隊などの部隊を結成したのは、そんな理由に捕われずに行動するためだ。
はやはては、即断した。

『わかった。あたしはルネさんに賭ける。だから、頼んだでー！』

「ああ。今すぐに、実験データを録らせてやるよ。あいつとの戦いでな！」

ルネは勇ましく言った。

はやはては本局に通信。

シャーリーことシャリオ・フィニーーに繋げる。

『シャーリー。ルネさんの新装備、こちらに送つてくれへんか』

『え、でも、アレは』

シャーリーは躊躇した。

『かまへん。あたしが許可したんやし。そ、早う頼む』

『本当によろしいんですね。わかりました、すぐに転送します』

『ありがと』

『はやてちゃん。私がいなくて大丈夫ですか?』

リインが心配そうに訊いた。

融合騎として主を傍でサポートできないのが心苦しいようだ。

『あんたがおらへんと、正直きついけどな。でも、皆が助けてくれるし、なんとかなるよ。それより本局もガジュットやゾンダーのせいでかなりの被害を出しどるんやろ? 二人はそのまま、本局の皆さん協力したつてや』

『了解。八神長官』

『わかりましたです、はやてちゃん!』

敬礼し、はやてに告げるシャーリーとリインに、はやては微笑して応えた。

新たなる決意を抱き、彼女たちは行動を開始した。

『ルネさん。ちゅうわけで、すぐ、そちらに届くはずや』

「メルシー。感謝する」

母国語で礼を言い、ルネは通信を切った。

ルネと入れ替わるよつこ、今度はシグナムがはやてに話し掛けた。

「主はやて、私からもお願ひがあります」

『なんやシグナム、言つてみ』

「アギトの能力封印を、解除してほしいのです」

「……！」

シグナムの肩の上で、アギトが驚いた顔になった。

「ゾンダーを破るにはルネ捜査官の言つ通り、強い力が必要になります。そして、アギトにはその力を『える能力があるのです』

『うーん。これはまた、難しい頼み事やな』

情状酌量が適用されたとは言え、テロリストに加担した者の封印を、戦力になると解つてはいても、おいそれと解除するわけには管理局側としてはいいかない。下手をすれば犯罪者に逃げられる恐れがあるからだ。

「アギトは逃亡したりは決してしません。私が保証しますー」

「……シグナム」

アギトの顔が歪んだ。目元に光るものがある。

「お願いです。主はやで。私を信じてください」

『うひは、これまでシグナムを信じなかつたことはあらへんよ。アギトもだからこゝあんたに着いて行つたんやう?』

アギトは何度も首肯した。

『つけはのじまけひ』の部隊を編成する時、けつこう融通の利く権限をもひつてんねん。ちよつと時間をくれたらアギトの能力封印、解いたるよ

「ありがとうございます、主はやで!」

これあるかな、我等が主よ、と、シグナムは胸中に呟いた。

『それかわり、しつかりやつてや』

「もううんですか」

「あたい、絶対にシグナムを失望させなによつに頑張るぜ!」

張り切つてアギトが言つ。

そんな彼女を、シグナムは信頼の眼差しで見つめるのだった。

「それじゃあ、こゝの事は頼んだでー!」

はやては司令部をグリフィスやルキノラに任せ、ゾンダー迎撃に出動していった。

「ねえ、ギャレオン」

並走して飛行する鋼鉄の獅子に、護は言った。

「ここは僕達がなんとかする。だからギャレオンは本局にいる凱兄ちゃん達を助けてあげて」

無論、ファイナル・フェュージョンできない状況はいぜんとしてあるが、やはり凱のパートナーはギャレオンこそが相応しいと、護は思つていた。

機械と直に繋がる能力がある超人エヴォリューダー……ギャレオンとフェュージョンするにはやはり、彼こそ最適な人材だと、ガイガーとして戦つてみて出した結論である。

「きっと凱兄ちゃんもギャレオンを必要としているよ　だから…」

…

ギャレオンは護の意を汲んで、承諾の色を双眸に浮かべた。

「よし、じゃあギャレオン。凱兄ちゃんに会つたら僕がゾンダーを解消してすぐに駆け付けるから、って伝えといてね！」

ギャレオンと離れて戦うのは寂しいが、護は心強い味方がいることで不安を忘れられた。

ゾンダーに、もう怯む事はない。Gの力は、この力には負けない。勇者王ガオガイガーと共にゾンダリアンや原種と戦い抜いた日々が、護にそんな確信を抱かせていた。

やがて。護やシグナム達が、クラナガン上空に到達する。

ゾンダーは、巨体を揺らして街を壊し続けていた。

今まで戦っていた者たちが、援軍の到着に歓喜の声を上げた。

「待たせたな！」

スバルに、降り立ったヴィータが言った。

「待ちくたびれましたよ、副隊長……」

また、湾岸地帯のガジェットを一掃した部隊も応援に来て、ゾンダ一包囲網を作った。

その中にはエリオとキャロ、そしてフリードリヒがいる。ここに、機動六課フォワードチームが勢揃いを果たした。

「なのはじやないけどよ、久しぶりに全力全開やってみるか！」

勢いづいたヴィータが、グラーファイゼンをラケーテン・フォルムに変える。

隣ではシグナムがカートリッジをロードしていた。
アギトの封印解除はまだ出来ていない。今かいまかと、アギトは気を揉んでいる。

「そう焦るな。私の力を見るのだろ？？」

「もうだけど……」

「なら。そこで見ている、ウォルケンリッターの力を、な」「

「ヴォルケンリッター……」

「お前がそんな大言壯語するなんて珍しいな。悪いものでも食つたのか？」

と、ヴィータがらかうのをシグナムは、

「なに、アイスを食い過ぎて腹を壊したお前ほどではないよ」

「それいつの話だよ！？　はやてが小学生の時のだらうが」

「副隊長たち、なに呑気にやつてるんですか～！？」

ティアナが、軽口をたたき合つて守護騎士達に、慌てた口調で言つた。ゾンダーはすぐ側まで近づいている。

「お前、なのはに言われたのを忘れたのか。頭冷やせつて……」

ティアナが赤くなつた。忘れない彼女の汚点である。隣にいたスバルは汗を垂らしてパートナーを見ていた。

「そうだぞ。戦場ではつねに冷静さが肝心なのだ」

シグナムの分別臭い発言に、かつとなつてあたしを殴つたのはどこの誰でしたかね！？と、心の中でツツコミを入れるティアナ。

「それより、ティア、攻撃を……」

「歓談の時間もこれまでだな」

と、シグナムは咳く。ティアナはやつぱり心中でツッコんだ。

(歎談じやないでしょ……)

そんな彼女をよそに、ヴィータがラケーテン・ハンマーを振り上げ、疾駆する。

「たりやあああつー！」

ドリルの破壊力が、ゾンダーの巨腕をぶち抜く。

上空からは、キヤロの騎乗する火竜フリードリビが、炎のブレスを吐き出した。

火球が炸裂し、ゾンダーロボの頭部が傾いだ。しかし、バリアのためか、いまいちダメージが通っていない。

ゾンダーは無事な腕から赤い紐状の武器を何本も発した。

それは、スカリエッティが使っていた魔法だった。

「フリードー！」

赤い紐は竜の首に巻き付き、ギリギリと締め上げる。

悲鳴と共に、キヤロとフリードは地面に叩きつけられようとした。シグナムはすかさず魔力の紐をレヴァンティンで切断し、フリードの身体はキヤロがすんぐで発動させた補助魔法で事なきを得た。

「よくもキヤロとフリードを……」

エリオはストラーダを構え、突進した。

電気資質を用い、威力を強化する。

「危ない！」

ゾンダーは胸に火砲を造りだし、エリオ曰掛けて撃つた。
炎の弾丸が少年騎士に向かう。

「くつ……！」

飛行魔法を使つてゐるわけではないため、エリオは軌道を変えるのが難しい。空中で制止し、自ら自由落下をすることにより炎弾を回避した。

さらに、ゾンダーは周囲に魔法や熱線を発射し、機動勇者隊は防戦に追い込まれる。

「攻撃の手を、緩めるなつ！」

シグナムが叱咤し、ゾンダーに肉薄する。

「飛竜一閃！…」

シグナムの攻撃を食らつて、ゾンダーロボの肩が粉砕された。だが、瞬時に再生し、襲い掛かつて来る。

「ちつ……キリがない！」

ヴィータはキガント・ハンマーを使うべきかどうか、考えた。魔力の消耗が激しい技をここで使つたほうがよいのか。それよりはやてを待つてからのほうが……。

いや、はやてから足止めを頼まれたんだ。

ためらつてどうする。

同じく、シグナムも、自身の最大の直射型魔法シュトルム・ファルケンを使用することを決めていた。

「同時に行くぞ！！ シグナム」

「我等の力を結集するんだ！！」

「あたし達も行こう、ティア！」

「待つて、スバル。あれを……」

ティアナは後ろを指さして、言った。

「あ、あれは

スバルの目が大きく見開かれた。

「いくぞアイゼン！」

『Jawohl!』

「ギガント……ハンマー！！」

グラーファイゼンが超巨大なハンマーへと変じる。

「レヴァンティン！」

「烈風の隼よ……翔けよ！」

一人の守護騎士が、奥義を放とうとした時

「みんな、そいつから離れてえな！…」

後方から響いた声と共に、

『…………！？』

強大な魔力が、彼らがいる空間に満ちていった。

「これは…………！」

「はやての…………！？」

「ディアボリック・ユニッショն　－－！」

騎士服に身を包んだはやは、騎士杖シユベルトクロイツを手に、呪文を詠誦した。

一般市民の避難が済み、ゾンダーと管理局の人間しかいないからこそ、放てる大技。

はやは効果範囲を限定した設定で、広域型魔力攻撃を放つた。亡きリインフォースから受け継いだ、純粹魔力攻撃の魔法。

闇の球塊が、ゾンダーを直撃した。

対象の魔力を食らい打ち消す働きがあり、魔導師には効果的な魔法で、かつバリアを消滅させる。しかも、一つの街全域をカバーできるため、巨大なゾンダーもすっぽり中に納まってしまう。素体であるスカリエツティの魔力はこれにより、ほとんどが消失してしまった。攻撃魔法、防御魔法は使い物にはならないだろう。あとは、空間湾曲によるバリアのみ。それすらも強い衝撃には耐えられない。

「いまや、みんな！！」

「おおっ！！」

ヴィータ、シグナムがそれぞれ大技でゾンダーを攻める。そこを、さらにスバル達がしかけた。

ティアナの誘導操作弾がゾンダーを惑わし、隙をついたスバルとエリオの渾身の一撃が、敵を打ち碎いた。キヤロはそんな彼女らをバックからサポートする。

ゾンダー口ボの機体は、見る間に損壊した。

だが、今度も再生能力を發揮し、元に戻るとしている。

「来た！」

ようやく、ルネの手元に転送が完了した。

ルネの掌に実体化したのは、ルビーをあしらったペンドントだ。もちろんただの宝石ではない。

Gストーンを組み込んで開発された試作型のデバイスである。検査の結果、凱とルネには兩人ともリンク・コアの存在が認められた。はやてはそれを受けて、一人でも扱えるデバイスを用意するよう取り計らつた。G式、と仮に呼称されるそれは、G Sライドとデバイスの技術を融合させた全く新しい試みである。

なのはのレイジングハート・エクセリオンにも、同様のシステムが採用され、新たにレイジングハート・ジエネシスに生まれ変わった。最初、ルネのデバイスはインテリジェント・デバイスになる予定だったが、「人工知能搭載型はウザいから」という理由で退けられ、結局、ストレージ型のデバイスに決定した。

それを光竜と闇竜が聞いたらどう思うか。おそらく悲しむだろうが、ポルコートあたりなら気障な嫌みを返したかもしれない。そのかわり、といつてはなんだが、ルネの戦闘スタイルを鑑みて、機体は近代ベルカ式を基調としてもらつた。

即ち、魔力で身体や武器を強化する方向に特化した機能を持たされているのだ。

「さつそく、いくか。『リオン・レース』！」

ルネはデバイスに自らのコードネームを『えていた。
リオン・レース……獅子の女王である。

『Equip』

待機モードからデバイスマードへ。

ルネの右腕に、光が絡み付いた。

獅子の女王はルネの肘までを覆つた、黄金に輝く金属製のガントレット（手甲）に変形する。スバルのリボルバーナックルにも似ているが異なるもので、腕の一点では、Gストーンが鮮やかに緑の光を放つていた。

デバイス・コア、GSジェレイターに接続完了。システム異常なし、機体は良好。魔力安定。

リオン・レーヌはリンカー・コアから供給される魔力に、Gストーンのエネルギーを上乗せして蓄積した。

「さあ、魔導師ってやつを体験してみようか」

颯爽と、ルネはゾンダーに立ち向かう。

再生したゾンダーから熱線が飛ぶ。

手をかざしたルネが、デバイスにプリセットされていた防御魔法を発動させる。

「プロテクション……！」

防御における、ミッドチルダ式の基本魔法。
それが熱線を弾き、拡散させた。

「いいぞ……」

カートリッジが排莢される。

近代ベルカ式の術式は、拳を強化、魔力が赤く発光した。

「ゾンダーめ、食らいやがれっ！－！」

ルネが咆哮した。

跳躍して、ゾンダーロボの胸部に剛拳を打ち込む。

バリア貫通。

凄まじい破壊衝撃が、ゾンダーの外殻をえぐり取った。

「すうい……！」

呆然と、ヴィータが呟いた。

この威力は直射型砲撃魔法にも匹敵するだろ？

「これが……Gストーンのパワーかよ……」

「実験は成功つてとこだな」

ルネが頭上のはやてに笑いかけた。それは百獣の王が持つ猛々しい笑みだった。

はやはビッと、親指を立てて返す。
それからシグナムに、

「さつき、アギトの封印解除手配が済んだからな

と伝えた。

「ありがたい……！…」

アギトはついにこの時が来た、と喜んだ。
融合機としての真価を見せる時が。

「シグナム、アギト。あたしが次の一撃を撃つ発射準備の間、存分に暴れて時間稼いでな」

「わかりました。主はやで」

「よ～く見てるよー！ アギト様の活躍をよ」

「いっただって、リインがいりやもつと……」

アギトがはしゃぐ姿を横目に、ヴィータがぽつりとこぼした。

「……では、ヴォルケンリッター、シグナム。参るー！」

「烈火の剣精アギト。見参だぜ！」

ゾンダーロボに不敵な表情を向けるベルカの騎士たち。

その力が、いま、放たれる。

第七話 『獅子の女王』（後書き）

strikers25話、よかつたですよね（^ ^）！

といつわけで（ナニが）、次回、

アギト・ユニゾン

承認！！

第八話 永遠の炎
に続く

第八話 永遠の炎「 - ETERNAL BLAZE - 」（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「赤と青～超竜神」

「浄解」

魔法少女リリカルなのはA-S「ETERNAL BLAZE」

電子戦隊デンジマン

「デンジマンのテーマ」

ほか

第八話 永遠の炎【・ETERNAL BLAZE・】

空高く。

奇跡を起こす輝き。

(「これは……まるで……」)

騎士は熱く風を巻き起こし、舞い上がる。

(フュージョン)

天海護はその光景に、不思議な既視感を抱いた。

「いぐぞ、アギト！」

シグナムは腕を広げ、融合騎へと合図した。

「おうっ」

胸を高鳴らせ、アギトは新たなロードに応える。

二人の身体が重なった。

「　　ゴニゾン・イン！　　」

古代ベルカの騎士に、アギトが溶け込んでいく。

(熱い……！)

シグナムの裡にあるものに触れ、アギトは震えた。

冷然としたシグナムだが、その胸には常に燃え盛る火炎が渦巻いていた。

(これ……っ)

融合騎はロードと一緒に化しながら、力を回調させる。

肉体、魔力、そして記憶

シグナムの全てがアギトのものと融合する。

(昔の、昔の……遙かな記憶?)

アギトの脳裏にフラッシュバックするイメージ。途切れ途切れのそれらは、戦乱の時代を描いていた。

(シグナムが、見てきた……戦いの……)

流れ込む記憶。そして想い。

(闇の　いや、夜天の書の、守護騎士……ヴァルケンリッターの
将　)

主との、出会い、別れ。喜び、悲しみ。死闘、敗北。勝利、消滅。絶望と

アギトは膨大な記憶に押し潰されそうになつた。

(希望)

シグナムが最後に出会った希望。叶るべき希望。
贖罪。

「騎士の……剣に誓つて……」

守り、戦う。

「ああ。あなたは……あたいに似てたんだな……」

この身を託すに足る、主に出会いたい。

「自分の全てを受け入れてくれる……主……」

アギトの魂に温もりが拡がる。

「戦う為だけに生まれてきたあたい達にも、幸せをくれる人は、いるんだな……」

シグナムの中にも、アギトの想いが伝わる。
実験による苦痛。覚えていない過去。長きにわたる孤独。ロードな
き融合騎の寂寥。

世界のどこかに自分を使ってくれる主が、きっといる。
ゼストと出会い、初めて幸福を手に入れたと思った。
だけど、ゼストは

「お前は、いろんなにも羨望と絶望を小さな胸に抱えていたのだな……」

…

アギトの心を見つめ、シグナムは吐息した。

「ならば。私がお前に希望を『『えてやる

己の中に入つてくるものに、強く語りかけた。

「かつて、私が主はやてから『『られたように」

「ああ……！」

あるいは、星と雷が夜天に『『えたよ』』……

「お前にあたいの全ての力を……！」

想いと炎が、一つになった。
融合が加速する。

ユーランにより、シグナムの外見がかなり変化していた。

騎士服は上着が無くなり、色は青紫色になる。籠手は金色で、髪が薄桃色に変わり、ポニー・テールを結ぶリボンも形を変えていた。瞳は薄い紫だ。

背には炎の四枚翼が生え、融合は完了した。

(……力が、満ちる)
(……力が、重なる)
(（……力が、溢れる）…）

そして、新たなる騎士 アギトユーラン・シグナムが誕生する。

その姿を皆は声もなく、振り仰いでいた。

「おい シグナム！」

沈黙を破ったのは、ヴィータだった。

静かに佇んだシグナムに、ゾンダーの拳が飛ぶ。

「 ふつ」

レヴァンティンを上段に構えた。

「紫電 」

炎が刀身に宿る。

「豪閃！！」

振り抜く。

ゾンダーの手が、凄まじい衝撃を受けて粉碎された。

「おおっ！！」

仲間達から、歓声が上がった。

「剣閃烈火！！」

燃える長剣を中段へ。

『火龍一閃！！』

シグナムはゾンダーロボに向かつてレヴァンティンを難いだ。激しい爆炎により、ゾンダーの体が傷を負う。

「あたし達も負けてらんねえな」

ヴィータやルネが追い討ちをかけるように、ゾンダーに攻撃を加える。

「おおおりやああ　　！！」

巨神の鉄槌が振り下ろされる。ヴィータのギガントハンマーは、風をも断ち切る勢いで、叩き込まれた。

バリアすら役に立たず、ゾンダーは脚部を割られて横転する。片膝をつき起き上がるが、すかさずルネに打撃を食らう。

「はあっ！！」

ブロウクン・ファントムに匹敵する拳撃が光を放つ。スカリエッティ・ゾンダーのフレームがへしゃげ、開いた傷穴から内部の機器が飛び散った。そこをさらに、スバルやティアナ達が攻める。

「おおおおっ、ディバイン・バスター！！」

「クロスファイヤー・ショート！」

「ルフト・メッシュ！」

「アルケミック・チーン！！」

集中的に攻撃を浴び、さしものゾンダーも再生速度が追いつかない。

その頃。

シグナムは大規模な魔法に備え、魔力をチャージしていた。
その手には、弓が握られている。

レヴァンティンがボーゲンフォルムをとつたものだ。

シグナムが扱える遠距離用直射魔法。シュトルム・ファルケン。だが、これは少し違つた。

「隼よ　さらなる羽ばたきを我に見せよ！」

ユニゾン状態により、通常のシュトルム・ファルケンを遥かに凌駕する、砲撃。

「炎熱の翼よ、焼き滅べせ！　ローハン・ファルケン！」

光熱に輝く矢が、解放される。射程内にいた者達が、慌てて待避していった。

炎の矢がゾンダーロボの胸部に命中する。

「一！」

ローハン・ファルケンは爆発を起し、ゾンダーの機体を穿つ。

「やつた……！」

護が快哉した。

彼は、浄解モードで飛翔し、戦況を見守っていたのだ。

「来よ、白銀の風、天よりそぞろ矢羽となれ」

「主はやて……」

振り返ったシグナムが、呪文詠唱を完成させたはやてに微笑んだ。はやはては頷き、

「後はあたしが……引き受けたよ」

魔力のほとんどを先程の砲撃で費やしたシグナムに替わり、はやはてが前に進み出た。

はやての魔法は、引き金を引けばすぐ発動する状態になつていて

「フレースヴェルグ！…」

管理局でも一、二を争う魔力の持ち主の魔法が炸裂した。

本来は、超長距離攻撃魔法だが、的が巨大であるうえ、中距離からの発射のため、設定をいくつか改編して、魔力チャージや照準に掛ける時間を省略している。その分威力には手を加えていた。複数の弾がゾンダー一体のみに着弾したのだ。とてつもない閃光と熱が局地的に発生した。

ゾンダーロボの全身を衝撃が揺るがし、金属の装甲が融解する。小爆発によって四肢は碎け、胸から胴にかけて断裂した。

そしてついに、ゾンダーメタルが機械の狭間に露顕する。

「こまつー！」

護は見えたゾンダーの核目掛け、高速で突っ込んだ。しかし、ゾンダーは門を閉じる様に、破壊された部分を再生しようとする。

「させないつ」

護は手を組み合わせ、ゾンダーへと近づく。見る見るゾンダーロボの巨体が視界を埋め尽くす。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……」

破壊と守護、二つの力を寄り合わせる。

「ウイータ！！」

真のヘル・アンド・ヘブン。

ガオガイガーの必殺技をも越えるそのパワーは、ゾンダーの再生しつぶした機体を完膚なきまで粉碎し、吹き飛ばした。完全に姿を顯したゾンダーメタルに護は手を添える。

「クーラティオー・テネリタース……」

命を甦らせる呪文を唱え、この力を浄解していく。その神秘的な光景に、人々は目を奪われた。

「あ……ゾンダーの核が」

毒々しい紫をしたコアから、徐々に人の形を取り戻していく。

「もう、大丈夫だよ」

護は素体となつていた男に、優しく言った。

機界生命体から人間へと戻つた男は、落涙しながら座り込んだ。

「私は……私は……ああ……」

その男　広域次元犯罪者ジエイル・スカリエッティは、頭を両手で抱え、その場に泣き崩れるのだった。

第八話 永遠の炎「 - E T E R N A L B L A Z E - 」（後書き）

今回登場したシグナムの魔法はオリジナルです。あしからず。
さて、次回は本局組のお話の予定です。

第九話 ジェイアーク復活！（前書き）

今回のイメージBGM

ロードス島戦記 - 英雄騎士伝 -

「怒れる狂戦士」

スレイヤーズTRY

「ダークスター」

勇者王ガオガイガー

「ジェイアーク～キングジェイダー」

「イークリップ～フュージョン」

魔法少女リリカルなのは

「レイジングハート、セットアップ！」

ほか

第九話 ジェイアーク復活！

トーレ・ゾンダーの荷電粒子砲が、放たれる。

白熱した輝きが、ソルダートとフェイト・ト・ハラオウンの網膜を灼いた。

「バルディッシュ……！」

ラウンドシールド
防御魔法を範囲を拡大して展開するフェイト。

柱の様なビームが、目前に迫る。

ビームはシールドにぶつかり、眩しい光が弾けた。

シールドは数秒間、エネルギーの奔流を塞き止めた後、耐えられずに揺らいで消滅する。すかさずバルディッシュは、フィールド系の防御魔法で熱と衝撃から、主を護ろうとした。

「フェイト！」

Jは前に出てフェイトを庇い、退避しようとする。

その時にはすでにビームの先端が一人を飲み込もうとしていた。洪水の様なプラズマの流れが、ジェイアークへ至る射線上の空間を、音速で貫く。

それはまさに数瞬の出来事だった。

「貴方は逃げて。私は大丈夫だから……！」

その数瞬の間に、フェイトは」の体を押して、ビームから回避させようとした。

プラズマ流の影響はフェイトなら電気変換資質があるため、ある程度はダメージを軽減できるはずだ。また、防御魔法も使える。一方、」はいくらサイボーグ戦士・ソルダートとはいえ、あのビームを受けて無事でいられるわけがない。

もはや判断を躊躇つっている時間はなかった。

逃げるには、今しかない。

「お前やジョイアーヴを捨てて生き延びてなんとする！」

一人だけ助かるのは、」の誇りが許さない。戦場で死ぬのなら、仲間と共に、と」は思っている。

その光景は遊星主アベルの目には、滑稽な底い合いに見えた。

「神に逆らう者の末路としては、当然の事ですね」

ジョイクオース級の攻撃でなければ、ゾンダー核を一瞬で摘出できないであろう。魔導師とやらがちました攻撃を与えても、ゾンダーは欠損箇所をすぐに自己修復できる。今の」に決定的な必殺技がない以上、時間が経つ毎にアベル側が有利になっていくのだ。

「さう。無限の再生力を持つ者が、最後には勝つのです」

アベルは勝利を確信した笑みを見せた。

眼下。

ビームはっとフェイントを直撃し、ジョイアークを打つ。

艦船ドックに爆発の光が満ち、なのはは強烈な閃光のため、顔を背けた。

「フュイトちやん　　！」

衝撃波が防御シールドを叩き、突破して、武装隊員達を翻弄する。建材にはひびが走り、壁や床の一部が砕けて割れた。

ゾンダーは展開していた胸部装甲を閉じ、インパルスブレードを構える。さすがのジョイアークも、ひとたまりがなかつたはずだ。

「む……！？」

光と爆風が消えてイオン臭が漂つ空間。　」とフェイントの姿はどうにも見当たらない。ビームの爆発で蒸発してしまったのか。だが。ジョイアークは無傷で在った。しかも、少しづつだが、動きはじめているではないか。

「外したはずはない……もしや　　」

アベルの疑問に応える様に、ジョイアークから声が響いた。

『みんな！遅くなつてすまなかつた』

紛れも無く、獅子王凱の声だった。

『助かつたぞ、凱！』

Jが礼を言った。

『間一髪だったよ』

聞こえてきたフェイトの安堵した声に、なのはは涙を浮かべた。

（よかつた……無事で）

「私がトモロに打ち込んだ凍結プログラムを……解除したのですか」

愕然となるアベル。

赤の星の指導者である自分の技術を破られ、信じられない気分になる。

「Gストーンの能力をつかったのですね……あの生機融合体が」

エヴォリューダーが機械の回路に直接、神経を繋げる能力があることは判明している。だが、彼女が設置した、あの無数の罠を潜り抜けてトモロの中枢に到達するのが、あまりに早過ぎた。常人ではもつと時間がかかるはずなのだ。

本人は認めたがらないだろうが、アベルは超人である凱の力を見くびっていたのである。

己らに対する絶対的な過信が、ジェイアークに復旧を成し遂げさせた、と言えよう。

今や、ジェイアークは艦首をゾンダーに向け、数百キロを離れて、対峙していた。

ジェイアークの艦橋。部屋は三角形を基調とした設計で、いかにも異星文明の産物らしく感じられた。

Jは艦長席に着き、ジェイアークの状態を確かめた。艦体は、管理局の手を借りて、ほとんどの破損箇所は修復済みである。トモロ・コンピューターとジュエル・ジエネレーターも正常に稼動していた。

ジェイアークは三重連太陽系でアベルにダウンさせられる前の状態に戻ったのである。

それも、凱のGストーンあつてこそだ。

トモロの凍結解除のため、凱はGストーンのパワーをありつけ籠めて流し込んだ。この時、Gストーンとジュエルの共鳴により発生した莫大なエネルギーに、ペンチノンは強制的に起動させられた。凱がGストーンを通して現状を伝え、トモロはすぐさまジョイアーグの武装を待機させる。

間もなく、ビームが向かつて来るのを感じたトモロは、ジエネレーティングアーマーで艦を保護しつつ、ESSミサイルを発射した。物質透過能力を持つESSミサイルは、弾頭を外す事で、ESS空間経由で遮蔽物に邪魔されることなく離れた味方の救助が可能となるのだ。これでJ達を回収し、ミサイルの弾道をトモロがコントロールすれば、艦に帰着できる。

そして、ビームはGストーンとの共鳴でパワーを上げたジエネレーティングアーマーにより、防がれた。

『すまない……ソルダート』。お前を一人で戦わせてしまった』

ペンチノンは謝った。

「気にするな、ペンチノン。動力源を断たれではお前とて仕方あるまい」

『だが、これからは私も戦う。お前の翼となつて……！』

「頼むぞ、ペンチノン。凱、貴様にも礼を言つ。よくぞジョイアークを蘇らせてくれた」

凱は苦笑し、

「正直、間に合わないかと冷や冷やしたぜ。これでここでの俺の役畢は終わった。俺も出撃する」

「ギャレオンはここにはいないぞ」

「そのかわり、俺には新しい力があるー！」

凱はGの紋章が輝く腕を掲げて見せた。その手首には、金色のブレスレットが装着されていた。

「ジョイアークはお前に返したぜ」

「武運を祈るつ」

凱はジョイアークを下船した。フェイトはかなりの魔力を消耗したので、休養のため艦内に残つた。

『ジョネーティング……98%から70%に出力低下』

凱が降りたため、Gストーンとの共鳴が無くなつた。ジュエルジェネレーターの出力が下がる。

「それでも」

単体で戦うよりは戦力が上がつてゐる。
ペンチノンの働きで、超弩級戦艦ジェイアーカは速やかに、武器に回すエネルギーを充填した。

「ふ。いくら復活したとは言つても、死に損ないのソルダートヒジエイクオースを喪失したジェイアーカなどに……」

アベルは再度、ゾンダーに攻撃を指令した。

ゾンダーには、いや、素体となつたトーレには、パルパレーパのケミカルボトルが埋め込まれている。これにより、遊星主の操り人形となるのだ。

ゾンダーの荷電粒子砲は、撃つにはエネルギー・チャージが必要だつた。エネルギー充填が終わるまでにはしばらくかかる。遠距離用兵器が使用できないゾンダーは、そのため近接戦を仕掛けた。

間合いに入つてしまえば、ジェイアーカの武装の大半が意味をなさなくなる。戦艦故の弱点だ。

「ペンチノン!」

『反中間子砲、斉射』

原子核を維持する中間子を対消滅させる事であらゆる物質を破壊する、ジェイアーカの主砲がゾンダーへ放たれる。

攻撃を受け、ゾンダーは動きを止めた。砲撃に、肩や腕部が砕け散

る。だが、再生してしまったためダメージは軽度だった。
そして、再びジェイアークに向かう。

「ペンチノン！？」

……なぜ、頭部や胸部を狙わない？

でなければ、致命傷を『えた事にはならないだらう。

『すまない、ソルダート』。私のミスだ』

「奴が来るぞ！」

トーレ・ゾンダーは跳躍。艦の上空に飛び、艦橋をエネルギー翼で
斬り裂かんとした。

五連メーザー砲が空中にいたゾンダーを撃つ。その衝撃でゾンダー
は体勢を崩した。

（できれば、施設を破壊する事はしたくはないのだが、やむを得な
い）

Ｊは艦体後部からＥＳミサイルを発射させた。

ＥＳ空間を経由する空間跳躍攻撃は、移動距離を無視して、一瞬で
相手への着弾が可能になる武装である。ただ、爆発の影響でこの場
にかなりの被害ができるのではないかと予想される為、Ｊは躊躇した。
しかし、ゾンダーを倒すことが最優先だと判断し、ジェイアークの
重武装を使用する決意を固めた。

だが、ＥＳウインドウを越えたミサイルは何故か見当違いの空間に
出現し、着弾した。ゾンダーへのダメージは僅かしかなかった。

「なぜ、弾道が逸れる……！？」

『私の弾道計算が狂っていたようだ』

「何だと」

ジェイアークの武器の制御もトモロ・コンピューターの役割だが、ミスが頻発しては強力な攻撃力も宝の持ち腐れになってしまいます。

「一体、どうしたのだ。まさか、アベルの」

凱はアベルが仕掛けた罠を全て外し、凍結プログラムも解除した。だが、彼の気づかぬ何らかのウイルスがひそかにトモロを犯していたのなら

『いや、そのような類いではない』

ベンチノンは自己診断した結果、Jの言葉を否定した。

『恐らく、強制的なシャットダウンによる後遺症だろう』

言つなればいきなり電源を引き抜かれたPCのようなもので、再度立ち上がったとしても設定やデータなど動作に不具合が起きる事がある。それと似ていて、トモロも計測・計算能力などに不調が生じていた。

無論、いつまでも続くわけではなく、現在、急いで自己修復機能を働かせ完全回復を目指している。

「だが、今この状況でこの不調は……不利になるな」

Jは唇を噛んだ。

「トモロは事前にメンテナンスができなかつたはず。故に機能的な支障をきたすのは目に見えていましたよ……」

優れた技術者でもあるアベルは、ジェイアークらの創造者なだけあり、その構造的な弱点を熟知していた。

「たとえ……私のプログラムを打ち破つても、今のトモロは機能低下の状態。さあ、」。役立たずのトモロでどう戦いますか……」

アベルの視界でジェイアークが激しく震動した。
ゾンダーがインパルスブレードで艦体を攻撃したのだ。
エネルギー翼は艦を保護する防護フィールド、ジェネレーティング
アーマーに阻まれ、白い艦体自体に傷はなかつた。

『ジェネレーティングアーマー、出力50%』

だが。攻撃と防御、双方のぶつかり合いにより、ジェネレーティングアーマーに使われるエネルギーが確実に消耗する。それに伴い出力も低下した。いかにジュエル・ジェネレーターが効率的で強力なエンジンとは言え、莫大なエネルギーにも限りがある。防御力に回し過ぎれば今度は攻撃力が落ちてしまう。その加減はトモロが得意とするところだつたのだが。

『破損軽微。』、『次元の海』で戦うほうが有利ではないか』

もっと広い空間に出ればいい。そうすれば、キングジェイダーにフュージョンできる。

「そうしたら、海にいる奴らとのゾンダーの挾撃を受けるかもし

れん。 まずはこいつを倒してから他の遊星主を伐つ!」

ゾンダーは一旦間合いをとり、胸部装甲を開いた。

苛電粒子砲だ。

「ぬう……エネルギーチャージが完了したのか!?!?」

ジョイアーカは防御力にエネルギーを回した。

ジェネレーティングアーマーにビームが衝突する。

「く

『出力68%から40%にダウソ! 外部装甲に若干の影響あり』

「堪える

その時。ジョイアーカの近くになのはが飛んできた。

加勢するため、なのはが結界を張る。

ビームの連続照射時間はおよそ三十秒ほど。その間、耐えきれば…

…勝機は必ず掴めるはずだ。」はそう信じた。

「エクセリオン……バスター!」

ディバインバスターはあのビームには効かなかつた。
だが、より威力が進化したエクセリオンバスターならば。

なのはの砲撃が、苛電粒子ビーム発生器官目掛け、ほとばしつた。

レイジングハート・ジェネシスから、大口径カートリッジが排莢されると同時に、空中で魔法と科学の砲撃が激突した。

「おおっ……！」

今度はなのはが勝つた。

エクセリオンバスターは荷電粒子ビームを押し戻す勢いで進み、ついにこれを爆散させた。水しぶきの様なプラズマの輝きが飛び散り、エクセリオンバスターがゾンダーの胸を打つ！――

「いまだ！」

Ｊは即断した。

彼は飛び上がつて叫んだ。

「フュージョン！」

Ｊはジェイアーカと一体化した。

「ジョイバーード、プラグアウト！」

小型戦闘艇ジェイバードと後部艦体のジェイキャリアー一機へと、ジェイアーカは分離する。

「ジェイダー！――」

ジェイバードはさりに変型し、全長20数メートル程のメカノイドとなつた。

その機動性はガイガーにも匹敵する。

「ベンチノン、後を任せたぞ」

ジェイダーは疾駆した。

「プラズマウイング！..！」

背部から扇状に羽根が拡がり、一気に加速する。なのはの頭を飛び越え、距離を詰める。

「プラズマソード！」

中性イオンの集合体が刃を形成し、伸長して剣となる。

トーレ・ゾンダーはプラズマソードを、インパルスブレードで受け流そうとした。

「はあっ！」

裂帛の気合とともに一閃されたプラズマソードは、インパルスブレードの翼を打ち壊し、ゾンダーの機体を袈裟掛けに斬り裂いた。

「五連メーザー砲！」

ジェイダーの指先は砲口でもあり、そこからメーザーが放射された。狙うは斬撃で破壊された傷だ。

爆発がゾンダーを打ち倒す。

「よし　！」のまま奴のゾンダーメタルを

摘出すれば、ゾンダーは停まる。

「　「　」」

警告の声が、その時響いた。

重なる声は、なのはとフロイトのものだ。

「むつ……ー？」

アベルが何かを仕掛けてくるかと警戒する。そんな彼の前でゾンダーが変化を起こした。

ギュアッ！！ 憎まじいエネルギーの嵐がゾンダーを中心に巻き起こる。

「なにっ。これは　！？」

ゾンダーの形態がさらに巨大に、そしてまがまがしいものへと変わっていく。それは、魔神とも形容すべき姿だった。

「へよ。ジョイクオース無くしてこいつに勝てるかな？」

いつの間にか、白衣の遊星主が高みから彼らを見下ろしていた。

「貴様……パルパレー！」

ケミカル攻撃を得意とする、遊星主の一人。

「貴様があれを仕掛けたのか」

パルパレーパは様々な効果を持つケミカルナノマシンを自在に操る。その中の一つに、機体のポテンシャルを限界まで引き上げるものがあった。

いわば、ドーピングだ。

本来ならパルパレーパが自分に使う物だが、アベルの命令でゾンダーに用いたのである。それにより、ゾンダーは機界新種に迫るパワーを手に入れた。無論、出力限界を越えた力はゾンダー自身にも反動を与え、機体を崩壊させるだろう。

とは言え、アベルやパルパレーパたちにとっては、単なる手駒にしか過ぎない存在だ。

敵を滅ぼしてくれるなら、破壊されても胸は痛まぬ。
彼らにとつてもこの力は嫌悪すべき力だからだ。

しかし。それにしても、ゾンダーを強化する行為は

「Ｚの力を利するもの……赤の星の名を汚す、邪悪なる者共め……」

Ｊは、怒した。

赤の星を滅ぼしたこの力をためらいなく使う事に、心の底から激怒した。

Ｚの力により故郷を失った彼だからこそ。

貴様は最もしてはならない事をしたのだ、アベルよ。

「故郷を護れきれぬまま死んだ、ソルダートたちの無念を、貴様は

忘れたかあ！！アベル！！

激昂し叫ぶ」の言葉も、遊星主にはど「吹く風だ。

「ふ……何をいいますか。全ては三重連太陽系再生のため　そのためになら私は如何なる力をも行使します」

「我々の行動を妨害する貴様は、神への反逆者として死ぬがいい！」

パルパレーパは傲慢に告げた。ゾンダー・プラジュナーはジェイダーに猛威を向ける。

「ぐああ」

さしものジョイナーも押され氣味となり、窮地に陥った。

しかも、強化されたゾンダーのスピードはジェイナーをも凌駕するものだ。

「！」

なのはとフェイトは彼を助けるため、飛び出した。
だが。ゾンダー・プラジュナーの圧倒的な力の前に、エース達も手こずるばかりだ。

『ＥＳミサイル発射！』

ジェイキヤリアーからミサイルが撃ち込まれるが、やはり、弾道の狂いが生じて致命的な攻撃にはならなかつた。

『機能の回復は、まだ完全ではないのか……』

ペンチノンは「」を歯がゆく思った。

『やうだ……凱はどうしたのだー?』

青の星の勇者は、戦うために下船したのではなかつたか。ペンチノンがその事に思い到つていた頃。

凱は本局内で局員達の避難を手伝つていた。主に非戦闘員の隔離区画への待避、及び、地上への転送を、ガジェット襲撃に備え、警護していたのだ。

その途中、治療を受ける命を見てきた。意識が戻つてはいながら、容体に異常はないため、凱はジョイアーカの元へ駆けつけようとした。

復活したジョイアーカならビリビリかゾンダーと戦えるだろ?。凱はそう考えていた。

現状の分析と連絡、避難誘導をリインフォースエーに任せて凱は艦船ドックに向かつた。

そこで目にしたものは、遊星主と、巨大ゾンダーと戦うジョイジャーの姿。

「おおおお!—遊星主!—」

凱は一人の遊星主に躍りかかつた。

驚異的なジャンプで、パルパレー・パに接近する。

「獅子王凱、この前の決着をつけるか

「ぐおつ!—」

パルパレーパの攻撃に、凱は壁に叩きつけられた。

余裕の笑みで凱に追いつき、腕のメスに似た剣で斬りつける。

「くつ！」

「ギャレオンも、ジェネシックマシンもない貴様に、神と戦えるのか！？」

それは、聖王のゆりかごの中でも言われたことだ。

「このままケミカル・フュージョンし、無力な貴様を踏み潰すのはたやすいが……」

巨大ロボット形態のパルパレーパ・プラスは、ガオファイガーをも上回る。

「それでは面白くない。この状態で戦つてやる！」

慈悲深げに、パルパレーパは言った。

「最も、貴様に勝ち田のない事実は、変わらんがな」

「パルパレーパ。お前こそ、俺を見ぐびりすぎだぜ」

立ち上がった凱は、左腕を上にかざした。

「『ガオーブレス』！ イークイーップー！」

《equus》

「なにをするつもりだ？」

いぶかしむパルパレーパの前で、凱の腕のブレスレットが光を放つた。

凱の肉体から着ていた衣服が粒子に分解され、魔力により構成された『バリアジャケット』へと変換される。凱は、身体各部に装甲を纏つた。かつて、GGG機動部隊の任務で装着していたアーマーと同じ形状のものだ。

そして、左腕には獅子の頭部を模した手甲が輝いている。これこそ、ルネと並んで、凱専用デバイスとして開発された、G式インテリジエント・デバイス『ガオーブレス』である。

凱は魔導師として、パルパレーパに戦いを挑むつもりだった。

「さあ、いくぜ、パルパレーパ！」

「神の前では無駄なことだ！」

パルパレーパが、先に仕掛けた。

『Protect Shade』

その攻撃を受け止める防御の魔法。

「小瀆な！」

「うおおおおおっ！」

Gストーンの光が、凱の拳に集まつた。

「プロウクン……マグナムッ！！」

射ち出された魔力は、弾丸と化してパルパレーパに向かう。スバルの技に似ているが、ガオガイガーの武装と瓜二つの打撃だった。

「ぬおおっ！！」

パルパレーパは凱の直射型砲撃魔法を食らい、予想外にダメージを負った。

「貴様つ……！」

「俺は聞いた。魔法もまた、勇気の力だと。ならば、俺にも使いこなせるはず！」

凱のエヴォリューターとしての能力は、魔導師のとっても有利に働いた。

高速演算、魔力の運営、デバイスとの相性……凱には優れた魔導師になれる素質を秘めていた。

さらに、機械と直接、神経を接続できる凱は、生機融合能力で完全にデバイスと一体化していた。ファンтомガオーとそうしていたようだ。

「貴様もまた忌まわしきこの力を使うか……」

「違う。俺の力は」

嘲笑うパルパレーパに、凱は高らかに言った。

「大切なみんなの命を護る、勇者の力だつ！」

魔法陣展開。パターンは円と方形を組み合わせたもの。

「詭弁だな。貴様の勇気などでは何も守り抜けぬ！」
バルパレー・パは、パーティ・キューブを召喚。

「ケミカル・フュージョン！」

無数のキューブと融合。

「バルパレー・パ！！」

巨大ロボットになった。

「なら、こっちも思い切りいかせてもらひうぜー！」

闘志を沸かせた凱は、ドックの天井と壁をうち破つてそびえ立つた
バルパレー・パ・プラスに、Gストーンの輝きを見せた。

一方。

ゾンダー・プラジューナーと戦闘中のジョイダーは、苦戦し追い詰め
られていた。

ジェイキアリアーとの連携で攻撃するが、上手くいかない。
フェイトは焦慮しながら、打開策を思案する。

そんな彼女に、バルディッシュが一つの提案を示唆した。

フェイトはすぐさま、Jにそれを伝え、Jはジェイキアリアー
のペンチノンに要請した。

『了解。回線オープン……情報を受信』

トモロの不調子を補うため、バルディッシュュが協力してジェイキヤリアーの制御を行うのだ。もともと、インテリジェント・デバイスは主に代わり魔法の起動、様々な情報、複雑な計算を処理するのが役割であり、しかも人間には不可能な高速演算が可能となる。同じ、意思を持った人工知性としても、トモロ・コンピューターと遜色のないバルディッシュュは、トモロの補正には実に最適だった。

バルディッシュュとベンチノンは膨大なデータを瞬時に共有し、計算を行つた。

助かつた。感謝する。

私は自分にできることをしているだけです。

お前は……どこか、あの紫のロボットに似ているな。

ベンチノンはボルフォッグを思い出していた。以前、まだ原種との戦いが続いていた時。彼はGGG諜報部の勇者ロボ、ボルフォッグのサポートを受けた事があった。

人ならぬ人工の生命体同士、短い期間だがよき交流を果たしたと思う。

ボルフォッグがそうであつた様に、バルディッシュュも常に冷静な思考を保ち、主に対する誠実な態度などは好感が持てた。

軌道計算・弾道計算・プログラム完了。発射シークエンス、用意……

ミサイル発射！

協力体制を築いたペンチノンは、次々に武器を撃つた。

ESS空間を通り、ミサイルはゾンダーの背後から着弾した。衝撃に揺らぐゾンダー。

しかし、それくらいで倒せる相手ではない。再生能力もより速くなっている。

倒すためには、どうしても、致命傷を一撃で与える必要があった。

（キングジョイナーにフュージョンできれば、あるいは　）

宇宙最強最大のメカノイド、キングジョイナーの戦闘力は絶大ではある。が、この場所で下手に戦えば本局にも破壊の爪痕が残ってしまう。管理局の中心が破壊されてしまったら、次元世界の治安が維持しにくくなるかもしれない。

（と言つて、ジョイナーだけでは奴の出力に劣る　）

Gストーンを持つ凱ならば、この窮地を打破できるかも知れないが、センサーによると彼はパルパレー・パと交戦中らしかった。

『J。あのゾンダーと戦うにはキングジョイナーでなければ無理だ』

「それはわかっているが……」

『宇宙で戦えば遊星主に挟み撃ちに合ひつ可能性がある。なら　』

ゾンダー・プラジューナーの連撃をいなしながら、今はペンチノンの

話を聽いていた。

『J・019との戦いで使用した手法を、使えばいい』

「そうか……！」

Jはたちびに理解した。

ジェイダーはジェイバードに戻り、ジョイキャリアーと合体、ジニアーアークへとなる。

「よし、ベンチノン。ESウインドウを展開しやー！」

『了解、ソルダートー』

「ああ。いまこそ、反撃の刻！」

『ESウインドウ……展開！』

「牽引ビームだー！」

ジェイキャリアーから一條の光線が伸び、ゾンダーを捕らえた。指向性のある、潮汐力を帯びたビームで、対象を拘束し引っ張る事ができる。

ゾンダーはもがき、剛力で逃れようとした。ジニアーアークはES空間にゾンダーを連れていく。

「Jは、なにを」「

アベルは知らなかつたが、原種大戦時、Jは強敵とES空間内部で行つていた。

赤の星での攻防戦で敗れたソルダートの一人 J-019は、絶望から自らゾンダリアンと化し、原種の走狗となつていた。原種は目障りなアルマとJ-002を始末するため、J-019を太陽系に呼び寄せたのだ。

かくして、同じソルダート同士の戦いがはじまり、JはGGGらの介入を嫌つてES空間での戦闘を敢行した。

ES空間は物理法則が異なる並列空間で、ES兵器はこの特殊な空間を渡つて空間跳躍する。

「Jの被害を抑えるため、ですか。我々とは関係のない世界なのに、優しいことですね」

アベルはJの行動を小馬鹿にするように、評した。

しかし。次の瞬間、アベルと、そしてパルパレーパの表情が、苦痛に歪んだ。

「ジエネシックオーラ……！？」

魔法陣の光の中から、彼ら遊星主の宿敵が現れた。

「ギャレオン！」

緑の星、カインの創りし鋼鉄の獅子。

Gクリスタルの行動端末。

そして、勇者王の墓幹をなすもの。

ギャレオンは凱達を護るよつこ、遊星主の前に立ち塞がつた。

遊星主はギャレオンが放つジェネシックオーラの波動で迂闊に近寄れない。

「ギャレオン、よく来てくれた！」

凱は原種大戦を共に戦い抜いた仲間を見上げ、嬉しそうに言つた。

「フュージョンだ、ギャレオン！！」

ジェネシック・ガイガーの性能は彼の許にも届いていた。
ピサ・ソールの自爆で果たせなかつたフュージョンを、いまこそ実現させる。

だが、パルパレー・パがそつはさせじと、ある男の名を叫んだ。

「カインよー汝の機体を奪い返すがよい」

ドックの壁を打ち抜き、緑の光を伴つて現れたる長身の遊星主。

緑の星の指導者・カイン。

いや、厳密にはカインの人格と能力をコピーした、ペイ・ラ・カインだ。

ラティオ 天海護の本当の父は、緑の星の機界昇華で生命を落としていた。

「カイン ！」

凱は、彼を本物のカインと思い込み、敗北した過去がある。結果、新生して間もなき勇者王ガオファイガーが完全に破壊される事態に陥った。

（あの時はカインを複製と見抜けず、自分の勇気を信じれなかつたから）

パピヨンはレプリ地球で凱に予言した。

貴方の信じるもののが信じられなくなつた時、凱自身の戦いが始まるのだと。

その戦いはもう、始まつてゐる。

（今度こそ、俺は　全てを信じて……戦う！）

迷いなき心で、凱は魔法を発動させた。

「プラズマホールド！」

「ぬお、体が　　！？」

雷撃の鎖がパルパレー・プラスの巨体を捕捉した。ガオガイガーの技を元に編み出したバインド系魔法である。

凱はすかさず《プロウクンマグナム》でパルパレー・パを打つ。

「があつ！」

パルパレー・プラスが衝撃に倒れた。それと同時に、凱はカインとギャレオンの許へと跳ぶ。

「偽のカインに真のギャレオンは渡さない！」

「ギャレオンは私のものだ 緑の星の指導者であるこのカインの……！」

ギャレオンの主は自分だとカインは宣言する。だが、彼に本当の意味で意思と呼べるものはない。元来、遊星主アベルの操り人形にしかすぎないからだ。

彼を止めようと向かってきた凱に対し、カインはサイコキネシスにラウドGストーンの力を上乗せして放った。

「うわあっ

『ガオーブレス』がプロテクションで凱を守るが、吹き飛ばされてしまう。

カインはその行方を追わず、空中で静止するギャレオンに近づいた。

「さあ、ギャレオンよ、お前の主を受け入れるがよい」

護が聞けば憤慨するであろう傲岸な口調で、ギャレオンに呼びかけた。

「ジエネシックにフュージョンできる資格があるのは、この私だけ

」

「違う……」

唐突に割り込んだ声。

視線を移すと、ギャレオンの肩になのはが立っていた。

「貴方には解らないの……？ ギャレオンが貴方を、拒んでいることを」

「なにを言つ…… ギャレオンの創造者である私を拒む理由がビリにある？」

カインは鷹揚に笑つた。

「ギャレオンの田を見れば…… 明らかだよ」

カインは鋼鉄の獅子の顔に田をやつた。

赤い双眸に、断固たる意思が宿つている。

「ギャレオンー？」

「ギャレオンは、眞の勇氣を持つ者だけを認めん……」

なのははかつて、護が言つた事と同じ主田の言葉を彼に突き付けた。

『ギャレオンは知つてゐ、本当の勇者をーー。』

勇気を持つ者 勇者。

恐怖を乗り越え、諦めずに戦つ者。

「そうだ、カイン。本当の勇氣を持たない遊星王では、勇者にはなれない！！」

態勢を立て直し、追いついた凱が言った。

木星決戦の時に出会った本物のカインこそ、「勇者」と呼ぶに相応しい高潔なる人物だつた。だが、このカインの「コピー」は感情のない人形だ。そのような者にGストーンは輝かせられない。Gストーンは勇気を力に変えるのだから。

「ギャレオン！俺に力を貸してくれ……！」

「……黙れ！」

カインは怒氣をあらわにした。しかし、これも単に、アベルが作ったプログラムに従つての表情に過ぎなかつたのだが。カインはラウドGストーンのパワーを凱に叩きつけようとする。

「させない、レイジングハート！」

なのはが凱を守るため、カインに『アクセルシューター』を撃つた。

「くつ

カインは防護の力で防ぐ。

「凱さん、早くフェージョンを……！」

「おひー！」

凱はギャレオンの口腔部に飛び込もうとした。

「なにが……勇氣だつ！」

「があつ！」

飛来したパルパレー・プラスが、背後から凱を攻撃した。

「弱き人間の貴様に……勇氣などあるものかあつ！」

「パルパレー・パつ……ぬおつ、体が！？」

「苦しいか。私のケミカルナノマシン、充分に味わうがいい」

彼が凱に放つたのは、パレツス粒子に似た毒物で五感の神経を破壊する、ケミカル攻撃でもあった。

「くつ　」

『ガオーブレス』が治癒魔法を発動しようとするが、それを制して凱が言つた。

「パルパレー・パ、超人工ヴォリューダーの力を知らないのか」

凱は体内のケミカルナノマシンに干渉し、そのプログラムを書き換えた。それによりナノマシンの効果を無効化してしまつ。

「ぬう……大人しく痛みなき死を与えてやろうとしたが……。いいだろう、神を本気にさせた後悔、貴様に思い知らせてくれるわ！」

「望むところだぜ！－」

凱は長髪をたなびかせ、不敵な表情を浮かべた。

一方、なのははギャレオン破壊に目的を切り替えたカインと交戦していた。

ふと、上方を見ると、ESウィンドウの中にジエイアークがゾンダー・プロジェクトを引きずり込もうとしている。

「ギャレオン、主に逆らうか！」

カインに向かつて、なのはに協力したギャレオンが、牙や爪で攻める。

「むう。我一人では分が悪いか」

カインは不利を悟った。

バルパレー・パも凱との戦いで手を離せないようだ。アベルのほうは先に母艦に帰還したのか、姿が見えない。
彼は戦場からの離脱を決めた。

「ギャレオンよ、いかにお前が我らと敵対しようが、最後に敗北するのはお前たちだ……ラティオも、な」

そう呟くカインは、遊星主の飛行空母ピア・デケム・ピットに通信を送った。

「ウーノ、私を転送せろ

」

と、命じる。

遊星主の手助けで衛星軌道拘置所より逃亡した戦闘機人ウーノは、直ちに命令を実行に移す。

だが、カインがピア・デケム・ピットに転送されようかという瞬間を狙つて妨害する者がいた。なのはだ。

「貴方を行かせるわけにはいきません」

できれば捕獲し、遊星主の企みを聞き出したいところだ。

「小娘……」

ならば、戦つてこの場を脱出しよう。

カインはソール11遊星主の戦闘用オプションであるパーティキューブを呼び出す。

「ソールウェーブ！」

パーティキューブから強力なエネルギー・ビームが発射される。なのはがバリアで防御した。

「なんて……パワーなの！？」

サイコキネシスなどの超能力にラウドGストーン。そしてパーティキューブ。

ペイ・ラ・カインは侮れない敵だと、なのはは再認識した。

「全力全開でいかないと……でも」

本局に被害が出るような戦い方は避けねばならない。それはJが危惧していたことでもあった。

「同じ魔導師相手なら、純粹魔力ダメージのみでもいいんだけど」

それなら建物への被害は少なくできる。
しかし、遊星主は質量兵器のみの世界から来た存在だ。
物理的な破壊の力だけが、彼らを倒すことができる。

いや。一つ、遊星主に有効な手段があった。

そのことをなのはは知らなかつたが、ギャレオンは、凱は、知悉していた。

「えつ……ー?」

なのはは振り返つて、ギャレオンを見た。

なのはの胸に、声なき声が聞こえたのだ。

それは、なのはに勇気ある選択を決めさせるものだった。

「ギャレオンの……声?」

ギャレオンの意思。その想い。

「私、が……?」

勇氣あるものよ。汝は勇者の資格ありき。

「ギャレオンと」

なれば、勇氣ある誓いに基づき、大いなる遺産の力、汝に与え
よつぞ……

「でも、貴方は凱さんの……」

「俺に構う必要はない　君がギャレオンにフュージョンするんだ
！」

なのはの愛杖、レイジングハート・ジョネシスはG式に進化した、
新たなデバイスだ。

Gストーンを組み込んだレイジングハートには、フュージョン可能にする機能を有していた。

「ジェネシックこそ遊星主に対する最大の切り札。奴らを倒す為にはギャレオンの力がいるんだ」

パルパレー・プラスの斬撃を回避しながら、なのはに伝えた。

「さあ、早く！　君の勇氣を、俺は信じている」

まだ躊躇するなのはに、凱は大きく叫んだ。
それで、彼女の気持ちは固まった。

「わかりました……私、やります！　フュージョンを…」

「馬鹿な。この宇宙の人間がフュージョンなどと……！」

パルパレー・パが吐き捨てた。

「彼女も蒼の星の人間だぜつ」

凱はなのは達について、ある程度の話は聞いていた。

「ましてやデバイスの助けがある。サイボーグだった俺よりも有利なはず……！」

ゾンダー・プラジューナーは、E.S.ウイングの彼方へと消えようとしていた。

「あの小娘にジェネシックが使いこなせるだと……？。カイン、なにをしている。その娘を始末しろ」

冷ややかな声に、僅かに焦りのようなものが感じられた。

「ジェネシックはお前達の天敵だったな。よほど、怖ろしいらしいようだな」

「神に怖れるものなど……ない！！」

パルパレー・パの振るうメスを、凱の直射型攻撃魔法が破壊した。

「やはり、図星のようだな、パルパレー・パ！！」

「貴様」「

彼らが戦うのを視界の片隅に捉えながら、なのははレイジングハート・ジェネ시스を手にギャレオンの前に飛んだ。

「フュージョン！！」

『Fusion Mode』

なのはのバリアジャケットが変化する。光に分解されて、新たに再構成された。

機体とフュージョンするために造られた特殊な防護服だ。胸元に宝石の形態に変わったレイジングハートが光っている。

「むりっ」

カインが小さく呻いた。

ギャレオンの口蓋部になのはが吸い込まれる。

「やつたな……！」

凱は歓声をあげた。

「ジエネシック・ガイガー……！」

なのはがギャレオンの体内に接続され、メカノイドヘシステムを組み換える。

だが、変化はさらに続く。

『Fusion Revolution』

そして かつてない奇跡が、起る。

「不屈の心よ・星の輝き・大いなる力を・勇気ある誓いのもとに
!!」

バルパレーは、驚愕した。

「信じられん……これは……どうしたことだー!?」

彼は魔法を理解していなかつた。
想いが奇跡を生む、勇気の力を……!!

鮮やかな縁と桜色の輝きのなか、レイジングハート・ジェネシスは、
創成の力を解き放つた。

第九話 ジェイアーク復活！（後書き）

エンディング・テーマ

エターナル・ブルー

煌めく星座は　なのはの砲撃
それは選ばれた　術師の証

赤い宝石掲げ

防護の服を纏つて　oh yeah

ああ　なのはの空はブルー

君の願い　信じれば叶うよ

ああ　心を繋ぐブルー

シユートの輝き

傷つき倒れた　夜には逢いたい
フェイトの腕の中　眠れるように

辛い戦いを越え

あなたと友達になれた　oh yeah

ああ　見上げる空はブルー

熱い勝利　デバイスに誓った

ああ　忘れはしないブルー

ブレイクの輝き

ああ 明日の空はブルー

共に夢を 信じてる仲間さ

ああ 心も空もブルー

永遠の輝き

ああ 見上げる空はブルー

夜の終わり 新しく誓った

ああ 未来へ続くブルー

永遠に輝く

第十話 奇跡！スター・ガイガー！！（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「ファイナル・フュージョン」「勇者王誕生！ -PREVIEW-

未発表Ver」

魔法少女リリカルなのは

「星よ集え～スター・ライトブレイカー～」

ほか

第十話 奇跡！スター・ガイガー！！

ジェイアークの艦橋に戻っていたフェイトは、そこからなのはがギヤレオンとフュージョンするのを目撃していた。

（なのは……！）

メカライオンの姿から、人型のメカノイドに変わると、息を飲んで見守った。

（あれが……ガイガー！）

ジェネシック・ガイガーの勇姿にフェイトは感嘆した。

一瞬の後、フェイトとジェイアークはゾンダー・プラジュナーを引き連れて、ESウインドウに突入していった。

カインは、己のために開発されたと思い込んだ機体が変型するのを、固い表情で見ていた。

通常のガイガーを越える、対遊星主用アンチプログラム・ジェネシック・ガイガー。

ギヤレオンのGURライドとなのはのリンク・コアが接続され、その全身に魔力が行き渡った。

レイジングハートがその機能を掌握し、なのはの意思とフィードバックする。

なのはの魔力光と同じ色の翼が六枚、ガイガーの背から伸びた。神々しい印象を与える翼だ。

これこそ、魔法の奇跡が生んだマジカル・メカノイド。魔法の勇者とも呼ぶべき機体。その名も、スター・ガイガー！

「ジエネシック・クロウ」

ガイガーの格闘戦用武器が装着される。

「ぬっ！！」

スター・ガイガーはカインに迫った。
カインはサイコキネ시스で戦おうとするが

「ぐああっ！」

ジエネシック・オーラを纏つたクロウの一撃で、カインの肉体を擊破。ジエネシック・オーラに遊星主は太刀打ちできない。彼は細かな粒子に分解され、消滅した。

「カイン　！？」

パルパレーパは忌ま忌ましい敵の誕生に、憎悪の視線を送った。

「次はお前の番だぜ、パルパレーパ！！」

凱は気迫を籠めて攻撃を繰り出した。

「うぐっ……小癪な！」

パルパレー・プラスが揺らぐ。凱は一気に踏み込み、至近距離から砲撃を胸にぶつけた。パルパレー・プラスのダメージは軽いように見えたが……

「この程度の攻撃で……ぐわあ！？」

苦痛の叫びがパルパレー・プラスから漏れた。

「か、体が……！？」

痛みに震えるパルパレー・プラス、機体の制御ができなくなつた。

「お前がさつき俺に打ち込んだケミカルナノマシン、返したぜ！――」

先程のケミカル攻撃、凱はナノマシンのプログラムを書き換えて逆にパルパレー・プラスに注入したのだ。それはパルパレー・プラスを蝕み、動きを封じた。

「ぐおおおおつ！」

凱の腕に緑の光が集う。

なのはの必殺技と見紛うような、収束砲。

「ブロウクン……ファントーム！――」

ブロウクンマグナムを越えた一撃。

パルパレー・プラスの機体が、碎け散る。

「ぬあああああつ……！」

爆発が、パルパレーパを粉碎した。

「はあはあ……」

初めて魔法を使った実戦で、凱は疲労を覚えた。だが、まだ敵の全てが倒されたわけではない。

（一・……）

並列空間で戦っているはずの「達に、凱は思いを致した。

（あいつらは、勝てただろうか……）

それまで戦場だった場所に、沈黙が落ちた。

本局の各所が戦闘で半壊し、局員達が事後処理に走りはじめた。

ES空間内。

トーレ・ゾンダー・プラジュナーは、空間に入つたといひで、牽引ビームから解放された。

そこは無重力の世界であり、特異な法則に支配されている空間だ。

「メガ・フュージョン！－」

ジエイアークは再度、二機に分離し、合体する。

「キングジエイダー！..」

百メートルを越える全身に、無数の武器を搭載した、ジャイアント・メカノイド。

「決着をつけてやる！」

Ｊは鋭い闘志を燃やした。

そこへ、桜色の翼を生やしたガイガーが現れる。なのはがフュージョンした、スター・ガイガーだ。

そして、二体のメカノイドと強化ゾンダーとの戦いが開始される。

ゾンダー・プラジュナーは肩や胸の装甲板を開き、白い球体を露出させた。小さな稻妻が爆ぜる光球が、その球状の器官の上に浮かぶ。なのはのアクセルシユーターのような技だ。

それが、キングジエイダーとスター・ガイガーに向けて発射される。

自動追尾機能があるのか、回避しようとする彼らに正確について来る。

『Wide Protection』

だが、ゾンダーの機雷攻撃も、なのはの防御魔法には通じず、キングジエイダーはジェネレーティングアーマーで身を守った。

「反中間子砲、十連メーザー砲！！」

キングジェイダーは凄まじい火力で反撃、ゾンダーの身体は爆発に包まれる。

「シユートツ！…」

なのはも得意の砲撃でゾンダーにダメージを与える。

ゾンダー・プラジュナーは再生能力で傷を癒そうとするが、Jとなののはは休まず猛攻を加えたため、再生が追いつかなくなってきた。

それでも、死を恐れぬゾンダーは、自己の破損に構わず戦う事を辞めない。

『Restrict Lock』

しかし。ゾンダーはなのはのバインドにより、拘束されてしまう。

以前、強化前のゾンダーは管理局武装隊のバインド魔法を容易に引きちぎつたが、魔力とGストーンのパワーで威力を増したなのはの『レストレストロック』は剛力を以つても無理であった。

「うおおつー！」

キングジェイダーは、拘束により動きを止められたゾンダーに、集中砲火。

そこへさらば

「スター ライトブレイカー！…」

ガイガーの胸、ギャレオンの顎の前方に形成された魔力球が、最強の魔法を発動させる。

一撃必倒。

砲撃が、ゾンダー・プラジュナーの胸部に直撃した。

「！」

その装甲が、まるで紙で出来ていたかのよう、「」、易々と砕け散った。

「いまだっ」

キングジェイダーがゾンダーに強襲をかける。
腕を穿たれた胸に突っ込む。

ゾンダーの機体から、核となっていたゾンダーメタルを引き抜いた。

「デイベインバスター！」

ゾンダー核を失った機体を、なのはが粉々に破壊した。
ゾンダーを構成していた物質は、きらきら輝きながら、砂粒のような粒子がES空間に消えていく。

「これで……ゾンダーを浄解できるな」

Jはペンチノンに通常空間への復帰を命じた。

ES空間からの脱出のため、时空を隔てる扉が開かれる

時空管理局本局。

凱やシャーリーは、固睡を飲んで戦士達の帰還を待ち続けた。ES
ウインドウが閉じてもう数時間は経過した気がする。
無論それは錯覚で、実際には十数分しか経っていない。

(ゾンダーは……)

倒せただろうか

凱が自問した時、『ガオーブレス』が知らせてきた。

『The distortion of the dimensions was perceived』（時空間の歪みを感知しました）

はっと、上空を見上げると、そこから圧倒的な存在が感じられた。

ES空間から、超弩級戦艦ジェイアーカと、スター・ガイガーが還
つてきたのだ。

「ゾンダーメタルは、回収した！」

Jは高らかに睫報を伝えた。局員達は歓びの表情をあらわした。

「あとは、次元の海にいる遊星主か」

クロノ提督は三段式飛行空母ピア・デケム・ピットの映像を睨んだ。

アベルは艦に撤退し、パルパレー・パとカインは敗退している。

(ああ、どう出る?)

緊張しながら出方を待つたが、やがて攻勢を断念したのか、ピア・デケム・ピットは艦首を翻して退きはじめた。

魔法陣が出現し、巨艦は光に包まれて、かき消える。本拠地であるピサ・ソールに戻ったのだろうか。

クロノはほつゝと息を吐いた。彼は指揮下にある艦隊に、ピサ・ソールの動向をより徹底して監視するように、通達を出した。

「第一種警戒体制、ここに解除する!」

管理局は戦闘状態を切り替え、施設の復旧と負傷者救助を優先して活動をはじめる。

その間に、護がミッドチルダから駆け着けてきた。ゾンダーメタル浄解のためである。

「ラティオ、どうした。顔色が優れぬようだが……?」

少年の顔を一瞥して、怪訝そうに口が訊いた。

「大丈夫、ちょっと向こうで戦つて疲れただけ……」

無理しているのだろうが、護は明るい口調で言つた。

「そりゃ、ならいいのだが……」

Ｊは、ミッドチルダでなにがあったのではないか、と疑つたが敢えて問い合わせしたりはしなかった。

護はゾンダーメタルの浄解に取り掛かった。

ゾンダーメタルはジェイアーケの保管室に保存されている。かつてはゾンダークリスタル保管に使われていた部屋だ。

淡い、緑の輝きを発しながら、護が断ち切られた命を繋ぐ呪文を唱える。

ゾンダーメタルから人型へ。

生機融合の力が解き除かれ、トーレの姿を取り戻していく。
かつて、浄解を受けた数多の者達と同じ様に。トーレもまた、滂沱と落涙しながら己の罪を悔い改めていた。

「さあ。奴らの計画について、知つてることを全て吐いてもらおうぞ」

トーレは性格が一変した態度で、供述する。
彼女の口から、遊星主の企みが語られた。護はアベルの計画に対し、衝撃を受けた。

「何でも言います」「

トーレは性格が一変した態度で、供述する。

アベル……君は、なんという……！

クロノはこの会話を、ミッドチルダにいるままでにも聞かせるため、
急いで通信を開かせた。

第十話 奇跡！スター・ガイガー！！（後書き）

ソール11遊星主の計画により、次元世界に危機が迫る。はやては決断する。

「今度はこちらから、ぶつ叩きに行くで！！」

かくして、新装備を配備した機動勇者隊は、遊星主への逆襲を開始する！

なのははヴィヴィオを取り戻すため、カインの遺産を我が為に行使する事を決めた。

フェイントもまた、Jと共に新たなる力を啓かんとしていた。

凱と護は、己が宿命に決着を着けるため、勇気ある誓いを改めて自分に課していた。

決戦に至るための序章 第十一話「未来への光」TAKE OFF！

第十一話 未来への光（前書き）

今回のイメージBGM

勇者王ガオガイガー

「前話回想」

「いのちつさても」

「勇気ある戦い」

「希望」

ほか

第十一話 未来への光

ミッドチルダを見舞つたゾンダーによる破壊活動は終息した。

「……コクトウーラ！」

緑の髪の少年　天海護の唱える淨解の呪文が、ジエイル・スカリエッティと呼ばれる人間をこの力から救い出す。

凶悪な広域次元犯罪者として名を馳せた男は、全くの善人として生まれ変わったようだつた。

泣いて罪を悔い、罰を請う姿は、一種の異様さを見ている者に覚えさせた。

「ぐぎやあつー？」

その、スカリエッティの口から奇妙な悲鳴が上がつた。

同時に、ミッドチルダの平和を震撼させた男の胸から、鮮血が噴き出す。

「なつ……！」

護の眼に、信じられない光景が映つた。

スカリエッティの胸から、細い纖手が突き出していた。手は血で濡れている。

「な、なぜ……」

スカリエッティの掠れた声が問う。

腕が引き抜かれ、致命傷を負った体が光に染まつた。それがレプリジン消滅の運命だと、護は知っている。だが、複製とはいえ、せつかく浄解できた人物が消えていくのは、彼には堪えられなかつた。

「どうして！？」

悲しみを含んだ護の叫び。スカリエッティの体は光の粒子と化して、崩壊していった。

「仲間なのに……！」

レプリスカリエッティを殺害した女は、悪びれることもなく言い放つた。

「あんなの、私が知っていたドクターじゃないわ」

そう。彼女　クアットロが愛し忠誠を尽くしたドクター・ジェイ・ル・スカリエッティはあのような、柔弱な男ではなかつた。ゾンダー化と净解について充分な知識が無かつたクアットロは、スカリエッティが急に変節したように見えたのだ。それゆえ、余計なことを話される前に始末した。

最後までスカリエッティを慕い、ゆりかご戦でも執念深くドクターの夢を叶えようとした彼女だからこそか。泣いて許しを請うスカリエッティは、失望以外の感情をもたらさなかつた。

だから殺した。

クアットロは戦闘機人の中では非力な方だが、それでも、その抜き手は人間一人を即死させるほどのパワーはある。そんな彼女の後ろでは、遊星主ピルナスが、嘲笑ともとれる微笑を浮かべて佇んでいた。

「どうせ、ドクターの変わりならこくらでもあるんだから……」

スカリエッティがナンバーズの体内に残した、彼自身の因子だけではない。クアットロはピサ・ソールの能力を知っている。物質復元装置があれば、何度もドクターは蘇るのだ。

クアットロの余裕はそこに起因する。スカリエッティのレプリジンは彼女の中に在った因子を基に、ピサ・ソールで複製したものであった。

だが、それでも。

あつたりと、自分の創造主を手に掛ける非情さに、はやて達は眉をひそめずにはいられなかつた。シグナム等は露骨に嫌悪を表わしている。

護も、仲間を裏切る行為は、許せなかつた。

「ふん、まだ一戦交えたそうな顔をしてるわね」

クアットロは、自分を包囲する面々を冷たく見下しながら言った。

「残念だけど。私達の目的は大方達成されたし。今日は引き揚げさせてもらひうわね」

「ここの状況下で逃げられると思っているのか?」

夜天の主はやて、守護騎士達、若きストライカー達。

精銳が揃つ陣容である。クアットロやピルナスといえど、無傷で逃走ができるわけがないと、誰もが思うだろう状態だ。

「馬鹿め。私達には、ピア・デケムがあるのよ　そして、ウーノ姉様も……」

クアットロはピルナスに、遊星主の旗艦を呼び出すよう頼んだ。

「ピア・デケムに私達の転送収容をうながすように姉様に

「ああ、それなんだけど……眼鏡けやん」

羽を使い、浮かんだピルナスが、不吉さを漂わせる口調でクアットロに告げる。

「ドクターちゃん同様に、貴女ももうこらくなつたの」

「ど、どうして？」

「用済みつてことよ

クアットロの眼が見開かれた。

「な……!?」

「貴女の力を見せてもらつたけど……大して役には立たないみたいだし。ドクターちゃんと一緒に消えてもらつわね」

あくまで明るいピルナスの言葉だったが、その内容は凄惨であった。

切り捨ての宣言に、クアットロはうつむいた。

「ちよ、ちよっと、待つて……！ 私は！」

「まあ、例の物を奪う役には立ったけど、あの程度の戦闘しかできないんじゃあねえ！」

ガジェットを操った戦いのことだろうか。

元来、戦闘より諜報工作に向いた能力の彼女には、酷な言いである。

「じゃあね、眼鏡ちゃん」

「ひいつーー？」

遊星主をあてにしていたクアットロは、捕縛の為に迫る管理局に恐怖の眼差しを向けた。

「私はまだあなた達の力にな あつーー？」

「つぬさい、静かに捕まれ！」

クアットロの腕を、ルネが掴んだ。サイボーグの怪力である。同じ機械の身体といつても、クアットロには振りほどくパワーが足らぬ。ルネは慣れた手つきで戦闘機人を拘束する。

「お願い、見捨てないで……」

嘆願するクアットロに、ルネが怒鳴った。

「やがましい！ ギムレットかよてめえは！」

ルネはフランスで倒した、バイオネットのサイボーグ指揮官を思い出し、苛ついた。

ガオファイガーに敗北したギムレットは、見苦しく命請いをした挙げ句、逃げ出そうとしたところをルネにとどめを刺された。

「理不尽よつ……」

クアットロの抗議はピルナスの失笑を買つただけだった。

戦闘機人は救い主の遊星主を仲間だと認識しているようだが、実態は違う。

クアットロは遊星主と協力することで、ドクターの夢が叶うと信じていた。その喜びが、普段の彼女でなら見抜けたであろう、遊星主の魂胆を悟らせなかつた。

護やしに対しそうだつたように、戦闘機人などアベルには道具にしか過ぎない。

その道具があまり役には立たぬと判明した時、廃棄を決定しても遊星主の心が痛むことはない。

「さよなら。眼鏡ちゃん、この快樂と美の女神から手向けよ。受け取りなさい~」

上空から凄まじい火炎の渦が、クアットロに放射された。
それはクアットロを捕らえたルネにも殺到する。

「ああつ！？」
「うわあつ！」

高熱に一人は焼かれる。

ルネのデバイス《リオン・レーヌ》がプロテクションを発動した。

短い時間だが、プロテクションは金属が融解するような高温にも耐えられる魔法である。クアットロは魔法発動までの間、まともに炎を浴びていた。ルネは彼女を盾にする恰好になつたため被害は軽微だ。

「しぶといわねえ、子猫ちゃんたち！」

ピルナスは襲い来る魔導師をあしらいつつ、クアットロとルネに接近する。心底懲しんでいる相貌だ。

「さやああつ……！」

クアットロの身体を、ピルナスの鞭が打つた。
バインドにより彼女は回避できなかつた。

「ピルナス！」

怒りに燃えたルネが、遊星主に一撃を与えるとする。それを素早い動きで避け、ルネを蹴つた。

「ぐわー！」

『獅子の女王』を無視して、ピルナスはクアットロに鋭い針を突き刺した。

「うつ……あつ……」

「できるだけ、痛くないようじしたかったんだけどねえ」

そう、うそぶくピルナスの声はもはやクアットロの聽覚には届かな

かつた。

「ピ……ルナ……ス……っ！」

彼女の、天へ指し伸ばされた腕は、誰に向けたものか。
クアットロの胸に突き刺した針から、ピルナスは炎を発した。

「……っ！！」

クアットロが爆発した。

多くの野望を持つていた彼女には不本意すぎる破壊であつた。最も、これまでクアットロがしてきた事を振り返れば、因果応報な死だつたかのかもしけないが……。

「さすがに外道だな」

ピルナスのもとへ舞い戻ってきたルネが、吐き捨てるよじて呟いた。

「子猫ちゃん、貴女はまた今度よ。じゃあね」

「そりはいがん！！」

シグナムがシュランゲ・フォルムのレヴァンティンを放つ。
空中で鞭と連結刃が激突した。

「あら、おつかないわねえ」

それでもピルナスは畏れた様子は見せない。

キヤロはバインドを発動して捕らえようとする。

だが、ピルナスの動きは早く、捕獲できない。

「あいつはあたしがやるつ……」

ルネが拳に魔力を溜めて、跳ぶ。

「でやあつーー！」

「ひち……」

ルネの攻撃力は以前より上がっている。

侮っていたピルナスは脇腹に打撃を食らい、失速した。

「逃がしはせえへんで！！」

はやは魔法の詠唱を完了させ、起動させよつとした。

「ピア・デケム！」

それよりも一瞬早く、ピルナスの呼びかけが旗艦である姫母に届く。要請を受けたウーノはすぐに転送を開始。魔法陣がピルナスの足元を照らす。

「転送魔法……か」

戦闘機人を味方にして、遊星主は魔法すり使ふよつになつたのか。はやは唇を噛み締める。

「駄目だ……阻止できなかつた……」

ピルナスの姿がかき消えた。

「次は必ず……！」

ルネが押し殺した声で言った。獅子の名にかけて、絶対に獲物は仕留めてみせる。バイオネットの幹部をそうしたように。一矢も報いずに退きはしない、とルネは誓つた。

一方。

護は改めて見せ付けられた遊星主の不義に、心を重くしていた。

（自分達の役にたたなければ、協力者でも容赦なく命を奪つ……）

クアットロはたしかに酷い犯罪者だったかもしれない。だけど、殺す必要はなかつたはず。

罪を償う機会は与えるべきだった。改心次第では恩情も有り得たのではないか、と思つ。

だが、結果的に、クアットロは夢と呼ぶ野心への執着で、身を滅ぼすことになつた。

例え裁きを受けねばならなかつたにしても、遊星主に殺されるのではなく、裁判によつてなされるべきだった。彼女により人生を狂わされた被害者のためにも。

護の胸に、悲しさと悔しさが去来する。

「護くん」

はやてが疲労した表情で、護に言つてきた。

「ソレでの戦いは終わった。護くんには、本局の応援を頼むわ」

本局にもゾンダーが現れたと、通信で知らされていた。

「後のことば皆に任せたらええ」

「はい。わかりました」

先にギヤレオンが本局に行つてゐるが、ゾンダーの凈解には護の力がいる。

首都を後にした護は、本局に駆け付けた。

そこでは、管理局と遊星主・ゾンダーとの戦いが繰り広げられた痕跡が認めらた。

やがて。

ES空間での苛烈な戦闘が終結し、帰還したキングジェイダーの手には、ゾンダーメタルが握られていた。

護はゾンダーの素体にされたトーレを浄解。マイナス思念を全て洗い流されたトーレは別人のような従順さを見せた。

管理局は尋問を開始し、様々な質問が彼女に浴びせ掛けられる。それらにトーレは素直に答えていった。

戦闘機人が知り得たアベルの策謀。

それについて、トーレは洗いざらい話したが、その口述は、護や凱、Jに衝撃を与えるのだった。

「時空管理局機動勇者隊の総力を以つて、ソール11遊星主に対する攻勢をここに、決定します」

八神はやての宣言する声が会議室に響き渡つた。

既に遊星主襲撃事件からは、数時間が経過している。

未だ被害の調査と復旧が続くなか、組織の関係者は緊急召集を受けた。

本局よりは被害の少ないミッドチルダ地上本部が遊星主対策会議の開催場所だ。

司令官はやてを筆頭に、提督、隊長クラスが出席し、さらにはかの「伝説の三提督」もこの会議に参加していた。何しろ本局が直接進攻を受けたのは開局以来、初めての事なのだ。三提督といえど黙つて見ていることはできない。

レオーネ・フィルス、ラルゴ・キール、ミゼット・クローベル。創設期に活躍した三提督は、管理局の名誉職であるが、隠然たる権勢を持ち、非公式にだがはやての六課設立にも協力してくれた恩人でもある。次元世界の平和を護りたい、という気持ちは誰よりも強い人物達だ。

さて。先の襲撃事件の陰で、本局とミッドチルダから盗まれた物体がある。

「迂闊でございました。まさか遊星主が襲つて来るとは思わず……油断いたしました」

警備の責任者が報告してきたその奪われた物体とは、なのはとフヒイトには因縁のあるロストロギアだった。

「ジュエルシードの……強奪！？」

魔力の結晶体であり、複数を用いて起動させれば次元震をも引き起こせる、強力なロストロギア。そして、なのはが魔法に出会い、フレイトがなのはに出会うきっかけを作ったロストロギアもある。なのはが九歳の時遭遇したP.T.事件の解決後、ジュエルシードは管理局によって厳重に保管されていた。

それから数年後。スカリエッティはジュエルシードを奪い、機械兵器の動力に組み込んで使用した。

J.S.事件後は、回収されたものを含め、全てのジュエルシードは新たに封印を受け、厳しくセキュリティを施された各管理施設に保存された。悪用されれば恐ろしい結果を生むのは自明だからだ。

しかし、遊星主にそれを奪い盗られてしまう。それが何の目的の為かは不明であったが、捕獲されたトーレの証言で判明した。

それによると、本局と地上の襲撃は、どうやら陽動と考えられる節がある。

管理局の戦力がゾンダーに集中していた隙縫を縫うように、アベルは遊星主ピア・デケムとポルタンにガジェットを率いらせず、ジュエルシードを奪わせたのだ。保管所を守る警備隊も精銳だったが、遊星主には叶わず、みすみすロストロギア奪取を成功させてしまった。

アベルの目的は三重連太陽系の再生である。だが、次元世界からの帰還方法が解らない現在、この世界に三重連太陽系を復活させるしかない。そのようにアベルは断を下した。

そのために、次元世界を滅ぼす。

だが、如何に遊星主が強大とは言え「次元世界滅亡」には手がかかる。そこで、この世界で生まれた力を使い、「次元世界を滅亡」させるアベルの言い方では「浄化」させる。

ジュエルシードは儀式により持ち主の願いを叶えるが、次元震を起

こしてしまつては時空連續体（つまり一つの次元そのもの）という「器」ですら破壊されてしまつ。それでは、三重連太陽系を再生させる事はできず本末転倒になる。

それで、アベルはジユエルシードの力により、次元世界の機界昇華する方途を選んだ。

「機界昇華だと……？」

ソルダートはアベルの考えに、信じられぬ思いだつた。
故郷に還れぬ焦燥で自暴自棄になつたのか。

アベルのやり方には理性を感じられない、とつは言つた。

（ゾンダーといい、なにゆえノの力を頼る……！？）

ノマスターと相打ちすら躊躇わざ戦つたには、理解不能である。

（それだけ、二重連太陽系を再生させる念いが強いのか　だが）

罪なき他者を滅ぼして得た再生に、価値はあるのか。ノは疑問に思う。

（アベルは間違つてゐる。そのような計画のために、アルマを利用させはせん！）

アルマ 戒道幾巳は現在、遊星主に捕われ、『ピア・デケム・ピット』のメインコンピューターの代わりに使われていた。いわば人質にとられたようなもので、ノを苦惱させる材料の一つになつている。

「奴ら　機界昇華の後、アルマに淨解させる氣か？」

遊星主パルパレーは人間を操る技術に長けている。ケミカルボトルを埋め込まれた凱がそうであつたように、本人の意に介さず、戒道の肉体を操作するだろう。

「だが、この広大な次元世界を、彼一人に浄解させるのか。膨大な時間がかかるぞ」

凱が疑問を呈した。それに護が答える。

「……遊星主には、ピサ・ソールがあるよ、凱兄ちゃん」

「そうか　！」

物質復元装置であるピサ・ソールには、複製を生み出す能力があることはすでに周知である。一人のアルマならば、世界全ての浄解には、途方もない時間と労力がいるだろう。

だが。それが百のアルマ……千のアルマならどうだろうか。レプリジンを作り、操れば極めて短期間に次元世界の機界昇華を浄解できる。

機界昇華により全生命は機界化し、浄解によつて有機体を取り戻してもものはや戦う力などありはしない。遊星主は蟻塚を踏み潰すように、簡単に次元世界を亡ぼせる。

あとは白紙の「とき世界が遺るはずだ。そして、データを上書きするように、新しく、ピサ・ソールを使って三重連太陽系を再生させればいい。

これが、トーレの証言により得られた、アベルの計画の大まかな筋書である。

「ひどい……」

フェイトはあまりに非道な計画に、怒りより哀れみが湧きあがるのを覚えた。

人造魔導師としての出自から、フェイトは「生命」の重たさと価値を常日頃から尊んでいた。実母に失敗作として廃棄させられそうになつたからこそ。生命を玩具の様に扱う者を許せない。スカリエッティのように。

そして、彼ら遊星主はスカリエッティをも越えた、人間の尊厳を踏みにじった大量殺人を行おうとしている。

「どうして……遊星主は自分達の故郷を滅ぼした力を平氣で振るえるの、かな」

ぽつんと、なのはが呟いた。
忌引すべきこの力。アベルはなによりそれを憎んだのではなかつたのか。

「それは、この世界が三重連太陽系じゃないからだと思つ」

護が遊星主と戦う事を決意したのは、アベルがはつきり地球を見捨てる発言をしたからだった。

護の真の故郷はたしかに三重連太陽系だ。しかし、彼という人間を育ててくれたのは、紛れもなく地球という星である。地球こそ、護にとつてかけがえのない故郷なのだ。

だから、彼は戦う。正義のためではなく、大切な故郷を守るために

「自分と関係のない世界ならば、平然と滅ぼす……それが遊星主な

んだ」

「IJの世界はいけにえみたいなもんって訳か……吐き気がするね。
連中には」

ルネは腕組みしたまま、撫然と言った。遊星主の傲慢な性根が、彼女を不快にさせる。

（まるで、あたしの身体をこんなにした、バイオネットみたいじゃないか、ええ？）

返すべき借りが遊星主にはたっぷりあるのだが、IJの会議でそれがさらに膨らんだようだ。

「未曾有の災厄……たくさんの文明の消滅……住人は全て死に絶える……」

かつて、ロストロギアや質量兵器が制作され戦争に使われた旧時代。次元そのものが滅んだ事もあった、狂乱の時代。

「絶対に、停めなあかんな……」

はやは、膝の上で拳を強く握った。
彼女の言葉に一同が頷く。

「IJの後手に回つたら、遊星主の思ひ通りや」

はやはは決めていた。

「遊星主と戦う際にネックになるのはピサ・ソールや

複製・再生能力のあるピサ・ソールが存在する限り、遊星主はいくらでも勢力を回復できる。

「つちらの総力をあげて、ピサ・ソールを叩き潰す。そうすれば遊星主とて敵ではないはず」

管理局から先制的に仕掛ける。それがはやての考えだった。

遊星主の脅威を取り除くため、電撃作戦が考案され、他の諸提督・部隊長らも賛同を示した。

はやては改めて、三提督に協力を求め、伝説の英雄達は支援を約束してくれた。

彼らは管理局の暗部を承知しながら放置し、評議会の暴走やスカリエッティの跳梁を許した事について、自責の念を覚えていた。名目だけの職とは言え、何か行動していれば悲惨な事件の数々を防げていたかもしれないのだ。

辛い役目をはやて達後進に押し付ける形となつた。

次元世界滅亡がかかつた今こそ、自分達の権限を惜しみなく使い、若き次元の守護者達を援けたいと思う。

三提督は自由に管理局を動かす裁量権をクロノやはやてに付与した。上層部の承認を受けた機動勇者隊は、かつての六課よりもさらにスタンダードアローンな組織としての認可を得た事になる。

そうなると、次はピサ・ソールを攻略するために必要な兵器だ。

管理局の草創期より、霸者たらんとして乱を起こせし者やテロリスト等はたくさんいたが、異世界から来た未知の文明からの侵略など、歴史上経験したことがない。ことによると、禁断の技術である質量兵器すら投入しなくてはならないかもしないのだ。

これについては、はやはすでに手を打つてある。

これまで、縁の星の技術をミジドチルダの技術に組み込む実験や試作品は行われていた。

はやはではデバイス製造メーカーとして名高い企業に、密かに新兵器開発を行っていたのである。

惑星級のピサ・ソールを破壊する事を考え、強力な殲滅兵器の開発を依頼した。もちろん、Gストーン等のオーバー・テクノロジーの情報も一緒にだ。

企業の中には、禁じられた技術であるいにしえの質量兵器を研究する部門があり、ある程度の成果を修めているらしい。

ヴァイゼンのデバイスマーカーCW社に、はやはピサ・ソール級の敵と戦える新兵器の開発を発注していた。

後、CW社はACE兵器を開発するが、それはこの時の研究開発が基になつていてるといふ。それはまた別の物語になるのだが……

企業にとって、三重連太陽系のテクノロジーとミジドチルダの技術を融合させるのは困難な課題だったが、開発スタッフは見事にやりこなしていた。それは、GGGのハイテクツールを次元世界の技術で再現したものに他ならない。

はやての手元には陸續と新しいデータが届いていた。

一方で、隊員のデバイスの調整も進められ、フェイトのバルディッシュはG式デバイスとして改造を受けた。

とにかく。

はやは早くとも五日以内に、ピサ・ソールに進攻する事を決め、通達した。さすがに、出撃準備が整うには時間がかかる。

遊星主に逆襲する第一歩がしるされた、その夜。

獅子王凱と天海護はともに夜空を仰いでいた。

一人が居るのは、隊舎として割り当てられた建物の屋上だ。

銀砂の瞬きは、見なれた星座ではなく、ギャレオリア彗星の軌跡も見えないけれど、神秘的な輝きには、つい、魅入られてしまう。星の世界こそ、凱が目指した世界なのだから。

「す」「く星が綺麗だね、凱兄ちゃん」

「ああ。地球の都会じゃ」「んなに澄んだ夜空は見れないよな」

清澄な空気は、やはり自然に囲まれたミシドチルダゆえか。

「なんだか、す」「く遠いところに来ちゃったね、僕たち」

木星に旅した時もこのように思ったが、今度は遙か時空を隔てた異世界だ。

両親の待つ地球上に、無事帰還できるのか。いまさらながら、その不安が少年の胸に去來した。

「心配するな」

ぽん、と、護の背中を叩き、凱が明るく言った。

「きっと戻れる方法があるはずだ。絶対に、諦めるな」

「うん……」

「俺が必ず、お前を」両親の元に送り返す。約束する」

凱は知らなかつただろうが、大河幸太郎は天海夫妻に、護を連れて帰ると告げていた。

図らずも同じ内容の約束を凱は護に誓つたことになる。

「ありがとう、凱兄ちやん。僕は信じるよ。みんなで、地球に帰るのを」

「ああ。そのためには……」

「遊星主の計画を阻止しないと……」

そうだ。

遊星主の野望をなんとしてでも打ち碎き、次元世界を守らなないと。

(戒道、君も……)

囚われの身の彼を救う。

そして一緒に帰るんだ。地球の子どもとして……！

「でも、本当によかつたの？ ギャレオンと戦ひ役目をなのは姉ちゃんに渡しても」

「寂しくはある。正直に言えばな」

これまで共にフュージョンして戦場を生き抜いてきた仲間だ。ギャレオンとともに限り、ガオガイガーは無敵の機神たりえた。

「でも。彼女がフュージョンしたほうが、俺の時より強力になるのは確かなんだ」

スター・ガイガーの実力は彼も垣間見ている。

優秀な魔導師であるなのはがフュージョンしたガイガーは、強化ゾンダーを圧倒したと聞いていた。

ならば。ギャレオンと、ジエネシックマシンとフュージョンするのは彼女に任せたほうが良い。

凱はそう判断し、なのはにギャレオンを託した。

なのはの方は迷うそぶりを見せたが、承諾した。

「今、彼女はギャレオンと話している……。俺がそうしたよつい、ギャレオンに胸の内を明かしていくことだらう」

「ギャレオンが勇者と認めたら」

「認めるさ。そして、誰も見たことのないような勇者王が誕生するんだ……！」

漆黒の天上を見上げると、星がキラキラと輝きながら流れて言つた。

「新しい勇者王……か」

その姿は、護には想像もつかなかつた。

ガオガイガーを越えたガオガイガー。

それは果たして、どのような機体なのだろうか。

護は大いに好奇心を刺激された。

「俺はこの、新しい力をもつと使いこなせるようにならないと

」

凱は視線を《ガオーブレス》に転じた。

凱専用のデバイスだ。

「これで、魔法が使えるんだ」

不思議そうに、凱のブレスレットを眺める。

魔法使い、というとお伽話やゲームのしか思いつかない。

「事象を任意に書き換え、物理現象を自在に操作する技術、か……」

信じられないような技術だが、しかし、その点でいえば三重連太陽系のオーバーテクノロジーや、護やカインの超能力とて地球の常識を越えた存在である。

「少なくとも、この世界の人々は、遊星主みたいに『神』とは僭称してないようだな」

「次元犯罪者にはそういうのもいるみたいだよ。フロイト姉ちゃんから聞いたんだけど、僕が戦つたゾンダーの素体にされた人がそうだったんだって」

スカリエッティはまさに神のよつに振る舞い、たくさんの命を玩んだ広域次元犯罪者であった。

「まだ、悔やんでいるのか。その男を救えなかつたことを

レプリスカリエッティは浄解後、彼が創造した戦闘機人によつて殺害されている。

「だが。トーレとかいう素体は無事に捕獲できただろう。これから

はもう、奴らの思惑通りにはさせないぜ」

「やうだね。凱兄ちゃん 」

地球もノマスター や機界新種の脅威から解放されたのだ。流れ落ちる星の光を見ながら、Gストーンの絆で結ばれた勇者たちは、この世界に早く平和が訪れればいい、と祈っていた。

「凱、護。飲み物持つてきたよ」

後ろから、声が聞こえてきた。

金髪を伸ばした美しい女性。執務官のフェイトだった。手にはカップが握られている。

「すまないな」

「熱いから気をつけてね」

凱は「コーヒー、護にはホットミルクが手渡される。

「……美味しいな」

カップを啜った凱が呟いた。

美味いが、やはり苦みの効いた命のコーヒーがいいとも思った。むろんそれを口に出すことはない。

「あつたまるね」

護が微笑んだ。フェイトはどういたしまして、といった様子で頷いた。

「ルネはどうしている?」

「訓練室で、と模擬戦だつて」

「……あいつも元気な奴だな」

「ことこのりにて彼はそう述べた。
フロイトは苦笑。

「むしゃくしゃして、身体でも動かしていないとまらないんだって」

「付き合われるのもいい迷惑じやないか?」

「そんなことないよ。」もはつゝ模擬戦闘楽しんでるみたいだつたよ」

「同じサイボーグ同士、『氣』が合つのかな」

凱は一人は似た者同士かもしない、とふと思つた。
孤高の戦士と激情家の検査官。だが、どんな状況でも戦うこと止めない闘志の強さが共通していた。

「いい『コンビ』になるかもな」

「やうだね」

ルネについて、護はよく知らないが、Gストーン・サイボーグである頼もしさは感じていた。

「君のバルデイッシュの改造はもう済んだのかい？」

「いま調整中なの。明日には完了するとと思つ」

バルデイッシュ・アサルトは、レイジングハートと同様のGシリヤードが組み込まれることが決定し、実行された。

Gストーンの出力が加わったデバイスは機能が飛躍的に高まる」とは、レイジングハート・ジェネシスの起動で実証済みである。さらに、Gストーンはノジュエルと共に鳴ることで、莫大なエネルギーを発生させることも確認されていた。

この現象をジェイアークに応用すれば、失ったジェイクースを補えるかもしぬなかつた。

それは戦力の補強という意味においても重要な事柄だ。

G式に改良されたバルデイッシュは、ジェイマークの能力向上で期待されていた。

フェイトはデバイスを開発スタッフに任せ、部隊の編成や作戦指導等に尽力していた。

「そつか……それは凄そうだな」

「ねえ、遊星主がまた襲つて来ることはないかな？」

護が危惧を漏らした。

「ゾンダーに、パルパレーパとカインを打ち破られたんだ。奴らも早々には……」

あくまでそれは願望だ。

「ペサ・ソールでも復活せらわれている可能性が強いと思つたぞ
……」

「その時は

凱は拳を突き上げて見せた。

手の甲には、鮮やかな緑色をしたGの紋章が、光り輝いていた。

「また迎撃するまでだ！」

勇者として。

凱は未だ昏睡状態に陥っている命に向けて、そう胸で叫んだ。

最後まで俺は勇者として戦う。お前が俺を信じてくれる限り。

「凱兄ちゃん……」

この青年は今まで何度も倒れても立ち上がり、敵を倒してきた。来る遊星主との決戦においても彼はそうするだろう。
勇気ある者として。
だから。自分も彼のように、戦おう。譲は想いを肯定するように頷いた。

僕もGGGの一員なのだから

「大丈夫。きっと私たちは勝つよ」

フェイントは夜風に髪をなびかせながら、言った。

「私たちには

「

根拠ある答えではない。
これは直感。

経験から解る、直感だ。

「勝利の鍵……エース・オブ・エースがついているのだから」

フェイトは地上本部の地下格納庫にいる幼なじみを思い浮かべながら、一人に言った。

その光景を第三者が見れば、高町なのはが瞑想に耽っているようこ捉えたかもしれない。

淡いライトに照らされた空間に、沈黙のカーテンが巻き付いているようにも思えた。

しかし。余人の知覚できない領域では、なのはとギャレオンとの対話が、行われていたのだ。

宇宙メカライオンの前に立つなのははいま、胸の想いを腹蔵なくさらけ出し、語った。

「貴方はあの時、私を勇気ある者と認め、カインの遺産を使う権利を与えた……」

本局。スター・ガイガーが生まれた戦いでのことである。
ギャレオンは遊星主と戦おうとしたなのはを、真の勇者としてフュージョンさせた。

「お願い。もう一度、あの力を私に貸して」

ヴィヴィオを取り返すために。その理由をはつきりと告げた。

「たぶん……私は初めて、私の力を、自分のために使おうとしている」

これまでなのは誰かのためだけに手にした力を使つてきた。そのために、飛ぶ力を失いかけたほどだ。

だけど。今回は違う。

正義だと、他人のためだと、関係ない。ただ、ヴィヴィオを助けるという目的のためだけに力を振るおう。

ギャレオンには嘘はつきたくない。

ヴィヴィオのためにという我が儘ともとれる思いを、打ち明けた。ギャレオンはじっと、なのはの声に耳を傾けていた。

「私はこう決めたの。ヴィヴィオを救うためなら、いかなる力をも行使しようと」

遊星主を撃ち破るには、ジェネシックの力が必至になるだろう。

「貴方が承知しないというのなら、仕方がないと思う。でも……ギャレオン、私の大切なを取り返すには貴方が必要なの！」

遊星主はジュエルシード強奪に並行して、魔導師の身柄をも狙つていたという。

強力なロストロギア、ジュエルシードを発動させられる魔力の持ち主が必要だからであるが、その候補の中には、なんと、なのはも含まれていた。

拉致したヴィヴィオから聞き出したからか、それとも管理局から情報を探んだかは不明だが。遊星主は魔導師として、極めて高い能力を持つなのはに目星をつけたようなのだ。

エース・オブ・エースの異名は高名であり、はやてやフェイトに次いで目的に適う人材と言える。

ギャレオンが戦闘に入なければ、パルパレーパは彼女を連れ去る予定であった。

遊星主に捕えられたとて、おとなしく言うことを聞くはずもないが、たとえ抵抗しても、パルパレーパにはケミカル攻撃がある。レプリジン・護、凱等もケミカルボトルを埋め込まれ操り人形にされた。

もしも、なのはが同じ目にあえば。

皮肉な事に、因縁のロストロギアをなのはが起動させて次元世界の滅びに手を貸すこととなるであろう。

勿論、なのはには、遊星主の手先に墮す「気はない」。
万が一。なのはが、或いは誰かがパルパレーパの支配を受けた場合、その者」とピサ・ソールを破壊する様に言い渡されている。
非情だが、次元世界を守るためにだ。管理局の皆が、覚悟を決めている。

「でも、私は誰も死なせたくない。だから。ギャレオンの力が欲しいの！」

遊星主を滅ぼす、Gの力が！！

ヴィヴィオがさらわれた時。

なのはは絶望感に浸り、勇気を無くしかけた。
だが、本局の戦いで、なのははまた勇気を取り戻した。

スター・ガイガーとフュージョンした時、激しい闘志が胸に湧き上

がってきたのだ。

新しく生まれ変わったかのような、熱い感覚だつた。

「お願い、遊星主からヴィヴィオを取り戻す力を……」

おそらく、遊星主はなのは達を手に入れるために襲い掛かつて来るだろう。しかし。なのはは敢然と邀え撃つつもりだった。

「遊星主と戦う力を 私に」

ギャレオンの双眸に光が灯つた様に、なのはは思つた。

静かに。

鋼鉄の獅子は星光の娘に、己の意志を伝えはじめた。

格納庫より遙か天上では。

数多の輝きが、空を埋め尽くしていた。
星々の光が美しい夜だつた。

その煌めきを眺めるものたちには、まるで未来を祝福してくれているように眼に映つただろう。

そうならないい、と、護は思つた。 そのなりいにしたい、と。
遙か彼方から届いたあの光が、遊星主により消されないようになに死力を尽くすと。幼い胸に誓つ。

凱は、フェイトと護に言つた。

「さあ、明日も早い。もう眠つたほうがいいんじゃないかな?」

「そうだね」

各人にそれぞれ疲労が溜まっている。

三人は星澄める夜の屋上を降り、自分の部屋に戻つていった。

無人となつた屋上を、二つの月の光が、儂い夢のように照らしていった。

そして。

勇者たちの旅立ちの刻^ひが、訪れる。

第十一話 未来への光（後書き）

物語は最後の戦いへ。

次回、第三部、最終話になります。

第十話 ハローク～星のナビ

闇のなか。幼き少女が泣いている
そのようなイメージが、戒道幾巳の脳裡に浮かんでいる。
柔らかそうな金髪に、左右の瞳の色が違うオッド・アイ。

(何故、泣く?)

戒道は疑問を持つて訊いた。

(ママが……ママがいないの)

(母親が)

その時、ちくっと、戒道の胸に痛みがはしつた。

(母さん……)

地球上に残された養母の穏やかな顔立ちが思い出される。

(ヴィヴィオのママ……助けに来てくれたのに……の人たちが……)

あの人?

(あの怖い人が命じるの……私は嫌なのに……体が言ひたいをきこ
てくれないの……)

(もしや)

戒道が思い当たる存在は、ただ一つ。

(奴に……何かされたのか)

(怖いの……私が私じゃ、無くなる……!)

恐怖に震える声に、戒道は。

(やはり……！？)

彼は、高町なのはこの少女との関係も、この管理局と接触していることも知らない。

だが、少女が遊星主に利用されようとしているのはわかつた。

(ママも、もう私を庇うることもできなくなるの……私はあの人達に逆らつことすら)

少女の意識は絶望に押し潰されそうになっていた。

(諦めるな)

戒道は、ヴィヴィオにそいつ、意思を送った。

(肉体を支配されるのは僕も同じだ)

アベルに囚われ、ピア・テケム・ピットに神経を接続され、遊星主の意のままにされている。

(だけど……心までは奴らの思い通りにはされない)

戒道は必死に、精神の奥底で遊星主の支配力に抵抗していたのだ。

(必ず……必ず、ノガ……ラティオ……が助けに来る)

それまで、絶対に遊星主には完全に屈しない。護に感化されたのか、彼は決して諦めないと強く思った。

(仲間を信じる……！)

(……)

(君は帰りたくないのか、母の元へ　　)

(帰りたいよ！　ママのところへ……)

悲痛な叫び。

(僕も　母さんの元に帰りたい)

戒道の胸には苦いものが拡がっている。
戦士として生きる途を選んだ彼は、養母をあえて省みなかつた。情が残れば、戦いが辛くなる。ノマスターとの決戦と遊星主との遭遇。激しい運命にさらされた戒道だったが、つかの間、複製された地球で過ごす時間を得た。

その時、養母が病から入院を余儀なくされたことを知った。

すべては彼が不在中に起こったことだ。書き置きから、養母は行方不明の息子の身を最後まで案じていたことが伝わってきた。その日。母のいない部屋で、母を想いながら戒道は泣いた。

素直に、彼は母への思慕を吐露した。

そして、戦いが終わったら、今度こそ母の元で暮らそうと決めた。天海護と同じ、地球人の子どもとして……

(だから、僕は負けるわけにはいかないんだ……遊星主なんかには！)

(でも……だめだよ……あの人の『力』には勝てないよ)

少女の心はまだ昏い。

(信じるんだ、君の仲間を、友を、母さんを…)

(ママ……)

(アベルがいかに……僕の創造者だとしても……僕の『勇気』だけは止められない！)

勇気は奇跡を起こす源だと。
護から何度も教えられた。

なら僕は、勇気を忘れない。必ず、アベルの支配を脱し、ここに

(……ヴィヴィオも。戦える？)

(戦えるさ)

(あの人達と?)

(ああ)

気休めではない。彼は本心からそう言った。

(だから。負けるな……)

」はきつと、遊星主に勝つ。

(不死鳥は……炎より蘇る……か)

信じていろ。

(やうだね。私も……ママのもとに帰るために、戦うー)

少女の声には、凜としたものが含まれていた。
どうやら、遊星主に抗う強さが湧いてきたようだ。

(そうだ。僕も、絶対に諦めない)

幼いながら、戒道は数多くの戦場を経験してきた。それが少年に驚くべき勁強さを備え付けさせた。

(ラティオ……いや、天海護はきつとここに来る)

遊星主の飛行空母ペア・テケム・ピット。そして、ピサ・ソールへ。

(勇者達を伴つて)

勝機は必ず訪れる。

その刻を待ちながら、アルマ・戒道幾巳はアベルの支配に抗い続けた。

いつの間にか。

少女・ヴィヴィオの声は熄んでいた。

眠つたか……？

戒道は閉ざされた闇の中、いま、しゃ譲はばづしていだらうと、考えていた。

彼にはむろん、判らないが、外の世界では、機動勇者隊による遊星主逆襲の準備が着々と進められていたのである。

アベルは、この期に至つてもなお、人間の力を蔑視し、軽侮していた。

彼女は、いやプログラムである遊星主は、プラス思念のもたらす力を、量り間違えていたのだ。

まさか、無限の勇気が存在することなど思いもよらぬ。

その認識から、後に手痛い反撃を被ることになる。

だが、この時のアベルは、わが計略が成就することを疑わず、ピア・デケム・ピットのブリッジにて、二重連太陽系再生の悲願が達成される、と昂揚しながら、夢見ていたのであった。

第十―話 ハピローグ～星のナリ（後編）

第三部はこれで終幕です。

第四部は完結編になる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858q/>

悪魔王ナノガイガー 第三部・復活編

2011年5月19日00時55分発行